

---

# たちこね！

五十嵐優哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たちこね！

### 【著者名】

五十嵐優哉

### 【ZPDF】

Z5871G

### 【あらすじ】

夜の街を散歩してたらいきなり誘惑されちゃった…。どうしようボク、×××なのに……！新感覚タチ×ネコラブコメ。

1st · love · Cherry Kiss- (繪書き)

彼・彼女はおつまさんのお心つむに上がつてだれ。

シャワーの音で鼓動の強さは「まかせない。ボクは状況を飲み込めずにただ熱さに打たれ続けていた。このままじゃ大変なことになる。まず、自分がどこにいるのか把握しなくちゃ。

湯あか一つ見当たらない浴槽はジェットバスになつていて、真っ白くて広い。四人ぐらい入つても余裕がありそうだった。全面を飾るタイル地の壁もまた白くて、清潔そうな印象を与えていた。蛇口は黄金色で、わざとお風呂全体を見渡すといかにも高級な感じがした。

「このお風呂はどこにあるのか、それがきっと重要ななんじやないか。記憶を巻き戻してみる。そもそもこんなところに連れ込まれたのは。

『まだかかるのか？』

「ひやつ、そ、そんなことないですっ」

声が裏返ったことについてはふれないで。

今お風呂場の外から声をかけてきた人に、誘われたのがきっかけだった。誘われたというか、誘惑されたといつか……いや待つて、どっちも意味がおんなじだ。やっぱり相当ボクはパニックになつている。でも、それも仕方ないんだよ。だって、

『背中を流してあげてもいいんだぞ？』

「ちよつ、それは大丈夫ですから」

ボクがあわてて返事をしたこの人に、いきなり唇を奪われたんだもの。

あんまり説明してる時間はないっていうか、きっとあとで十分説明の時間があるから（この状況を守れるとは思えないし）その時にするとして、

『ああ、じれつたいなあ』

「わーわーわー！」

……ボクにはもう猶予がないみたいだ。余裕は最初っから持ち合  
わせていないんだけどね。つてそんな冗談言つてる場合じやない、  
どうにかしてこの場を切り抜けないと。

『もう我慢ならん、開ける』

そんな、強引すぎる……！あ、でもきっと力はボクの方が強いは  
ず、この扉を押されて、必死に訴えれば（この場は）何とかなるか  
もしけない。

「おそいぞ、君。私はもう待ちくた……のぼせてないか心配になつ  
たところだぞ」

否定するのが遅いと思います、あまりにも。姿をさらされたボク  
は最後の抵抗でタオルを腰に巻いた。

「あ、あの、もうちよつとしたら上がりますから、それまで待つて  
てくれますか、すぐに向かいますから」

「うん、それなら　いや、風呂場でそのままつていうのもオツで  
はないか？」

いやだからオツとかシチュ萌えとかそういうんじやなくてですね  
つてちよつと目を輝かせてどうしたんですか、鼻息荒いですよ…

…！

「かまわん、いただく」

なまめかしい肌色をさらしたその人はボクを抱き寄せ（ボクは最  
速で腰を浮かせた）そのままボクの胸に埋める。そして、

「ひゃんっ」

「なに、ぐすぐつたいか？」

ナニをされているかは『想像におまかせします。恥ずかしすぎて  
とてもじやないけど言えない。というかここもその、『気持ちいい  
ポイント』だつたりするんだ……つて感心してる場合じやない。火  
照りが止まらなくて倒れそうになりながらも、愛撫する身体を押し  
のけた。驚いた表情を浮かべ、舌なめずり。怒らせたのかもしれない  
とボクの脳が危険信号を発する。涙目になりながら、訴えた。

「本当に、待つてください、ボクにだつて心の準備が……」

これは効いたんじゃないか、とボクはその人の表情を見て思つた。

輝かせていた瞳を伏せ、一言謝る。

「少しやり過ぎてしまつた、可愛い子を見るとすぐこれだ、普通だつたらお繩ちようだいだ、分かつた。大人しく待つてゐるよ

苦笑い一つ。ボクはその表情に謝りながらも内心では安心したのだった。でも、分かつてゐる。ばれるのは時間の問題だと。むしろなぜ気付かないのか不思議なくらいなのだから。

これ以上の籠城は無意味だと判断したボクはさつさとお風呂から出た。下着を身につけ、一応ブラも付ける。パッドのままかしはもう効かない（むしろ喜んでいたような気がする）ので、それは挿まなかつた。ワイシャツを着る。素肌に当たる若干の冷たさが心地よかつた。その裾をフックに噛ませないように気をつけながらスカートを履く。ソックスは履こうかどうか迷つて、結局やめた。どうにしろ脱がされるので気を遣わなくていいかなとは思つたけど、そうした方が喜ぶような気がしたからやつてみた。いや、喜ばれても困るんだけど。

洗面所を出て、さらに広い部屋へ移る。相当にいい部屋なんじやないかな。一見したところ、とても『ソレ』のためのホテルだとは思えない。誰かを連れて行つて、『ここは一流ホテルの一室です』とか言いながら目隠しを外しても納得されるに違いない。アジアンリゾートを意識した室内は木目調の家具で統一されていて、とにかく一つ一つが大きい。テレビもそうだし、ベッドもダブルベッドが二つだなんて、贅沢すぎる。ひとつと一つで済むのだろうけど。ベッドには天蓋が付いていて、ちょっとしたお姫様気分だつた。そして、その人はそこで待つてゐた。

「さつきはすまなかつた」

そう言いながら、ボクをすぐ隣へと寄せる。もう裸身ではなくて、タイトなズボンと少し癖のついたワイシャツという姿だつた。けど身体は密着していて、その人の熱が伝わつてくるようだつた。

「たまに自分が見えなくなつてしまつてね。怖かつたかい？」

「少し」

「ごめん、と言いながら髪を指すくい、匂いをかぐ。その仕草がとても自然で、気持ち悪いとは思わなかつた。お風呂に入らなくてもいいのかと訊くと、子猫に逃げられてもね、と意味深に微笑む。どうやら逃がすつもりは本気でないようです。くさいかな、と服の匂いをかぐのを、ボクは首を振つてやめさせた。独特的、いい香りがしている。香水か何かだらうか。ボクにはよくわからなかつた。

「やさしくするから」

その言葉に重ねるよつて言葉を告げた。

「あの、その前に言わなきゃいけないことがボクにはあるんです」さて、田の前の人気が待ちの姿勢に入つた。どういう風に切り出そうか正直迷う。どう言つたところで何らかの釈明は必要だと思つ。でも、謝罪するのはむこうだ。だつて、無理矢理こんなところまで連れ込んだわけだし。

「……で、言いたい」とつて

よし、とつてもかわいい声を出そう。

「じつはボク……オトコなんです

「ふーん、ん？」

あ、今度は思考が停止しているよ、いや逆のかも。オーバーロードで応答しないみたいな。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

目が点だ。手を振つても反応がない。もう一回呼びかけようとしてところ、反応が戻つてきた。

「私はオトコの胸を舐めていたのか」

「そういうことですね」

でも問題ないと思います、だつてあなた女性だし。

「残念ながら、私は男に興味がないのだよ……さて、話を聞かせてもらおうか」

ん、表情がなんか凍つてませんか？その問いに彼女は答えない。とこうか、さらりとカミングアウトしましたね、ボクもそんなあつ

けらかんとした性格だつたら幸せだつたのかも。

「大体にして、なんでそんな格好してるんだ?」

「うわー、すごい眉間に皺が寄つてるよ。あれだね、何処かのスナイパーも顔負けなぐらいだ。今のうちにスイス銀行に振り込んでおこうかな。そんなことを漠然と考えていて、答えにつまづいてしまつた。」

「早く答えんか」

「いやー、簡単に言えるようなことじやなこいつてこいつか、うまく説明できないっていうか」

「うるさいだまれ……じゃないと吐け」

確かに黙つたら答えられないね。と言つて彼女を怒らすのも困るので、正直に話すこととした。

「よつは、ボク、オンナなんです」

「……遺言はそれだけかね」

ほりやつぱり理解しない。そりやそつかもしれない。身体が男である以上、素人目には認めたがいことではある。学校でもまだ理解してくれない人はいるし、今日初めて会つてそんなことを言われたところで誰もが同じ反応をすると思つ。

「面倒な言い方をすると『性同一性障害』つていうやつで、自分で女として生きてるつもりなんんですけど、身体はこのまま育つてしまつたというか。やつぱり違和感はあるんですね」

そう言いながら、胸やおなかをさすつてみる。まな板と言ひより胸板だし、男としてのソレはちゃんと付いている。でも、別に手術まですることはないと思つている。

「むむ、私は申し訳ないことを言つてしまつたか……?」

いつの間にか眉尻を下げる表情に彼女はなつていた。ボクはそれに首を振る。余計なことだけど、その前の険しい顔とのギャップがかわいらしいと思つた。

「ううん、そんなことないです。女装ができれば性自認に関しては満たされますし。……やっぱり変ですよね?」

「確かに理解は難しい。でも、受け入れられないわけじゃない」

「ありがとう」

ボクは短く答えを返した。下手に同情されたら縁を切るつもりだつた。

「それに」

「それに？」

「こういうのも、ありだな」

いや、ちょっと待つて、受け入れるってこっちの話ですか？ボクは素直に話せばこの状況から抜けきれると思ったのに、なんで押し倒すんですか？、ちょ、首元にキスしないで、制服を脱がさないで……！

気持ちのいい朝、教室に着くなり大あくびをしたボクに、彼が苦笑した。

「おいおい律<sup>りつ</sup>、かわいい女は大口なんか開けないもんだぞ」「骨太なその声にあわてて口を塞ぎ、会釈をかえす。

「今度から気をつけるよ、純平<sup>じゅんぺい</sup>」

そう、彼に返事をしながら席に着いた。彼の席はボクの前で、黒板に近いところだ。彼はすぐ居眠りをするので教師の面前と授業の始まつた早々から決められた。ちなみにボクはぐじ引きで決まつたつて、別に話すようなことじやないか。純平と違つて教師に目を付けられたわけではないこと。あと言わざもがな、ボクが男だつてことを彼は知つていて。

ホームルームまではしばらく時間があるから、人もまばらだ。もう一つあくびをすると純平が椅子をボクの方へ向けた。部活で引き締められ、かつ筋肉で太い身体はブレザーにとつても似合つていなかつた。どちらかと言わなくとも学ランがよく似合ひそつだ。彼はボクを一瞥すると、首をかしげた。

「なんだ、昨日寝てないのか？」

たしか、彼の両腕には五キロのリストウェイトが巻かれているんだよなと思いつながらあまり寝られなかつたことを告白する。もちろん何があつたかは伏せた。

「あんまり寝不足つてのはおすすめしないなあ、ちなみに俺は毎日十一時間睡眠を実践してるぜつ」

「一日つて何時間？」

反射的に質問が出てきて、彼は不服そうに顔を曇らせた。

「おまえ、俺を馬鹿にするなよ？ そんなの幼稚園児でもわかるつーの。……ああ、一日は一十四時間だよな、だから」「だから？」

## 「四十八時間」

「あなたはちがう星の人ですかあ？」

ボクがツツコミを入れる前に声がして、顔を上げる。ちんまい女の子と言つちや失礼だ。がボクたちに向かつて腕組みをしている。今時、蛙のキャラクターがあしらつてある髪飾りなんて幼稚園児でも付けないだろ？

「おはよう、みお美緒先輩」

「おはようです、りつちゃんくん」

挨拶もそこに、彼女は質問に戻つた。

「どうか一回答えが出てたじやないですか？」

「それは、納得できなかつたからだ」

訝しげに眉を寄せる先輩。その仕草もちよつと愛らしい……別に惚れてるわけじやないから、そのへん勘違いしないよつて。納得できなかつたとは、と説明を促す彼女。

「一日が二十四時間だとしたら、俺はその半分眠りこけてるということになつちまつ」

きつとそれ、事実。十一時間睡眠を実践しているのなら。

「だから、保険として倍にしてみた。どうだ」

「あなたの保険のために地球の自転のスピードを遅めるのはやめてくださいです」

冷静な（しかも知識ありげに）ツツコミを入れるさまと制服を着た小学生のギャップがすさまじい。いや、ませた女の子としてみればいいのかな？

「いや、昼と夜が一回来ることにすればいいんだ。そうすれば地球のことを心配せずにすむ」

「どうか問題が地球規模に発展してゐよかつてからーーこれ以上話しあつたところで平行線は避けられそうになかつたので割り入つて話を中断させた。なんでそんなに不服そうなんだ二人とも。ツツコもうか悩んだけど、わざと純平の話に納得しかけてなかつた美緒先輩？」

「そ、そんなことないですよ？むしろそれ一日間でいいじゃんと言  
い返そうと思つてましたですよ？」

それは全くツツコみきれてない。ぐだらない話をしていると時間  
の消化が早い。そもそもホームルームの始まる時間だ。教室に戻る  
ようになつて彼女に促す。

「でも、その前に」

首をかしげるボクの隙を突いて抱き付く。背の低いボクより小さ  
な少女は満足そうに溜め息をつくとぼつり、呟いた。

「君が女の子だつたらいいのに」

言つたあとで気がついたのか、すぐに顔を上げて舌を出す。謝る  
ほどのことじやない。でも彼女の謝り方は心から伝えてくれるそれ  
だから胸心地は悪くならない。

「またおやすみ時間にねー」

それつて就寝時間じゃないのというボクの疑問は口に出さなかつ  
た。ボクたちは元気娘を見送つてからホームルームが始まるまでの  
時間雑談をしようとい人の会話に戻ろうとした、そのとき

「お、どうした？」

ボクは彼のその問いに答えられなかつた。視線と意識は違うほう  
を向いて止まつてしまつた。肩に掛かる黒い髪は廊下を歩くスピー  
ドに合わせて揺れる。ボクの世界はゆっくり時が流れた。見える角  
度が変わるにつれて、見える表情が露わになつていいく。首元のほく  
ろ、すつきりした頬は笑うとえくぼになる。モデルのような鼻、主  
張しすぎるこのないそれには細めの瞳が似合う。前髪は垂らしつ  
ぱなしだつた昨日とは違い、ヘアピンで分けてあつた。視線を落と  
せば小振りな胸。もう一度、視線を上げる。

目が合つ。一番静かに遅く、時間が流れる瞬間。

昨日は見られなかつた表情。瞳を大きく開け、口を開くそれは  
きつと驚きだ。新たな発見とまだ残る照れくささでボクの頬はゆる  
んでしまう。ボクはあとで、と口パクで告げてみる。彼女は頷  
いた。きつと、伝わつたのだと思う。そう思いたいという願望では

ありませんように。そうして、時間はスピードを増し、元のそこまで戻った。彼女を隠すように教師が入り、またいつも月曜日が始まる。ボクは静かに唇を指でなぞつた。……まだ残っている唇の感触を確かめるために。

授業中、何も手に付かない。黒板の字は確かに読めるのに、[写そ]うという気が起きない。あとで友達のノートを借りよう。純平のは頼りにならない。だつて、寝ぼけて宇宙文字を書いているか字が汚いかの一択しかないのだから。しかもその一択、どちらを選んでもはずれ。だつたら安全な方を選ぶよボクは。

溜め息ばかりついていたら休み時間、純平に訝しげな表情をされた。

「おまえ、パンクでもしたのか？」

「……なかなかセンスのある質問だと思つよ」

けれど、彼が彼なりにボクを元気づけようとしていることはわかつたので嬉しかつた。そして、あまり心配させても困るので気合いを入れ直して授業に向かうこととした。昼休みまで、あと一时限。彼女との再会までそう遠くはないはずだ。と、一つ思い直したことがあつた。昨日会つたというだけで、ついさっきまでこの学校の在校生だとも知らなかつたし、ろくに名前も訊いていなかつたのだ。夜の街を散歩してたボクにいきなり声をかけ、唇を奪い、（女としての）ボクを虜にしてしまつた彼女。なんでそんな肝心なことも訊かず夜を明かしたんだろう。ボクは彼女のことなどをどう呼んだんだろう。うまくは思い出せなかつた。

ちなみに、彼女は昨日の夜、ボクの首元にキスしたぐらいでとは頬ずりとか猫なで声を出しながら悶えてました。それ以上の展開はないんですから。勘違いしないよーに。

昼休み、純平の誘いを断つて教室を出る。ぶーたれたいかつい顔が明日カツサンドおごりなどか言つていたが全然ボクには聞こえなかつたよ、うん。かわいい女の子（心が）にそんなことをさせるなんて間違つてるんだぞつて、ずいぶん都合のいいアイデンティティだよな、ボクのそれは。

結局ボクは何になりたいんだろうとか微妙に重いことを考えながら学校を散策してみる。彼女がどこにいるのかあてもなかつたのでもなく探してみるしかなかつた。思考を一時中断して、いろんなところを見やるといつもは気にもしない細かいところが目に行く。例えば窓についた指紋だとか、壁に付けた鉛筆の落書きだとか、廊下に無造作に置かれているかわいげのない蛇のぬいぐるみとか「つてそれがここにあるのはおかしいっ

「「めーん、それ私のですー」

ぬいぐるみ（にしてはやたら光沢がある）を持ち上げて顔を上げる。申し訳なさそうに両の手を合わせた女の子が小走りでやつてくれる。ボクはそれを手渡した。

「ありがとうですよ、りつちゃんくん

「どういたしまして、美緒先輩」

ところで、と彼女の口調が変わる。何かおかしなことでもあつただろうか。怒つてもかわいいから困る。きっとクラスではマスクット的存在なのだろう。

「さつきマロンちゃんをばっちく指で持つてたのはなんでかなあ？」  
いや、だつてそれちよつとヌルつてしましましたよ？

「うーん、きっとそれただの仕様

触るとぬるぬるするぬいぐるみつて聞いたことがないんだけど、どう対応した方が安全なかしら。

「巻きますか？　巻きませんか？」

「巻きませんっ」

ボクは即答した。ただのぬいぐるみだから大丈夫なのに、という彼女。その一言からはそういうニュアンスが伝わってこないんです……！マロンちゃん（という名前らしい）を首に絡ませ、にこにこしながら彼女は去つていった。あまりのインパクトに質問をしそこねてしまった。といつても身体的な特徴を伝えたところでわからぬいだらうし、しょうがないと片付けた。

また搜索が始まる。限られた時間で彼女の姿を見つけられるとは思わなかつたけど、何もないよりはいい。もとより、ボクは探検とか探索とかすることが好きだ。よく男の子に混じつて遊んでスカートを汚したつけな。昔から女の子のつもりでいたんだけど、家でじつとしてるタイプではなかつた。ほら、よくいう行動的な女の子。ボクはそんな感じだつた。

ボクは一階まで降りて、引き戸に手をかけた。芝、緑木、草花がそれぞれ協和する空間。古びた学校の唯一胸を張れるところ。この中庭はコの字型に建てられてた校舎を挟んだところにあり、よく日が当たる。用務員の方が毎日手入れするおかげもあり、とてもよく整備されていた。そう人気の多い場所といったこともないのだけれど、シートを広げ昼食をとる人たちの姿があつたりする。騒がしくなく、かといつて寂れていない居心地のよい場所だつた。

おなかが空いているのもすっかり忘れ、人探しに夢中になつて、それゆえに彼女の姿を見つけることはできなかつた。

ボクからは。

「みつけたつ、私の子猫さん」

制服の上から胸をもみしだいてくる。ボクにそれがないつてわかつてゐるでしょ……。

「あれ、意外と胸あるんだな？」

「パツドです」

短い解答におなかを抱える彼女。そんなにおかしなことかな？ひ

としきり笑つたあとに、またボクに抱き付いた。さすがに気がついたのか、お茶会をしていた数人や窓からボクたちの姿を見かけた人たちがボクたちを見てくる。目が合つとそらすあたり、やましいことでも考えていそうな気がした。

「一つ提案がある」

肩にのせていた顔を上げ、ボクを見つめる。まっすぐすぎて、直視できない。ボクは頬に熱を帯びていくのを感じながら、首肯した。

「なんでしょう」

「性転換しないか」

ストレートすぎます。それにそこまでしようとなんて思つていない。いすれはきっと……このままではいられないのだから。残念がる彼女に微笑みだけを返す。立ち話も疲れるだらうからとボクをベンチへと誘う彼女。

「きつと君のことだから、私を捜すので頭がいっぱいだつたんだろう?」

そんな君のために多めに作つてきたんだよ、と弁当箱を広げる。はい、と彼女の手にあるのはサンドイッチ。ボクがそれを手に取ろうとすると訝しげな目をされる。カツの入つたそれが遠ざかる。こうじつときは口を開けて待つものだといつ。

「つて、は、はずかしいですよ……」

気にするな、ほら、と促される。彼女が喜ぶのならそれでいいか、と思つて口を開ける。一口だけかじり、味わつてから飲み込んだ。

「おいしい」

自然に、頬がゆるむ。どうおいしか説明するのも野暮つたいぐらいだ。説明せずに、ボクだけの知る味にするのも悪くない。そう思えた。

「本当か?」

料理好きのボクが言つんだから間違いないです。そう微笑みを彼女に向けると、満足そうに目を細めた。食事の続きを彼女がせかす。ほとんどボクがサンドイッチを食べてしまつた。

「食べなくていいんですか？」

そう訊くと、あんまりおなかは空いていないんだと答えが返つてきた。

弁当箱が空になると同時に予鈴が鳴る。ボクは心からお礼を言つた。

「食べたいものがあつたらなんでも言つてくれ、おねーさんが腕を振るうぞ」

氣丈よさそうなはればれとした笑いをボクに見せてくれる。白い八重歯がのぞき、また一つ彼女のチャームポイントを見つけた。これからいくつ見つけられるだろ？ 楽しみでしかたなかつた。

別れ際、ボクは彼女の名前を訊いた。今までよく会話できたな、と苦笑混じりに彼女は言った。女の子らしい名前ですねと率直な感想を述べると彼女はむくれた。

「むむ、私はこれでもれっきとした女の子なんだぞ、ちなみに一つ先輩だ」

そのあと、一人で微笑みを交わした。じゃあまた会いましょう。そう言つともう一度ひしと抱きしめてくれた。ボクはその名前を忘れないように何度も、何度も心に刻んだ。

放課後になるまでちゃんと純平に中庭での出来事で冷やかされた。彼はこれから陸上部の練習へ向かう。ほんと、朝練だつてあつたのによく身体が動くなあと感心する。ボクならランニングでへばつてしまいそうだ。小学生のころはよく動いたけれど、中学のころからさつぱり運動しなくなつた。色々あつて、一人で遊んだり本を読むことが多くなつたからだつた。そんな内向的な世界から引っ張り出してくれたのは純平だつた。彼の背中を見送りながら、改めてありがとうと思う。

ボクは教室を出る前に、ぼんやりとグラウンドへ目をやつた。新人戦が近づいていることもあつて、そこは活気に満ちあふれていた。この学校は部活動が盛んで、運動部文化部問わず優秀な成績を上げている。ボクも一応部活には入つているものの、幽霊部員状態になつていた。ボーダーゲーム部なんて、あつてないようなものだし、そもそもつじつま合わせで入部を頼まれたので行かなくてもいいことになつていた。一年以上行つていなければ、行く意味もないし。

人気のなくなつた教室を出た。階段を下り、玄関に向かう廊下は人気もなく、春が過ぎたのに少し肌寒い。なんとなく通り過ぎている道でも、不安になつているボクははたして何を気にしているんだろう。気を取り直して美術準備室の横を通り過ぎようとする。

耳がざわついた。

玄関はもう目の前だ、そのまま帰ることもできる。第一、何かの聞き間違えかもしれない。でも、聞き覚えのあるその音は無視できない要素でもあつた。振り向いて、音がした方向へ向かう。足音は立てないように。確かに、聞こえる。とても、微かだけれど、その微かな声はボクの耳に届いた。

それと同時に罪悪感も芽生えてきた。美術準備室の扉の前まで来ると話の内容がなんとなく分かつた。そして音が漏れている理由も。

やや開いた引き戸はまるでボクを誘っているようだった。ボクが取るべき行動は一つのはずなのに、取ってはいけないそれを選んでしまいそうになる。少しだけ残った理性がボクを思いとどまらせる。けどそれも 突然膨らんだ甘い声に消された。

大きな声を出しちゃいけないとたしなめる。ボクはその声の主を確かに一步踏み出す。隙間から覗き見えたのはこの場所にはふさわしくない、甘く苦い世界だった。

ボクの目に映る一つの横顔は恥じらいと期待で朱に染まっているようだった。制服はわずかにはだけ、肌の色が露わにされていた。一人は腰を下ろし、一人の女生徒を後ろから抱き寄せている。抱き寄せる彼女の片方の手はあごをなぞり、もう一方はゆっくり身体を愛撫する。目を離したいのに離せない。その行為に夢中になつている彼女たちが自分の知らない人だったら、すぐに目をそらしだろう。確かに抱かれている人は知らない。一年上なのは校章のバッヂの色で分かつた。でも同じ色のそれを付けるもう一人は、ボクの知つていてる人だつた。

思考がぐるぐる回る。疑問符ばかりが浮かんでくる。なんで、の問いはその数を増していく。その時点でボクは彼女に惹かれてしまつていたのだと気付かされた。たつた一日の邂逅だったのに、ボクは彼女を必要としていた。だからこそ、この風景は 痛い。この感情は言葉にできるものなのか、ボクにはよく分からなかつた。嫉妬？……違う。怒りじゃなくて、もっと切なく纖細なもの。ふと、彼女の一言がよみがえる。 残念ながら、私は男に興味がないのだよ やつぱり、ボクは彼女にとつて意味のないものなのかな。ボクの身体は、女の子とは違う。どれほど女の子らしくあっても、それゆえに、女の子『らしく』でしかない。ボクは、ボクは 静寂は急に破られる。

気付いたときにはボクの手から鞄が落ちていた。地面はそれを呼んで、騒がしく存在を主張させる。息を飲むボクは鞄から隙間へと目を向けた。彼女と視線が合う。ボクは耐えきれなくて目をそらし

た。ずることをしたのはどっちか、もうそんなことどうでもいい。ボクはもう一人の生徒に気付かれないうちに鞄を廊下から奪つて、逃げるようになつて美術準備室をあとにした。

ああ、視界がぼやけている。玄関はどうなんだろう。ボクは前に進めているのかもわからない。歩みがやがて止まる。頬に伝うしょっぱい水は、きっとボクの心だ。この泉が枯れ果てたら、すべて元通りになりますか？我慢すれば、この思いを閉じこめれば、彼女は幸せになりますか？もしそうなら、ボクはそれを選ぼう。難しいことじゃない。難しいことじゃないんだから……。

だから、そんなに優しく後ろから抱きしめないで。こんなに早い結末だつたけど、あなたに会えて嬉しかつたから。

「そんなこと、言わないでくれ」

でも、あなたは彼女を選んだ。ボクはどう悪あがきしても男になるしかないなら、あなたの理想にはなれない。

「違う、話を聞いてほしい」

これじゃ、あなたの方が男みたいだ。泣きたいのか、笑いたいのかわからなくなつて口元が歪む。彼女は抱きとめる腕を弱めない。強く打ちつけつづけていた鼓動と逃げ出したい気持ちは自然に静まつていく。けれど、消えない。この痛みだけは。

「彼女のこと好きでやつたわけじゃないんだ」

「ひどい人です」

反射的に、そう言つていた。あなたは好きでもない人を抱けるの？あんな、甘い囁きを誰の耳元へでも伝えられるの？そんなずることつてない。

「あの人にもそやつて言うんですか？……君のことは愛してないんだつて。あの人のことあんなにして、それでも愛してないんだ」

彼女の腕をとると、力なくしがらみは解けていった。ボクは向き直り、涙を制服の袖で拭いた。今のボクがどんな顔をしているのか、彼女の瞳からはうかがい知ることができなかつた。無言の彼女に、

ボクは別れを告げる。

「彼女を、選んであげてください」

今のボクは、うまく笑えているんだろうか、よくわからなかつた。「ボクは、あなたに会えて本当に楽しかつたです。……ちやんと名前も呼べなかつたけど、あなたに触つてもらつて、すぐくどきどきしたけど、恥ずかしかつたけど、それ以上に、嬉しかつたです、だから

だから、これで最後にしましよう。傷付くのはボクだけでいいから。

「あ、あの、なんかシリアスなシーンおじやましてすみません」新たな声に足が止まる。ほんとは足を止めるべきではなかつたのかもしれない。でも、ボクは立ち止まり、振り向いた。

さつきの女生徒がふたりの様子を見ていかにも拳動不審な様子であわてていた。

「わ、わたしにはなぜこんなことになつているのか全く理解が追いつかないのですが」

ボクより背の高い冷静な彼女も首をすくめる。

「さつきから全く話を聞いてくれないんだ、おかげでひょつと修羅場。代わりに説明願いたい」

頷いた女生徒は一度何もないところにつまずいてから、ボクに向き直つた。背はボクと同じぐらい。さつきはしていなかつた眼鏡をかけていた。

「簡潔に申し上げますと、私、部長にマッサージをしてもらつてたんです。確かに体勢は怪しかつたですが……」

……さて、状況を整理しようか。ボクは何を見て、何を見てないのか。それとも、その余裕すらないのだろうか。

「そもそも、のぞき見したのはどこの誰だつたかなあ？」

「私は肩周辺のマッサージしか受けてないんですけど。なぜあいを触つていたのかはよくわからないですが」

「あれは顔の引き締めだ。ちゃんと意味があつてやつてるんだぞ」

涙が引つ込んでいく、それはもう鮮やかに。驚くぐらい。なぜ、ボクを美術準備室へ連れ込もうとしてるんですか」「一人とも！」「何、君も同じことをしてもらいたいんだろう？」「乙女」一人にされるなんて天国じゃないか、これ以上何を望む？」「私を困らせた罰だ、と最後に彼女　菜月清華さんはにんまりと笑うのだった。

夜、三面鏡を見つめるボクはどんどんかわいらしくなっていく。化粧のテクニックではまだかあさまにかなわない。どうしてチークが自然にたたけるんだろう。ボクがやるどどつしてもわざとらしくなつてうまくいかない。

かあさまは最後に背中まで伸びた髪をすいて、肩をたたいた。鏡に微笑む。ボクは田の前の自分に見とれていた。まるで、「私たち姉妹みたいね」

かあさまがボクの気持ちを代弁してくれたように、鏡に映る二人が親子には思えなかつたからだ。ボクは童顔だし、かあさまも母というより仲のいい姉のような身なりだからだ。背もボクとあまり変わらない。ボクは胸がくすぐつたくて目を細める。

「うん、かあさまの言うとおりだと思う」

ふわふわとしたフリルのついた寝間着を彼女は着ている。かあさまがボクに化粧や女装をさせるのはボクが幼いころからの趣味だつた。そしてボクはそれを違和感なく受け入れてきたし、これからも続けると思う。どんなメイクのお仕事よりも、ボクをメイクしている瞬間が一番好きだと言ってくれる。そのことがとても嬉しい。玄関まで見送つてくれたかあさまに、ずっと訊きたかったことを口にした。

「なんで、とめないの？」

心底不思議そうに首をかしげる彼女。靴を履くために彼女に背を向けた。

「だつて、こんな夜中に出歩くなんて、普通だつたら止めない？」

「あら、つっちゃんはママに止めてほしいの？」

そうじゃないけど、とボクは口ごもる。するとかあさまはかがんでいるボクを後ろから抱きしめた。

「もちろん心配よ、暴漢に襲われないかつて夜も眠れないぐら」

暴漢ではありませんが女性に襲われたことはあります、と言おうと思つたけどやめた。話がこじれてしまつ。

「でも、りつちゃんのこと信じてるから。それに、どんなに遅くなつても帰つてきてくれるしね」

さらりと言われ、頬が暑くなる。まるで子供を寝かしつけるかのよつた優しい声が耳を通して胸に響いた。温もりが不意に離れ、ボクは後ろを振り向いた。

「今日は人に逢いに行くんでしょう?」

……なぜわかるのですかあさま? その問いに彼女はとぼけてごまかした。

最終のバスに乗り、三十分ほどで駅前に着く。いつものことだから運転手さんも素性を訊いたりしない。降りると不意に風が吹き付けて身体が震えた。制服に軽い上着で十分だと思っていたけど甘かつたみたいだ。もう五月といつても、そうだからこそ温度差は激しい。足に鳥肌がたつてないか確認して、スカートの裾をなおした。

大通りに出ると、いくつかの群衆がまとまって行動していた。大声を出して、馬鹿笑いしながら歩く様子を見ているときつと酔つているのだろうと思った。スーツ姿の人たちがいれば、大学生なんだろう、私服の人もいた。

ボクはそんな人たちを避けたり気付かれないように小さくなりながら、駅に背を向けて大通りを進んでいった。そんなことしなくても気とめる人なんていないことはわかつていた。でも、気を抜くことはできない。こんな夜に、味方は一人しかいないのだから。

裏路地に入る、待ち合わせの場所まではもつ少し。少し肩の力を抜く。それがいけなかつた。

「ねえ、君。こんなところでどうしたの」

熱っぽい声はうわずつて汚れている。ボクは無視するよつと道を急いだ。それでも声は耳に入つてくる。

「なんで逃げるの、どうせウリでもやつてるんでしょ」

つるさい、勘違いするな。振り切ろうとした瞬間、男が走り出してきた。不意を突かれてスタートを切るのが遅れる。たやすくボクに何かが触れた。首だけを動かし、それが腕であることを確かめた。……こんなやつがいることに腹が立つ。力のないボクはたやすく男に捕まり、無理矢理振り向かせられた。

何処かおかしな方向を見ている男。身がすくみ、どうしたらいいかわからなくなる。

「こうしてほしかったんだじょう、黙つてないでよ」

なでつけるだけの愛撫に吐き気がしてくる。ボクは必死に清華さんを呼ぼうとした。けれど、声が出ない。

「すぐに気持ちよくしてあげるから」

「ほう、ならば私が先に逝かしてやる」

その言葉をきっかけに、男の力が弱まる。気付けば首に回された白い腕がしつかりと男をとらえていた。男も強く抵抗しているはずだけど、その後ろの女性は涼しい顔でホールドしている。

「一度と女子に手を出さないと誓つなら、この腕を放してやつてもいいが」

「な、なんだ、このあま……ナイチチが」

「お前が死に憧れていることはよくわかつた」

ぐつと力が込められる。同時に男が蛙の鳴き声のようなうめき声を上げる。少し間をおいて彼女が力を弱めると横に団体のでかい男は力なく崩れ去った。

「心配するな、殺してはいない」

男に襲われたことよりも目の前の女性の強さに驚きを隠せない。それを心配ととらえたのか清華さんは男の無事を伝えたのだった。立ちすくんだボクの制服を直してくれる。最後にほこりを払うよつにスカートの脇をたたくといつものようにしつかりと抱きしめる。

「遅くなつてすまない」

もう大丈夫だからな、と言つてくれる。しばらくやうしたあと、身体を離した。自分の胸をなでながら、疑問を口にする。

「胸の小さい女はその、嫌いか？」

清華さんでも気にするのかと新鮮な気持ちになつて、ボクはつい笑つてしまつた。

「むむ、失礼なやつだと思わんか？」

「ごめんなさい、だつてかわいい」と言つたんですもの」

なおさら失礼だ、とすねた彼女は頬を膨らまし、そっぽを向いてしまつた。謝つても、なかなか目を合わせてくれない。こんなときの奥の手、はたして効くだろうか。

「清華さん」

「なんだ」

「キスしたら許してくれますか？」

ばかもん、と小さく小突かれた。それでも、彼女の腕を掴んでみる。抵抗は、なかつた。もう一方の腕も掴み、ボクに向き合せれる。う……今の清華さん、すごく熱っぽくボクを見つめてきて、その、ものすごくかわいい。かわいいなんて便利な言葉じゃダメだ。ものすゞく、愛おしい。

「ばかもん、そう言われたら……許せないわけがないだろ」瞳を閉じる直前、そう愚痴る彼女の声が聞こえた。

「 いの人、まだ起きませんね」

よくよく冷静に考えれば、この状況はあまり喜ばしいものじゃない。とはいうものの、放つておくわけにもいかないし、

「 ほつておけ」

と、提案する前に答えた。汚いものを見るような目つきで、もつとも、彼女にとつてはそつだと思つ それを一警する。

「 自業自得だ。女子供に手を出そうとするやつは死ねばいい」

さりりと恐ろしいことを言つてくれる。こめかみに皺を寄せ、視線をそれからそらす。清華さんはボクを見るこりにはすっかり笑顔になつて、ボクに目を細めた。まあ行こう、とボクの手を取り促す。教訓、清華さんを怒らせると怖い。

最初に会つたときに履いていた黒のタイトパンツ、灰色の上着の上にジャケットを羽織つている彼女は凜々しく、夜の闇に溶けることなく歩みを進めていた。手を繋いでいるからはぐれることはない。さつきまで感じていた寒気も彼女がいれば気にならない。

「 今日はちょっと寄りたいところがあるんだ」

そう言つ彼女はどこか嬉しそうで、語尾が弾んでいくようにも思えた。大通りを堂々と歩く清華さんと、恥ずかしさで下を向くボク。この一人は道行く人にどう映つているんだろう。それとも誰の目にも映らず、風景の一部にちゃんとなれているんだろうか。よくわからなかつたけど、彼女がいてくれるから不安にならずにすんだ。ボクが彼女に目をやると、彼女もボクと目を合わせてくれた。そこで立ち止まり、道端でほつねんと突つ立つて自販機を指した。

「 あそこで一休みしよう」

気を遣つてくれたのかもしれない。歩いて数分も経つていなかつたから疲れていなかつたけれど、その言葉に甘えることにした。彼女は無糖のコーヒー、ボクが果実入りのオレンジジュース。自分

で買おうと思つたら清華さんに断られた。やつぱり温かな飲み物にしとけばよかつたと舌を出すと彼女が苦笑した。とりとめのない話をして、今度は手を繋がずに、田的で歩いた。

大通りをまっすぐ、駅からはずいぶん遠ざかる。目の前に四車線の大きな橋が見えた、その手前の信号を渡つて左へ折れる。ぐつと人気が少なくなつた。時折タクシーがボクらの横を徐行して、やがて遠ざかる。それぐらいのものだつた。裏路地に入り、目に入る古ぼけた看板は切れかかったライトで照らされていた。そのいくつかを通り過ぎて、彼女の足が止まつた。

店内に入ると人の良さそうな若い女性が出迎えてくれた。ダイニングバーよろしくの店内には他にお客さんはいないようだつた。小声で清華さんに尋ねると親戚が開いているお店だということを教えてくれた。ボクたちはカウンターに座る。キッチンではいかつい男性が小さな「ップ」を丁寧に拭いていた。

「マティーー」

「嬢ちゃんにはまだ早いぞ」

そう言いながら、カクテルグラスに紅色のシロップと碎いて細かいかけらになつた氷を入れ、硝子ビンに入った液体をそこへ満たした。小さな泡がかわいらしく揺れる。

「これは何?」

一口飲んだ彼女が不思議そうにグラスを見つめる。

「シャーリー・テンプル」

そう言って、マスターは簡単なレシピを彼女に教える。アルコールが入つていないと知つて不服そうに田を細めると、彼は豪快に笑つた。

「そんな顔をするお子様にはぴったりだらう? んで、おまえさんはどうするんだ」

どうする、と言われてもこんなお店には來たことがないし、お酒の知識もないのに悩む。どうじょうかと思いあぐねてみると清華さんが助け船をしてくれた。

「プッシー・キャットを出してやつてください」

「わかつてゐるじゃないの」

にんまりとするマスター。正直大熊が口を開けたのだと思いまし  
た、はい。彼が色鮮やかないくつつかの液体と氷をショーカーに入れ  
てかき混ぜている間、さつきのママさんは棚をいじつっていた。やが  
て懐かしさを含んだ音楽が流れ出す。

「ベイカーブラザーズのセカンドか、悪くない」

「さやちゃん詳しいわねー」

カウンターに置いてあつたタンブラーを片手にママさんは瞳を輝  
かせる。

「私が好きなのは、彼らのように狙つて懐かしいサウンド作りをす  
る人たちなんです。ただ古いだけのものとか、ただ新しいだけもの  
にはあまり興味がない」

そうグラスを空けた彼女はおかわりを頼む。了解したマスターが  
ボクの元にグラスを置いた。赤みがかったオレンジに、スライスさ  
れた果実が飾られている。甘酸っぱさがなぜか胸を締め付けた。ち  
びちびと飲みながら、なぜこれを頼んだのか気になった。

「マスター、『プッシー・キャット』ってどういう意味なんですか  
？」

そう訊いた途端、またもや意味深な笑顔を浮かべ、ヒゲをとする。  
そしてボクの横で清華さんは難しい顔で口元を歪ませていた。酔つ  
てもいられないはずなのに、彼女の頬が赤くなる。

「さあな、あとで嬢ちゃんに訊いとくれ」

その通りにしようと思ふ、その質問は先送りすることにした。し  
ばらく音楽に身を委ねる。清華さんは一人と音楽や身の上話をして  
いた。段々とぼんやりしてくる。睡魔がまとめて、一気に襲つてき  
たみたいだった。

……肩を揺らされるまで、ボクは寝ていたらしかつた。眉尻を下  
げ、軽い溜め息をつく清華さん。

「置いてけぼりにしてしまったか、その かわいい子猫ちゃん」  
頬をかく。ボクは一瞬きょとんとしたあと、何を言われたかはつきりした瞬間に熱が上がった。こういうときに浮かぶ言葉なんて、何もない。マスターは腹を抱えて笑い、ママさんが彼を酔い半分に止めていた。

また来る、と彼女が一人に別れの言葉を告げ、店を出た。少しあ  
酒の匂いがする。『まかす』ように彼女はガムをかみ始めた。ボクに  
も一粒くれる。苦く、冷たい。皿がさえたところで、清華さんはボ  
クに尋ねた。

「夜中で歩くよつになつたのはいつごろから?」

それは高校に入る前の春休みからだつたから、『ぐく最近の話だ。この姿で夜道を歩いてみたかつたと話すと心底からとも思えるほど

「さつきみたいな経験をしたのは？」

それは実は初めてだつた。注意深く行動していたつもりでいたし、あまり危ないところに行かないようにしていた。

私みたいな、というかいきなり壁に追い詰めて唇を奪う人なんてあなた以外知りません。そう言つても最初は納得しない彼女。真剣なやりとりをする前に一人とも笑えてきました。

「 そ う だ な 、  
た し か に そ う だ 」

二人は違う方向の列車に乗って、一緒に帰った。そして日付が変わる前にボクたちは別れた。

寝不足のまま夜が明け、ボクは大きなあぐびをしながら緩い坂を上っていた。桜が散つたのは一ヶ月ほど前のことだ、今は日に鮮やかな縁道となつていた。まだ寒い夜の風も、朝になると柔らかくボクの素足をなでていった。ひとつ背伸び。細めた目を開けると、見覚えのある後ろ姿を見つけた。走つて、彼女に追いつく。息を整え、挨拶をした。清華さんは微笑み、挨拶を返してくれる。見上げる彼女の後ろから日が差し込んで、まぶしかつた。

坂は緩いカーブになつていて、曲がりきるとそこが校門だ。二人は他愛もない話をしながら坂道を進んでいく。ずっと話していられたらいいのに、そう思つてもそれは願わない。だからせめてたくさんの話をして、気持ちを紛らわそうと思つた。校門を抜け、他の制服たちと同じように玄関へと吸い込まれていく。一年の下駄箱と、二年のは両端にあって、ボクたちは真ん中で手を振つた。

教室も彼女とは逆方向だ。よくよく考えれば、清華さんがボクの教室の横を通過することはおかしかことだった。三階には特別教室もなし、よほどの用事でなければ上級生が来ることはない。あ、美緒先輩は別。遅刻というリスクを冒してまでもボクたちと雑談がしたいらしい。というかボクに触りたいらしい。ひとつ先輩ではあるけど妹みたいにかわいらしい人なのでそれは別にかまわないけど。噂をすれば、なんたらだ。廊下で美緒先輩に挨拶をすると彼女は勢いよく頭を下げ、そのモチベーションを保つたまま顔を上げた。

「ふえ？」

そしてなぜか背中から倒れそうになつた彼女にあわてて手を差し伸べる。背中に手を回すと彼女を抱きかかえる格好になつた。

「ふわあ」

「ふわあ、じゃないですよ。どこに重心があつたら転びそうになるんですか」

「ん」

さつきから日本語になつてませんよ先輩。怪訝に思いながらも気をつけてくださいと抱き起こし頭をなでた。

「なんか、さつきからりつちゃんくんが王子さまみたい」

ボクを見上げる一つの輝く瞳が、まっすぐ見つめていた。まあこんななり（女装制服）だけどね。ボクが教室に入ろうとするといつ、とボクのスカートの裾を引っ張る。振り向くと、うつむく彼女。

「あの、よかつたらまた、さつきの……だっこしてください」

なんだかおじちゃんになつたようです。変な先輩だと思いながら了承する。なんだか腑に落ちないようなもやもやした気分になりながらも教室に入る。と。

「どうしたのですか、お姉様っ」

ボクが呼ばれたわけではなかつた。廊下からしたその声は美緒先輩のもので、それは違う誰かに向けられていた。困つたように返答は揺れている。

『いや、気になつて来ただけだが……』

聞き覚えがあつて足が止まつたけど、とりあえず荷物を置き、再び引き戸を開けた。目に飛び込んできた風景に思わず和んでしまつた。全身で女生徒に抱きつく美緒先輩。とても心地よさそうに目を細めている。チークを付けたかのように頬が暖かな色に染まつてた。対する抱きつかれたほうはどうしたらいいか困つてついた。どうしようもないといった様子で頭をなでていた。

「りつちゃんくんも気持ちいいですが、お姉様にはかまいません~」  
ああそうですか。さつき感じた心のもやもやが今となつてはどうでもいいものに思えてきた。こつしてみると、まるで仲のよい姉妹のようだつた。もつとも、姉のほうは扱いに困つてついたようだつたけど。

「どうしたの、清華さん」

「律の様子が気になつて来たのだが、思わぬ伏兵にやられてしまつた」

「はうつ、美緒は敵ですか？」

ぱつと清華さんへ見上げる。せわしない女の子は何かに気付いた様子で言葉を繋いだ。

「なんでりつちゃんくんに用事があるのですか？」

なんで、と訊かれて、清華さんの目があからさまに泳ぐ。ボクとも目をそらす。言いたくなさそうにしていたが、意を決したのか口を開いた。

「律に会いに来たんだ、文句あるか」

ぶつきらぼうに横を向く。そういう仕草がかわいらしくてボクは好きだ。それでも納得できないのか、美緒先輩は意地が悪そうに質問を重ねてくる。

「りつちゃんくんとお姉様つてつながりありましたか？」

清華さんがボクたちの仲をおおやけにしていないのならば、理解できる質問だ。けど、正直ボクにはうまく説明できそうになかった。清華さんが頼みの綱になる。

「まあなんというかその、律とは要するに 恋人関係なわけだ」

うわあ、思いつきリストレーントに言いましたね、しかもそこに行くまでの過程を全く説明せずに。美緒先輩は清華さんから離れ、ボクたちを囮やり、目を細めて手を振る。

「ないない。またまたご冗談を」

そのままがなんですけどね。あの夜に出会えていなければこうなることもなかつたんだろうし。大ざっぱに清華さんはいきさつを美緒先輩に説明している。話を聞くにつれ、先輩の唇がわなわなと震えていくのがわかつた。ぼく、どうされてしまうんでしょう。

「むー、といつことは美緒とりつちゃんくんはライバルというわけなんですね」

大幅にリードしているのはボクだということはあえて伏せた。人差し指をボクに向け、大きく息を吸い込み、決めゼリふひとつ。

「絶対お姉様を私のものにしてみせるんですから！」

うーん、別に清華さんを自分のものにしたいわけじゃないんだけど

どなあ。そろつと戻らなければいけない時間になつて、一人は退散した。教室に入り、自分の席に着くなり机に突つ伏した。頭に鈍い刺激。顔を上げると純平がにやけた顔でボクを眺めていた。さつきボクにチヨップでもかましたのだろう、手刀を右手を作つていた。

「朝から賑やかなこつた」

なぜか三角関係に持ち込まれたボクの身もなつてほしい。ボクのそんな思いも意にせず彼はあごをさする。

「しかし、お前が菜月清華とねえ……」

彼女のことを見つめているのだろうか、ボクは尋ねてみたけど返ってきたのは素つ気ない返事だった。

「名前しか知らねえよ、男勝りだとも知らなかつた。まあ、お似合いなんじやねえの？」

彼が色恋沙汰の話になるとどこか投げやりになるのはいつものことだ。色恋沙汰というよりも、ボクの動向に关心があるのだと思う。「まあ、一言言えるとしたら、美緒さんは意外と強敵だと思うぜ？」いつも先輩を変な呼び方で呼ぶ純平が口を大きく開けて笑う。知つていてるような口ぶりにさつきから違和感を覚えながらも、ボクはぶり返してきた睡魔に負けたのだった。

昼になり、ボクは立ち上がった。むかう場所は決まっている、中庭だ。何をしに行くのかも。清華さんに逢いにいく。身体を扉へ向け、外へ出ようとしたのに、それを邪魔された。また席に座られた。

「どうかしたの、純平」

「……まさか、昨日の約束を忘れたわけじゃないだろうな？」  
はは、まさかこのボクが約束をおぼえるわけないじゃないか。そう開き直らうとしたけどその前にやけにぎらぎらした目にやられてしまった。これを蛇に睨まれた蛙というのかな。よくわかんないや。

「えーと、カツサンドが何でしたっけ？」

よしわかつてるんならこい。ボクはつい手に腕を捕まれ、食堂まで連行されるのだった。

ここが戦場と呼ばれるようになったのは、いつのころからなのだろう。勝者には希望の食事が与えられ、敗者は黙つて残り物かもっぱらまずいと評判のラーメンを涙ながらににするしかない。それがここでの唯一のルールだ。そしてその戦場へとボクも乗り込まなきやならない。仕方ないと意を決する。『ロロシアム』の名を持つパン売り場へ、ボクは身を乗り込んだ。

「はあっ、はあっ、はあ……」

「うむ、実に見事な戦いつぱりだつたな」

思わぬ人の声に驚いて、パンを放つてしまつ。清華さんがそれをうまくキャッチしてくれた。彼女もまた勝者のようで、片手に三個パンを持っていた。

「私はこれから中庭に行くんだが、一緒に来るか？」

本当は行きたかったけど、猛獣を怒らすのは勘弁だと思ったのをそれを断つた。清華さんは何か考える風に目を閉じ、うんうん頷いた。

てから独り言を呴いた。

「たまには、食堂で食べるか」

そういうとボクの手を取り席へ案内する。途中、純平にぶつかった。清華さんの足が止まり、掴む手の力が弱まる。

「真枝君……」

「なんですか

短い言葉には感情がこもらない。手はいつの間にか離れて、所在なさげに指を曲げたり伸ばしたりしていた。純平は同じ言葉をもう一度、繰り返した。

「な、なんでも、ない」

そう返答した清華さんは目を泳がせ、右手は警戒するように左腕を掴んでいた。ボクは一人の物々しい雰囲気に口を出せずにはいる。やがて耐えきれなくなつたのか彼女は顔を伏せ、失礼する、とだけ告げて食堂を出た。喧噪が溢れ、食堂に人がたくさんいたことを思い出す。三人しかいないと思ったことは錯覚だと気付く。溜め息をひとつ吐いて純平はボクを促した。怒りにも似た表情はもう彼からは伺えなくて、それだけに清華さんとの関係について訊くのはためらわれた。

「ごめん、ボク、清華さんのところに行つてくるよ」

昼食（結局ボクはラーメンだった）を食べ終え、そつ話をすると

彼は表情も変えず、了承した。

「んなの勝手にしろよ、ただし」

俺の話はするな。そう釘を差された。ご飯粒ひとつないカレーの皿を横にずらし、カツサンドに手を出した純平はどこか不機嫌そうで、それがボクのせいなのか清華さんのせいなのかはわからなかつた。

中庭、いつかのベンチに彼女の姿を見つけた。目があつても彼女はそらしてしまう。ボクはそれでも清華さんの隣に腰掛けた。彼女は落ち着かない様子で視線をさまよわせている。ボクは彼女が話しかけてくれるまで待つた。最初に口にしたのは友人を食堂に残して

よかつたのか、ということだった。苦笑しながら それはうまく笑える自信がなかつたからだけど 大丈夫だということを伝えた。  
「さつきは取り乱してしまって、すまない」

あの生徒はどうしても苦手でな、とだけ理由を語り、またそれ以上は話そうとしなかつた。ボクはそれで十分だと思って話題を変えようとした。くしゃくしゃ、と優しくボクの髪を撫でる少し冷たく柔らかな手。

「優しいんだな、律は」

違う、きっと違う。ボクはこういうやり方しか知らないから。単純で、不器用なだけ。だから、彼女の言葉に何も言えずに、ボクはなすがままにされていた。ゆっくり手を動かしながら、言い含めるように彼女は言葉を転がした。

「人は多かれ少なかれ、辛い過去を背負いながら生きていくものだ。いつ癒されるかもわからない、癒されことなどないかも知れないそれを嫌でも背負わなければいけない。でも今のことを見れば、人は常に幸せなんだと思えないか？」

たとえば、私が愛しい人に触れられていられるように。でもボクは今が幸せなのかよくわからなかつた。この世界はわからないことだらけだ。そして、知らなくても明日はやつてくるし、確かに日常が訪れる。たとえそれをいいこととは思えなくとも、今隣に自分の好きな人がいることは確かだから、幸福を願おうと思つた。

教室に戻る途中、不可思議な行動をとる美緒先輩に会った。マロンで遊んでいいるのだと思つんだけど、

「よくできましたですよマロンちゃん！」豪美のカエルです  
なんだと………といふか持ち歩いているんですかカエルを？やば  
い、ツシコミどころが多すぎる！マロン（確かに人形だつたはずだ）  
は突然口を大きく開けカエルを飲み込んだ。胴体が丸く膨らむ。と  
いうか横切る人たちはなぜ通り過ぎていくんだ？カエルの補食シー  
ンですよ？

「はうつ、見ましたですねりつちゃんくん！」

振り向いた彼女に見つかってしまった。彼女に背を向けると、

「このまま帰るわけにはいかねーです、マロンちゃん」

そう叫んでマロンに命令した。ねえそれ絶対人形じゃないでしょ、  
なんでボクの足に絡みついてきたの、こいつ刺さないよね、大丈夫  
だよね？ハイソックスごしに締め付けるなるに背筋が凍る。

「たいした毒じゃないから心配しないでください

「やっぱりあるんだ！？」

「見てしまったからには仕方ないです、マロンちゃんは実は人形で  
はないのです」

一目見た瞬間からそんな予感はしていたんだけどね。あのときよ  
く動かず人形のフリができるなど感心する。

「ちなみに将来はスネークマンショウを私と組むのです。そうでし  
ょう、マロンちゃん」

マロンちゃんは反応したようにいつの間にか回り込んだ美緒先輩  
に顔を向けた。ああ、まだ消化し切れてないものがこぶになつてて  
気持ち悪いよ！……。まじめに具合が悪くなってきたのでとにかく  
蛇を足から離してもらつた。

「な、何でこんなのを飼つているんですか」

「「こなんのとは失礼な。マロンちゃんは」の学校のマスクットなのですよ？」

嘘だつ、と叫びそうになつた。その手前で思いとどまり、いつかそんな話があつたような気がした。でも、これは何か違う気がする。

「放し飼いで大丈夫なんですか？」

「まあ脱走したときはそのときです」

にこやかすぎます美緒先輩！ だつて動物が苦手な人だつて学校にはいるでしょ？ それをつっこんでのらりくらりとかわされる。気がつけば予鈴が鳴り、美緒先輩とマロンは教室へ戻つてしまつた。理解できな」ことがひとつ増えた。

「ゼーつたい納得できません！」

つん、とそっぽを向く美緒先輩と正対するのはボクと清華さん。放課後、美緒先輩の教室まで出向いたボクたちはこのままボクたちの関係を隠し通すのは無理だと判断して、彼女に全部話すことにしてた。まあ、納得されないのは承知の上だつたけれど顔を真つ赤にして怒られるとは思わなかつた。

「だつて、お姉様は私だけを見てくれると言つたじゃないですか」美緒先輩はずいと清華さんに近づいてじっと彼女を見つめた。両手を胸の前でお祈りをするように組んでいる彼女は、清華さんの前だとすこく饒舌になる。次の瞬間には手を広げて訴えるような仕草をしたりと身振り手振りも大きくなり、芝居がかつた感じにもみえる。もちろん自然とそうなつてしまふのだと思うのだけれど、演劇部の部長をやつているだけあるなと思つた。全身から溢れるパワフルさだ。

「あれは、なんというか、言葉のあや

「言葉のあやだなんて今更信じられませんっ！ あのときの私を見つめる田はとても透明でした、それを言葉のあやで片付けるだなんて……」

軽く傍観はじめていた矢先ボクの名前を呼ばれたので驚いて身

体が震えた。

「な、なんでしょう

「戦争です」

彼女は高らかにそう宣言した。これには清華さんも田をぱちくりさせた。というかさすがに物騒すぎる。これ以上彼女のテンションをあげるわけにもいかないので何とかなだめようとした。

「ボクは美緒先輩と戦うつもりはないし、奪い合つたところで清華さんが喜んでくれると思いますか？」

「私は正直、君と律がそういうことをしているのを見たくないな」  
「うにゅう……と口」もつたまま黙り込んでしまった先輩。きっと清華さんの一言が効いたのだろう。わかりましたという彼女はやら疲れ切つたような表情を見せた。

「では、私は金輪際お姉様に近づいてはいけないといふことなのでしょうか……」

それは違うよ、とボクは教えた。みるみるうちに表情が輝きに満ちていく。ほんとに子供みたいな人だな、とボクの頬はゆるんだ。

「じゃあ、じゅうじゅうのはどうでしょう

ぽん、と手を叩いた美緒先輩はボクと清華さんの手を取つてべつと自分のほうへ引っ張つた。三人の身体が密着する。もつとも、清華さんに一人が抱きつかのよつた形になつてしまつたけれど。

「ほんとのことを言えば、お姉様もりつちゃんくんも大好きなのです。だからこれでラブラブです」

思ひぬ三角形は綺麗な正三角形のようだ。彼女が満足するまでボクたちはこのままの格好でいた。清華さんと目が合つ。困つたように眉尻を下げた笑み。でも、まんざらじゃない、そんな感情がなんとなくだけ伝わってきた。

部活があるといつので美緒先輩とは途中で別れた。彼女の背中を見ると小さく清華さんが溜め息を吐いた。

「本当に元気な人だな」

その瞳はどこか優しくて、まるで妹を思う姉のようだった。ボクはそうですね、と頷きを返した。体育館へと続く廊下からは斜めに日が差し込んでいて、影はより濃い色を付けていた。二人はそこから背を向け、玄関へと歩き出した。

今日は美術部の活動はないらしい。よく考えれば、みんな部活動をしているのに何もしていなのはボクぐらいのものだつた。ボーデゲーム部の部室ってどこにあつたつけ？生徒手帳を取り出し、部活教室の位置を確かめる。第一理科室。いかにもその手のゲームが隠されていそうな場所だった。

部長がどこにいるかわからなかつた（むしろ顔すら思い出せなかつた）ので、教務室まで行つて鍵を借りた。突然の活動に教師が訝しげになるのもよくわかる。変なことにだけは使うなよ、と余計な釘を差された。何を想像しているんだろう。

「なんか悪いことをしているみたいだな」

踊るような口調で清華さんが言う。誘つてみたら目を輝かせて首肯した。どうせ家に帰つても暇だし、退屈しのぎにはちょうどいい。教室に向かう廊下の途中でそう理由を明かしてもらいた。

鍵を開け、教室へと入る。思いのほか薬品くささはない。ボクは教師に言われたとおりの棚を探して、また鍵を使つた。がたつきのある戸をスライドさせる。いくつかのゲームが出てきた。何かできるゲームはあるか清華さんに尋ねる。彼女はオセロを選んだので、下校を促す放送があるまでそれで遊んだり、談笑したりして暇を潰すこととした。

楽しい時間はあつといつ間に過ぎていく。何で時間は一定に感じ

ることができないんだろう。あるいは、楽しい時間こそゆっくり流れてくれればいいのに。痛みや辛さなら一瞬だけでいい。一人でオセロを片付け、戸棚に鍵をかける。彼女は教室の扉に背中を預け、ボクを待ってくれていてるようだった。

教室を出ようかと促して、彼女の様子がおかしいことに気が付いた。歯切れの悪い返事をしながら、決して譲ろうとはしない。どうかしたのか尋ねてもちゃんと答えてはくれなかつた。力チャ、と音がする。

「なあ、鍵を閉めたら、もう誰もこれないよな？」

その確証はできないのに、ボクは納得していた。それよりも、彼女の考えがわからなくて、ボクは首をかしげてしまう。

「いや、もう帰りましょう」

清華さんの目が潤む。次の瞬間、ひしと抱きしめられた。

「我慢しなきゃっていうのはわかつていいんだけど、でも、まだ私はそれができそうにない」

ボクは彼女が暴走するのを必死に押さえた。そのまま流されてもいいような気はしたけれど、どこでもそういうことをするのはさすがに節度がなさ過ぎる。だから、なだめた。言い聞かせるように言うと、反抗心のかほっぺをつねつてきた。痛くない。

「つまらんな。私はてっきり雰囲気にやられるかと思つたんだが」「どうやらボクを試してみたみたいだ。そのことに気付いてボクも仕返しでほっぺを掴んでやる。お互いに手を離し、ボクは不機嫌なつもりでつぶやいた。

「ボクは雰囲気に恋するわけじゃありませんから」

言つてくれる、と彼女は笑つた。そしてもう一度抱きしめてくれた。うんうん、と何度も頷く。

「やっぱり、私の選んだ人だな」

「どういう意味ですかそれ」

さて、なんだろうなどとぼける彼女。今度は素直に扉を開け、ボクが鍵をかけた。部として機能しているうちはたまにこようと思つ

た。外は薄暗くなっている。一人でいられるまで手を繋ぎながら、ボクたちは家路を辿った。

最近ぐつとかわいくなった、とかあさまに言われた。その言葉とお手製のフレンチトーストの甘さが混ざり合つて、ボクは幸せな気分になる。朝のニュースは相変わらず暗い出来事ばかりだつたけれど、それでもコーヒー牛乳は甘い。コップなみなみと注がれたそれを飲み干し、食器を片付けようとした。ちょっと待つて、とかあさまが立ち上がり、ハンカチをポケットから取り出した。

「元が汚れていたらしく、優しく拭われた。まだお子さまね、とたしなめられる。高校生にもなつてこんなことをされるのはどうかと思うけれど、おせつかい好きなあさまにされるがままになつてしまつ。最後に彼女はおどけたように、頬にキスをした。びっくりして思わずとびのぐ。ふふ、と口に人差し指を当てるかあさま。……ほんと、いたずら好きなんだから。ボクは照れをごまかしながら食器を洗い、着替えをしに自分の部屋に戻つた。

玄関に続く廊下でかあさまが呼び止めた。指で自分の頬をさわり、何か考え方をしているようだつた。ひとつ頷き、口にする。

「りつちゃん、もしかして今 恋をしてる？」

「この人がわからないことなんて何一つないんじゃないだろうか。何でわかつたのか素直に気になつた。

「恋つてね、人を変えるとても強力な魔法なのよ」

私も色々な恋をしているからわかるの。もちろん、愛してるのはパパだけよと付け加える。パパは今出張中で家にいない。ボクも大好きだから早く帰つてきてほしいなと思つた。ボクにいろんな服を着せてそれを写真に撮るという趣味だけは何とかしてほしいけど。魔法か……。清華さんも魔法にかかつた一人なのかな。頬がゆるむ。ぼおつとしているとかあさまに遅刻するわよと指摘され、あわてて家を飛び出した。青空はボクに届きそうもないぐらい高いところにいた。

どうやら走る必要はなさそうだと判断して速度を緩める。息を整えているといきなり腕に抱きつかれた。今日は毎の髪飾りが揺れるボクよりも背の低い女の子 美緒先輩だ。この時間ぐらいになると顔を合わせることになるらしく。もうやっているかもわからない商店街を通り過ぎる。通学路だから人はいたけれど、この通りに用のある人はもういないのだろう、シャッターはほとんど閉められていた。

「美緒が子供のころはこの時間帯もにぎやかだったです。町は変わつてしまつです」

神妙そうに彼女がシャッターを見やる。ボクは語る彼女を見ていた。

「変わらないものもありますけどね」

「それは、もしかしたら、もしかしなくても美緒のことについてますか？」

おもちみたに頬を膨らませる彼女がかわいらしい。ほひ、と溜め息を吐いた。

「正直、お姉様がうらやましいです。背は高いしかついいし、美緒の持つていのものをたくさん持つてているですよ」

でも、胸は先輩と変わらないよと口走つてしまつ。朝から何を言つているんだ。ちょうど坂にさしかかったところだった。

「朝から何を美緒に吹き込んでいるのかな？」

背中がざわついた。恐る恐る後ろを振り向くと腕組みをしてさぞかしご立腹のようすの清華さんがいた。眉間に皺が寄つていて。口元は笑つていていうよりも引きつっている。ボクは彼女のオーラに動けずにはいなかった。まさしく蛇ににらまれた蛙だ。

先輩は彼女を見つけるやいなや飛びついていたので攻撃は免れた。怒りが戸惑いにかわり、また姉妹に戻る。ボクは遠巻きにそれを見て、先に学校へ向かおうとした。仲睦まじいことはいいことだ。それを先輩は逃げ出したと思ったらしく、清華さんの手を取つて走り出した。すぐに追いつき、ボクの手を掴む。

「先に行っちゃダメですよー、三人で仲良しなんですから」  
満面の笑みを浮かべる彼女は自分の言葉につんうんと頷いた。

「あーあ、今まで俺が一人占めできただのによつ」  
教室に入るなり、純平の第一声がそれだつた。両手に花というか、  
ボクもまあ花のほうに入るんだけど、とにかく彼の声はひどくつま  
らなううだつた。

「純平君は授業中と一緒にだからいいでしょー。あ、美緒もこの教室  
で勉強しましょーか」

それは学年的な問題で無理です先輩。純平も手を振る。

「美緒ちんがここにきたらひるたくてかなわねえや」

「どーせひるさいですよー」と舌を出す先輩。清華さんはといえば、  
居心地が悪そうにそっぽを向いていた。やつぱり彼女と純平とは何  
かがあつたのか、あまり彼女の態度は自然と思えなかつた。

「あ、そろつと行きましょーかお姉様」

「そ、その名前で呼ぶな、恥ずかしい」

「だつてお姉様はお姉様であるからしてお姉様なんですもの」  
頭がこんがらがる説明をして先輩は清華さんを連れて行つた。そ  
のあと、純平が愚痴のような独り言をつぶやいた気がしたけどすぐ  
に忘れてしまつた。そのときは、他愛のないことだと思つたからだ  
つた。

昼食時、純平はボクを誘わずに先に行つてしまつた。こういうと  
きは大体部活の集会がある日だ。特別機嫌の悪そうな素振りもなか  
つた。今日はまた清華さんがサンディッチを作つてくれたというの  
で中庭にむかう。今日も晴れ、外で昼食をとるには絶好の日だつた。  
指定席に着き、腰をかけようとしてボクの動きが止まつた。うつ  
むく彼女は返事をしない。何かあつたらと思い、下から彼女の顔を  
のぞく。ただの昼寝だとわかつて安心の溜め息を吐く。たいしてお  
なかは空いていなかつたから、ボクは彼女が起きるまで待つことに

した。

「……起にしてくれてもよかつたんだぞ」  
あまりに気持ちよせつに寝ていたものだから、彼女を起にすこ  
じができなかつた。そのことは清華さんには言わず、言葉を濁らせ  
て適当に理由をつけた。

まだ予鈴には十分時間があるからゆつくりサンディッシュをほおば  
る。丁寧に作られたそれは文句のないおいしさだ。おいしくないと  
思えたら、それはきっとボクの舌が間違つてゐる。ふと視線に気が付  
くとじつと清華さんがボクを見つめていた。恥ずかしくて赤くなる。  
「集中できませんよお、そんなに見つめられたら」

くすくすと微笑する彼女の瞳は綺麗に細められて、はつとするほ  
ど綺麗だつた。気付けば、ボクも彼女の顔をじつと見つめていた。  
「むむ、確かに気が紛れてしまつな」

そう言われてからそのことに気付き、視線をそらす。恥ずかしさ  
をほじまかすようにストローをくわえた。ちよつとだけ飲み、口を離  
す。そのままチャイムがこなければいいのに、そう愚痴をほぼすと  
清華さんはふと真顔になつた。

「そりだな……そりだ、今日またほりつか、具合が悪いとかなんと  
か言つて。気にするな、内申になんか響きはしない」

思ひ立つたが吉口とでもいうよつてまだ食事中のボクを引っ張り、  
中庭を出る。ボクは残りのパンをあわてて口に入れて飲み込んだ。  
具合が悪そうにするんだぞと念を押される。いざ、職員室へ。

……これでいいのかボクの高校生活。坂を下りるボクたち、後ろ  
めたさのなさそうな清華さんに、ちよつとそれのあるボク。いつもや  
つて清華さんのペースで進んで、たまにはボクのペースで進んでい  
く日常。これからも続していくと思つたらそつ、とても。  
とても楽しいじゃないかと思えた。

教室からはボクの住む町を一望することができた。消失点を超えて続く空は時刻と共にその色を変える。今日は午後休校だったので昼食を前に帰り支度をはじめる。ふと見やつた空は青。まるでボクを外へ誘うかのようだった。ボクはさつさと荷物をまとめると教室から出ようとして立ち上がった。……うん、だいたいにしてこういうときに限つてうまくいかないものだよね。どうにかして急に捕まれた純平の「」つて手をふりほどきたいんだけど、どうしたいいかな。

「「めん、純平」

「どうした？」

「実は今日、あの日なんだよね……」

彼はその言葉を聞いた瞬間田を見開いて手を離した。あれ、周りまでざわついてる？

「それじゃあ仕方ないか……また今度だな」

よし、今日は何とかまける。周囲のざわめきを気にせずボクは教室を出ようとした。

「つて、お前オトコだらうがあ！」

彼の脳が違和感に気付いたのか、やつとシッコミが入る。純平、気付くのがかなり遅いよ。というかまあその、性別的にはつて意味だよね、純平？本気を出した彼から逃げおおせられるわけもなく、廊下で彼につかまえられた。叫んだら先生くるかな？と思つたけど厄介ごとになるのも困りものなのでやめておいた。頬を膨らませてそつぽを向く。

「だつてボク関係ないじやない」

「仕方ねえだろ、他の部員がバックれやがつたんだから」

ちらりと視線を戻すと困つたように眉尻を下げた純平がいた。頭を下げ、手を合わせて挙む。

「一生のお願いだ、どうにか手伝ってくれねえか」

「んー……パンツ見せてあげるからそれで勘弁してくれない？」

「パツ、つてだからオトコの下着姿なんか見たくなえつーの」

なぜそう言いながら頬を赤らめるんですか君は。ちょっと起きも…

…いやなんでもありませんよ？まあ、一生のお願いとまで言われる  
と断りづらいものがある。彼の一生のお願いをボクは数え切れ  
ないほどには聞いているんだけど。ボクはふてくされながらも了承した。

「おお、心の友よ！」

なんか聞いたことあるセリフですよ？いつものことながら深入り  
はしないことにして、渋々ボクは教室に戻った。ジャージに着替え  
るとのこどらしい。ニーソックスを脱ぎ、運動用のソックスをはく。  
スカートは脱がずにズボンをはき、それからスカートのホックを外  
す。上は別に白の半袖の体操着を着ているので気にせずワイシャ  
ツを脱いだ。おおつてなんだおおつて。

「つていうかボクの着替え見て楽しいんですかみなさん！？」

なぜかボクの着替える様子を見ているクラスメイト疑問を投げつ  
けつつも着替えを続行した。やつていることは女子のそれと変わら  
ないのに、そんなに物珍しいのだろうか。今度小一時間ぐらい問い合わせ  
詰めてやうかしら。長袖に腕を通すと廊下から純平がボクを促し  
た。

「じつこのつて普通一年生がやるもんじゃないの、と彼に尋ねる  
と今回またま陸上部一年の担当だつたという。基本的に誰もや  
りたがらないので掃除しているのは純平と部長ぐらいなものらしい。  
彼の愚痴を聞いているうちに部室棟に着いた。

校舎から外れたところにあるコンクリート造りのそれは運動系、  
特にグラウンドで活動する部活のために用意された場所で、有り体  
に言えば物置だった。片付けがきちつとされている部室などなかつ  
た。散乱しているのはお菓子の袋や雑誌。軍手越しでも気持ちの悪い  
感触を我慢しながら、ゴミ袋へつっこんでいく。純平はゴミ捨てや  
整理整頓を文句一つ言わずにやつていて、いちいちリアクションを  
取つている自分が恥ずかしくなつた。

雑誌を積み重ねて机の上に置き、一通り床を掃いたら次の部室へ。全部きれいにしていつたらきりがない。ある程度きれいになつていれば文句は出ないとのことで、気にしないことにした。まだ片付けですめばいい。ひどい部屋では袋をどかした瞬間に黒くてかてかした物体ががさごめいていて、ボクは正直失神しかけた。何とか意識が遠ざかるのを拒んで、我を取り戻す。虫の存在に気付くと純平が退治してくれた。ボクが虫に触れないことを知っているので黙つてしてくれる。そのことをボクはありがたく思つて礼を言う。あさつてのほうを向いてどいつも、と口にする。そのやりとりは昔から、それこそボクたちが出会つてから続く伝統みたいなものだつた。そう呼ぶには大げさかも知れないけれど。

最後の部室の片付けが終わると午後一時ごろだつた。食堂もやつていないので食事をとるには外を出るか家に帰るしかない。お小遣いもそろつとなくなりそうだったのでボクは後者を選ぶことにした。純平が弁当を教室に忘れたと言つたので彼が昼食を食べ終わるまで付いてやることにした。動いて気が紛れたのか、おなかはあまり減つていなかつたので、それぐらいの我慢はできた。ボクが制服に着替え直すのを待つて、彼が弁当箱を広げた。食事中の会話の途中で、ボクはなんとなく聞いてみた。

「そういえばさあ、純平つて彼女いないの」

「げほ、がは。思いつきり彼が咳き込む。ボクはあわてて麦茶のペットボトルを差し出した。喉を鳴らし、流し込む。蓋をひねつたばかりだつたそれは半分ぐらいの量になつた。

「ごめん、聞かなかつたことにして」

「いや、急に質問がきたもん……気にするな」

「ご飯を吹き出さなかつたのが不幸中の幸いか。彼はとにかく口の中にしつこもつとるので。鼻をむずむずさせたりやたら鼻をこすりながら彼は答えた。きっとご飯つぶが鼻の気道につまつたんだと思つ。

「まあ、彼女はいないなあ。つーかいらん。何でそんなことを聞く

んだ？」

なんとなくだよ、とボクは「まかした。ほんとはもうちょっとつこんで話がしたかったけど、立ち入つてもいい話なのかどうかためらつた。

「昔は……いないこともなかつた」

純平のほうから、言葉が続いたのはこれが初めてだつたかも知れない。

「まだガキで、あのころは何もかも自分の思い通りになると思つてたんだよ。実際うまくいっているつもりだつた。でも、全部間違つてた……俺のエーハイを押しつけて、自己満足にひたつたんだ、それで俺は

純平がはつと顔を上げる。箸を持つ手はとつぐのとうに動かず、白米は軽く乾いてしまつていた。おかげだけを食べ、のつそりとした手つきで弁当箱に蓋をした。

「俺はまだガキだから、もつと大人になつたらいい人を見つける」  
そういうて豪快に笑う。空元氣だということは他人の目から見ても明らかだつたけれどボクはそれを指摘しなかつた。つられて一緒に笑いながら、ボク自身は彼女と正しく接していられているだらうかと考えた。そんなこと、わかるわけもなかつた。

教室を出ても、雑談の話題は絶えない。でも恋の話になることはなかつた。一人とも、それを避けるかのように本当にくだらない話だけを続けた。玄関に着いて、いよいよ帰ろうとしたところ、大きく泣き叫ぶ声がした。どうしたと純平の声に手振りで応え、声のした方向に目をやる。小さな女の子が廊下で泣きじゃくつていた。手の甲で涙を拭う。彼女に手をやる女子は困つてているように視線をさまよわせていた。言葉を投げかけるが、少女は顔を返すばかり。氣付いたらボクの後ろに純平がいた。

「ありや、美緒ちゃんと菜月先輩じゃねえか」

ボクたちは理由を訊きに一人の元へと駆け寄つた。

清華さんがボクの姿を見つけると胸を撫で下ろしたような柔らかな困り顔になつた。でもすぐに表情が固まる。なぜ純平と田が合つだけでこうなるのかわからない。純平は小さく息を吐いて、頭をかいた。

「こないだは、律をもつてつちやつて、すんません」

清華さんはその言葉に少し頬を歪め、けれどすぐに田を伏せた。

「いや、気にしてない」

「でも、一応」

お互いに関係をよくしようとしているような気遣いが見えた。でもどんな関係だつたんだろうか? 今は訊けずにいるけど、いつか知るような気がする。それよりも、と純平が話を切り替えた。

「美緒ちゃん、なんかあつたんすか?」

「いや、それがな」

簡単に説明を聞く。一人は図書館で本を読んでいたという。そこに一匹のネコが現れて、美緒先輩が愛用していたしおりを盗んで逃げていつてしまつたらしい。美緒先輩も色々と説明を補足していくがしゃくり上げたり鼻をすすつたりと何を言つてゐるのかよくわからない状態だった。

まず、美緒先輩に泣きやんでもらひことが先決だった。大柄な男が行つても余計怖がるだけだし、といつことでボクが対応することになった。しかし、清華さんでも泣きやませられないのに、いつたいどんな魔法を使えばいいんだ?

「美緒先輩、とりあえず落ち着いてください」

そう言いながら、頭をなでてやる。ゆっくり、できるだけ優しく。しゃくり上げる肩が段々落ち着いてくる。涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔をハンカチで拭つてやる。

「ボクたちが、絶対見つけてあげますから、安心してください」

一人は頷いてみせる。ね、と美緒先輩にまなざしを向けると、今度は抱きつかれた。すごい勢いで、背中から倒される。痛みがつて、目を細める。すぐに目を開けると、

近い。

熱で真っ赤になつた頬に潤んだ瞳がすぐ目の前にある。このままの体勢でいるわけにもいかないので、どいてもらひように言つ。あわてた先輩がボクからぞけてなぜか隣で正座になつた。取り乱してすみません、と小さな声。ふと視線をあげると鼻を押さえる清華さんとあつちの方を向いて固まつた純平がいた。

「一人とも、ボクたちでよからぬ妄想をしてはいませんよね？」

手をぶんぶんと振り否定する一人。ボクは不審に思いながら急に空腹を覚えた。

「えつと、早く捜索しなきやいけないんだけど、ボクおなか減っちゃつて……」

とりあえず、食堂へ行こうと清華さんが促す。

「えっと、早く捜索しなきゃいけないんだけど、ボクおなか減っちゃつて……」

とりあえず、食堂へ行こうと清華さんが促す。あれ、食堂は閉まつているんじゃないかな？

清華さんだけが先に食堂に入り（部屋は開いていた）、ボクたちは扉の前で待っていた。数分後、彼女が戻ってきた。

「厨房を使う許可を特別にもらつた。残り物なら使ってもかまわないそうだ」

厨房で働く方の一人が清華さんと知り合いらしい。ボクは心底感謝して食堂へと入つていった。私も手伝います、と元気娘が手を挙げる。なぜかそれを制する純平。訴えが彼からしか出なかつたため、彼女は清華さんと調理室へ入つていった。

近くのテーブル席に着いて、調理の様子を眺める。手元は見えないけど、順調そうな清華さんの横で、頭を抱えたりやたらせわしなく動き回つたり爆発音を連発させたりつてあれ？ 何が起こつているんだ現場では。しばらくするとすっかり肩を落とした美緒先輩が戻つてきた。

「どうしたの？」

「君は兵器を作つているのか、と言われてしまつましたです……」  
だからいわんこっちゃない、と純平が肩をすくめる。ボクと清華さんは彼女が料理下手だと知らなかつた。

「下手つてレベルじやねーぞ、調味料で致死毒物が作れるつて噂だ」「そんなんあるわけないじやないですか！」

確かに具合を悪くされた方がいるらしいですけど……とさりげなく怖いことを言つてくれる。ボクは彼女には申し訳ないけど、心の中で胸を撫で下ろした。

「お前は調理師免許より危険物取り扱い免許を取つたほうがいい

「むー今に見てやがれですよじゅんじゅんがー」

「その名前で呼ぶのはやめろつ」

じゅんじゅん？思わず聞き返してしまつ。思いつきり睨み付けられました、はい。いいじゃん、減るもんじゃなし、と純平の頭をなでる美緒先輩。気付けば純平がしてやられている！ いよいよ賑やかになつてきたところ、香ばしい匂いがテープルへ運ばれてきた。

「ほら、君たちも手伝ってくれ ああ、美緒君はいいや

「美緒はそこまでドジじゃありません！」

立ち上がる先輩に苦笑する清華さん。野菜炒めとボクにはご飯。箸は人数分。みんなで手を合わせた。一口入れて、やつぱりおいしいと頷いた。絶賛する元気娘に対し大柄な男はひとつ頷いただけだつた。

「うん、みんな満足そうな顔していて嬉しい限りなんだが 肝心な目的を忘れているわけじゃないよな？」

一番はつとしていたのが美緒先輩だつた。本人がこれでどうするんでしょう。

「まさかお姉様、餌で釣ろうと……！」

「いやそんなつもりは全くないからな。あと基本的にはこれは律のために作つたんだからな」

はた、と一人の箸が止まる。いや、気にせず食べてもいいから。というか問題はそこではないと思うのですがいかがでしょう。

「とりあえず手分けして探そう。みんな携帯電話はあるよな？」

何かあつたらそれで連絡すること。それから、探す場所の分担を決めた。美緒先輩は校舎の三階と四階、清華さんは一階と一階、純平はグラウンド周辺、ボクは中庭。反対意見が出なかつたので食事が終わつたあとそのように行動することに決まつた。

食後（食堂のおばちゃんには深く感謝しておかなければ）、廊下で美緒先輩と清華さんと離れ、純平とは玄関で別れた。一人になり、その心細さを思い知る。ついボクは人の背中に頼つてしまいがちだから、いつかはちゃんと一人でしゃんとしていたい。それだと清華

さんがつまらないと愚痴るかな。それでも、いつかは。

中庭に人気はなかつた。動物は網に囲まれて育てられているウサギぐらいなものだ。やつと見ただけでは分からぬので、隅から探すことにした。草を手で払い、ネコが隠れていなかつた。調べる作業は思いのほか大変だ。気配がもつとわかりやすいとか、やたら大きくて自分の背より高いとかだつたらわかりやすいのになあ、でも戦えるのかなあそんなやつが現れて。そんなややどうでもいい妄想を広げながら搜索を続けるが、それらしい気配はなかつた。白と黒のブチネコ、身体の色は縁に交わらないから、比較的見つけやすいと思う。もう一周してみたけれど、ネコ一匹すら見つからなかつた。念には念を押してもう一回調べたあと結局成果はなかつたとして清華さんに連絡した。これから彼女と合流する。

清華さんは一階、ボクの教室にいた。ボクの席に着いて、住宅街の見える窓のほうを眺めていた。声をかけると、彼女が振り向く。なんで、悲しみを帯びるように目を細めているのだろう？ 状況を聞くと、彼女もまだ猫を見つけられていないうつだつた。すぐに広がる沈黙に耐えられなくて、ボクは口を開いた。

「どうかしたの、と短く訊くと清華さんは別に、と返した。

「ほんのちょっと……律のクラスメイトがうらやましくなつてな」目を細めたまま、頬を緩める。まるで泣いているようだつた。

「私も君と同じクラスがよかつたな」

そんなこと言つてもしようがないか、と苦笑いでごまかす。一つ学年が違うだけなのに埋まらない大きな穴。それは無いものねだりだとわかつていても、彼女にとつては欲しくてしょうがないものなんだと思つ。

そんな彼女が急に愛おしくなつて、ボクは座つている清華さんを後ろから抱きしめた。

「じゃあ、逢えない時間が不安にならな」よつて、一緒にいられるときはずつと近くにいましょうか

……こんなこと言えぢやうやつだつたけ、ボクは。清華さんは耳

たぶまで真っ赤にさせてしまう。そんな彼女の肩に顔を置いて、頬をくっつける。

「あの、こないだはあんなこと言ひちゃいましたけど キスしませんか？」

もう数え切れないキス。けれど、学校では我慢していた。見境なくそういうふうにするのはどうかと思ったからだつた。でも今は人もいないし、何より彼女にそうしてあげたかった。身体を離し、手で優しく振り向かせる。上目遣いの彼女が新鮮で、どうにかなつてしまいそうになるのを押さえる。どちらかともなく、瞳を閉じた。

そのまま、近づいてく、そつと。

着信音。

「じふつ！？」

ヘッドロッックをかまされ、意識が飛びかける。顔面がまんべんなく痛い。清華さんの頭蓋骨は何でできているんだ？ 彼女は電話をとり、しきりに頷いた。電話を切り、顔をするボクにいきました。

「純平が猫を見つけたらしい、すぐ姿を眩ませたというが校門の方へ行つたそうだ」

そう言つてボクの腕をぶんぶんと振る。勢いについていけなくなつているボクに気付き、急に視線を落とす。かと思えば、小さく頬に口づけをくれた。

「さつきは、ありがとう」

ボクは返事のかわりに彼女と手を繋いだ。途中で合流した美緒先輩にそれを見られて結局三人で手を繋ぐことになつた。でも悪くない。ボクの近くに彼女の笑顔があるのでない。

例の如く、ボクたち三人を見て純平が悪態を吐いた。

「ちつ、俺だけ仲間はずれかよ」

「美緒と手を繋ぎたいのですか？」

空いている手を彼に差し出す。彼は腕を組んで、それを拒んだ。

「別にそんなんじゃねーよ」

彼が意固地になると美緒先輩もなぜか意固地になる。ボクの手から離れ、ぐい、と純平へ手を差し出す。

「なんだよ、これ」

「繋ぎたいんでしょう？ 美緒、そういうのよくわかるです。なめやがるなー！ です。」

いや別になめてはねえけどよ、とつぶやく彼からはもう怒氣が抜けていた。美緒の小さな手を取る大きな純平の手。アンバランスな二人だけど、どこかほほえましくもある。少しの時間が経つて、ふりほどくように彼女の手が離れる。

「うお！？」

「美緒は何か重要なことを忘れているような気がするですー！覚えてますかりっちゃんくん」

覚えているも何も、忘れているのは美緒先輩だけだったような気がするんだけど。猫を探しにきたことを告げる。ぼむ、と手のひらを打ち、純平に訊き直す。

「あの泥棒猫はどこいったですか？」

彼女の口癖が段々子供っぽいってレベルじゃなくなってきたんですけどどうでしょうか。しかも泥棒猫ってちょっと意味が違うよつな……。

「美緒ちゃんと漫才してたら忘れちまつたよ……」

夫婦漫才ですね、とツッコんだら一人に怒鳴られた。そんな本気で否定しなくともいいじゃない。

「でも確かにこっちへきたんだよ、すぐに見失っちまつたけどな」玄関周辺はまだ誰も探していない場所だったので、みんなで手分けして探すこととした。一人で探し回っているよりも心強い。玄関から校門まではたいした距離もない。コンクリートで舗装されたそこは車を校舎側、校門側と四台ずつ停められるスペースがあつて、教職員がそこを利用している。今は一、三台停まっていた。

あとは花壇と植樹された木々が校門を沿うように設置されている。猫が隠れるとしたらそこか車の下ぐらいだと思う。ボクは中庭でしていた要領で隅から搜索に当たつていった。数十分搜索したけど、それらしい姿は見あたらなかつた。少しづつ、気がつかないうちに日が傾きはじめていた。

さすがに外を探索するのはためらつた。そこまでの時間はボクたちにはなかつた。それに追い打ちをかけるように美緒先輩が細い声を出した。

「ありがとうございます、みなさん。美緒のためにここまでしてくれて……あとは、自分で探してみます」

表情こそ微笑んではいたけれど、ボクはそうとは取れなかつた。でも、手伝えないことがもどかしい。結局、今日はしおりを見つけられないままお開きとなつた。それぞれ、荷物を持って校門を出る。美緒先輩が小さく、手を振つた。

清華さんとも用があるとすぐに別れた。純平と下校するのは久しぶりだ。彼は朝も放課後も部活をやつているから、一緒に登下校するのにはこういう午後休校のときぐらいなものだつた。遠い目をする彼は、何か考え方をしているようだ。やがて手のひらを打ち、いきなり訳のわからないことを言い出した。

「俺たち、カップルに見えるか……？」

カップルに見られたいんですか？身なりは女子だけど身体は立派な男なボクと付き合いたいんですか？

「いや、それは想像すら勘弁だ」

ですよねー。でも、よく考えれば見た目でしか判断しようがない

人たちにとつて見れば、ボクたちはそのように見えるのだろうと思つた。

「そういうえば、菜月先輩とはうまくやつてんのか？」

どう答えたらいいものかと思つたけど、素直に頷いた。夜の逢瀬も相変わらず続いていたし、大きな展開がないかわりに大きなトラブルもなく順調に続いていた。ボクの簡単な話を聞くとそうか、と短い答えが戻ってくる。それつきり彼女との話題が出ることはなかつた。ずっと違和感だけが残る。それ以上のことは、やっぱり、いまだに訊けるとは思えなかつた。

下校時間になつて、ボクは一人玄関を出た。いつもの面々はみんな部活があるといつっていた。最近は一人になる時間が少なかつたので、こうなることは楽しくなかつた。けど、文句を言つても仕方がないことなので素直に帰ることにした。未練がましく一階の美術室のほうへ目を向ける。窓際の席で清華さんは何かをデッサンしているようだつた。ボクの視線に気付いたのか、彼女がこっちを見て手を振つてくれた。ボクも手を振り返す。それだけで心が軽くなるなんて、ボクも単純だなと苦笑しながら彼女に背を向けた。

寂れた商店街は一日中店を開いている様子はない。そろそろ夏服の季節だといつのに、どこかひんやりとした空氣。早くこの通りを出ようと早足になる。それに、後ろに感じる小さな気配。振り向かないように、通り過ぎようとする。

「おおい、ちと待たんか」

背中を撫でられたかのようになぞわぞわした感覚が走り抜けた。反射的に駆け足になる。

「こら、年寄りをいたわらんかあ」

年寄り?確かに声はしわがれているし、いや、もしかしたら老人の亡靈なんじやないか?不況に耐えられなくなつて孤独死した……とか、うわあ、想像しただけで鳥肌がやばいよ!

「わしを勝手に殺すなあ!」

うわ、怒鳴られた!運動不足がたたつて、ボクは徐々に力尽きていつた。やがて息が切れて立ち止まつた。そこに一匹の黒猫がやってきて、ボクの足下にすり寄つてきた。ボクを一瞥し、一声、しゃべつた。

「おまいさんはブチネコがくわえとつたしおりとやらを探しているんじやろ?」

いや、猫がしゃべるはずない。ないない、ありえない。ボクは現

実際に立ち直ろうとした。

「いいかげんこれが現実だと理解せんのか？」

猫に何かスピーカーでも取り付けてあるのかな？ボクは猫を抱え上げてそれらしきものがないかチェックすることにした。

「あほんだらあ！！！」

……頬がひりひりする。ボクが何をしたっていうんだ。痛みで猫を手放すとくると一回転して地面に着地した。

「つたぐ、年寄りだからって馬鹿にしよつて……これでもこの女なんじやからな」

はは、また「冗談を。どこまで冗談なのかはわからないが、少なくとも猫の身体には何もなかつた。そしてこれからボクがとるべき方法は一つ。幻聴だと理解してこの場から立ち去る。あるいは幻聴だと理解してこの猫（幻聴）に従つ。

「あくまでわしがしゃべつとるとは認めんのじやな？」

ええ、そのつもりです。だつてあり得ないし。ただ、しありのことを知つて以上、この猫（の幻聴）に従つてほうが得策だと思った。

「そういう、おまいさんは羊男を知つとるかね？」

全く要領を得ない質問本当にありがとうございます。ボクは首を振つた。それなら仕方ないか、と首を振る猫。いや、仕方なぞそうに見えただけだけだね！

「わしの仲間内のようなもんじや。適当にヒントを投げかける。まあわしは客引きをするカーネル・サンダースに近いがな。答えまでは知らないが、道案内だけはしてやるのがあいつじや。それに引き替え、わしは答えまで知つとる。両手を挙げて喜べ、らんらんるーよろしくな」

最後の呪文みたいなのが一番理解できなかつたんだだけビビッつよう。

「考えるな、感じろ」

何でこのタイミングでそのセリフが出てくるんですか！ツツツミ

を猫はさらりとかわし、話を切り替えた。

「とりあえずブチネコのいる住処まで案内してやる。あいつのこ  
とじやから大事に持つていてるに違いない」

そう言いながら先頭に立つ。所々汚れているのを見ると、野良猫  
なのだろう。後ろ姿はどこか凜々しく、なぜかボクの恋人を思い出  
させた。商店街の裏路地を入つていく。狭い道の側に立ち並ぶのは  
造りの古く傷や汚れの目立つ家々。盆栽や花壇が置かれているので、  
人が住んでいることは予想できた。あの商店街の住人だろうか、多  
分その人たちも含まれるのだろうなと思つた。

どんどん奥まつたところへ行くと方向感覚がつかめなくなつてい  
く。もしかしたら違う世界にボクはきていて、この非日常もそのせ  
いなんじやないかと思えてきた。そのほうが自然だし。走つたとき  
だつて、いやに商店街が長い気がしたし。

「世界は開かずの扉だらけじゃ」

ボクの心を読んだかのよう、黒猫はつぶやいた。

「わしらはさしづめ開かずの扉を開けるための鍵。なに、この仕事  
もずいぶん楽しい。おまいらのいう『せかんど・らいふ』みたいな  
もんじや」

じゃあ、最初からこの役目をしていたといつわけじゃないんだ。  
そう感想を述べると猫は鼻を鳴らした。

「いつのころからこうなつたかはもう覚えとらん。もしかしたら以  
前はヒトじやつたかも知らん。まあ、それほど遠いことの話じや。  
そんなことはもういい。世界はなぜ閉ざされる?……いや、言い方  
を変えよう、世界はなぜ事実を隠蔽する?」

人が何かを隠したくなるときはその人にとってそれが不都合にな  
る場合だと思う。

「それは、世界にとつても変わらん。不都合を隠蔽することによつ  
て世界の均衡を保つ。それがこの地球がまともに回るためのプロセ  
スじや。今の世、正直なのは機械だけなもんじやろ?」

しおりに、何があるのだろうか?そこまではわからない、と歩み

を進めながら猫は首を振った。どこか遠くの方を見つめる。気付けば、ただつ広い空き地にきていた。相当な敷地で、雑草が我先にと背伸びをしていた。

「ここは現実世界で、いつとおまいの通つている学校といったところじゃな」

不意に立ち止まり、猫はこれが平行世界なのだ、と簡潔に説明した。

「世界というのはいくつもの可能性が平行線状に広がつてゐる。人間の生きてゐる現実というのは可能性を一つ一つ選択していに過ぎん。そしてその結果が知られる事はあり得ん。また違う可能性を選んだ場合もしかり」

まあ難しく考えるな、と頭を抱えるボクに告げた。

「この世界の秘密をおなご一人が知つたところで改变は起きん。せいぜいわしのような猫がいたことを覚えておるだけじゃ。もちろんしゃべるのは幻想だと記憶してのう」

さて、ブチネコのところへ行こうと黒猫はまた歩き出す。ボクはそれを見失わないように着いていった。雑草が痛い。こんな場所で頼りになるのは猫以外にいなかつた。しばらく歩いて、猫の歩みが止まつた。視線をその先へ向けると、一匹の猫が寝転がつていた。その側には金属製のしおりも見える。猫もしおりも美緒先輩が言つていたそれと一致する。安らかな寝顔だつたけど、警戒するようにと黒猫は注意した。

「おまいはなぜここに辿りついた？ ただの野良じやうに」

猫は黙つたまま答えない。あるいは答えたくないのかもしれない。黒猫がしおりへと近づこうとすると腕で牽制される。寝たふりをしているようだつた。どうもやりづらいなと黒猫は一鳴きした。

一つの鳴き声が交互に響く。何か会話をしているようだけれど、ボクにはそれが何でどのような会話なのかは分からなかつた。ときおり鋭い鳴き声がした、それは黒猫のものだつた。ブチの方はあるのらりくらりとかわすようにゆづくらり鳴く。

ボクは彼らの会話（きっと口論なのだろう）から意識をそらし、顔を上げた。なぜ、この世界には何もないのだろう。世界は広い野原で、生存する動物はボクと猫一匹しかいないような気がした。少なくとも、この場にはそれぐらいしかいない。ボクが何を選択すれば、このような世界が生まれてしまったのだろう？　いや、その考えは意味のないことなんだ。だつて、ボクにできることは選択することだけだから。

しばらく時間が経つて、黒猫が戻ってきた。あきらめの表情を浮かべ、ときおり鼻を鳴らす。……ちょっと待つた、今猫の表情が理解できるように……！？

「やれやれ、引き渡す気はないそうじや」

毛繕いをしながら、黒猫は語る。ボクは自分が猫に近づいているのではといやな想像をはじめてしまう。

「ただし、この世界では……おい、聞いとるのか？」

「ねえ、ボク猫になつてたりしませんよね？ひげが生えたり」

「……馬鹿は休み休み言えと、親から教わらんかったのか？そもそも、人間は変化できんのじや。そういうた能力について、人間は著しく制限を受けておる。高い思考能力と引き替えにな」

話がそれたじやないか、と黒猫は立腹した。

「やはり、おまこさんは元の世界に戻つて猫としあつを見つけ出さねばならぬようじやな」

どうやら、この猫としあつはこの世界ものとして存在してしまつてこぬらじこ。やうなつてしまつとボクのいた世界とは関係性がな

くなる。ボクの世界に戻ればこの世界の扉は再び閉ざされ、選択されなかつた可能性として極限まで圧縮され、やがて消える。まるで空想の話だ。ボクはその説明を鵜呑みにするばかりで、理解までできなかつた。

「考えるな、感じろ」

黒猫はいつかの言葉を繰り返した。でも、そうしたら「」に残つた猫はどうなるのか。この世界と一緒に消えてしまつのか。

「そうじやな、猫はそれを選択したんじや。それをわしに否定することはできん」

そう言って、ひとつ溜め息を吐いた。そして、ひとつ考えを思いついたボクを牽制するかのように釘を差した。

「『』のとくが、おまいの世界には戻せんぞ。関係性がないとはいえども、多重存在は認められておらん。もししたところで向こうにいる猫がこの世界に閉じこめられるだけじや。猫が戻れるのは、猫がそれを望み、向こうのそれと同一化することを認めた場合のみじや」

ボクはぼんやりと猫を見つめる。ふと猫は「」に向き、ボクを見つめた。小さく一鳴き、目を細めた。この世界にどじまつたいといふ意志。なぜそれを選んだのだろう。きっとそれは「チチネコ」にしか理解できないのだろう。ボクは、背を向けた。

元の世界に戻る道の途中で、ボクは聞かずにはいられなかつた問いを口にした。

「『』の世界にくる意味はあつたんですか？」

「どうじやらうな、と黒猫はとぼけた。

「少なくとも、答えは提示したはずじや。……『』までは、わしにも予想はつかなかつたのじやがな。真実に辿りつくことは容易じやない」

「」にこなければ、きつと元の世界での在処を知ることはできなかつた。きっとそういうことなのかも知れない。やがて、草原は狭苦しい裏路地に変わる。一つ言わなければいけない事実があつたのに、結局言えずじまこのまま。

……ふと下へ目線を向けると黒猫がボクに寄り添っていた。どこか見覚えのある猫に、ボクはついていくことにした。

商店街へ戻り、通学路を学校へと向かう。足元を見ると土汚れがついていることに気付いた。ボクはそれを手で払い、足を進めた。猫はそれを気遣うかのようにボクのペースに合わせて進んだ。まるでボクを知っているかのように、ボクを見つめる細い目。土のこと違和感を感じながらも、猫の後ろを歩く。

学校に着き、猫は校舎の中に入つていった。夕暮れを過ぎた校舎に人気はない。ボクは猫の動向だけに集中した。中庭に続く扉の前で立ち止まり、ボクの方を見て鳴き声を上げる。それは廊下によく響いたけれど、ボクは気にしなかつた。ボクが扉を開けてやると、猫は中庭へ立ち入る。歩みは今まで最もゆっくりになつた。注意深く、鼻をひくつかせていた。

木陰に眠るように、猫はいた。胸が上下して、心地よさそうな寝息。黒猫がブチネコを鼻でつつき、起こした。一匹は一度見つめ合ひ、そのあとブチネコはしおりへ目を向けた。黒猫はそれを口にくわえ、ボクの元へ戻つてくる。ボクはそれを受け取つた。確かに。猫たちは玄関へ戻ろうと歩み始めた。もうここにとどまる理由も、ボクをここに導く理由もないのだろう。最後にボクは玄関まで案内してやつた。

猫を見送ると、夕日が沈もうとしているところだつた。ボクも帰らなければいけない。下校の時間をとつぐに過ぎている。しおりを鞄の中にしまつて、歩みを進める。とん、と肩をたたく優しい手。振り向くと、そこに清華さんがいた。

「どうしたんですか？こんな遅くまで残つて」

「むむ、それは私のセリフだぞ。私は部活でちょっと居残りをしてたんだ」

背伸びをする彼女につられて、ボクも同じように背伸びした。広げた手が、お互いを探す。自然に手を繋げるようになったボクたちはもう立派な恋人だ。はた目から見ればそれは仲良しな女の子二

人組なのかも知れないけれど。

「で、律は何をしていたんだ？」

うまく答えられないかわりに、美緒先輩のなくしたしおりを彼女に見せた。それをみた途端清華さんはボクの髪をくしゃくしゃとかき混ぜる。ボクがずっとこれを探していてたように思われたのかも知れない。でも、ボクはどうやって見つけ出したのか、うまく過程を説明することができなかつた。だから、中庭で猫と一緒にあつたことだけを教えた。猫はもうどこかへ行つてしまつたことも。

猫のことを叱つてやろうといきまいていた彼女が意氣消沈する。ボクは苦笑して、しおりを片付けた。清華さんに渡してもらおうかと思つたけれど、それはやんわりと拒否された。

「私は律のそういうところが大好きだ」

頬は赤らめていたけれど、はつきりとボクに告げてくれた。ぎゅつ、と手を強く握る。照れるボクも、彼女にありがとうを告げる。別れが惜しかつたから、それを紛らわせるためにたくさん話をした。部活でどんなことをやつているのかも聞いた。人物画を描いていると聞いたけれど、モデルは教えてくれなかつた。今度またボードゲームで暇を潰そうとも話をした。今までで一番話をしたのかも知れない。楽しい時間は早く過ぎると分かっていた。けれど今はさらに分かっていることがある。だから怖くない、ただ、空白でこの時間を過ごしてしまうのもつたいたいと思ったから。

二人で過ごす時間は短い。けれど、これで終わりじゃない。夜だつて、明日だつて、いつだつて。ボクは彼女といられるんだ。苦しみが一人を分かつまでは。

次の日の朝、ボクの教室に訪れた美緒先輩にしおりを渡した。何をどうしたとかは別に説明しなかった。先輩の瞳は段々と輝きを増し、やがて潤みだした。

「どうやって見つけたですかりつちゃんくん！ ほんとうにありがとうございます！」

小さな身体でボクに抱きつぐ。なぜか教室がどよめいた。ボクは頭を撫でながら今度はなくさないようにな、と微笑みを彼女へ浮かべた。さらに教室は盛り上がりを見せる。百合だ、百合だ、と意味がよくわからない単語が飛び交いはじめる。

「うん、ちゃんと大切にします！ 絶対に手放しません！」

なくしたというより猫にとられたのかと思い出したけれど、いまさら言い直すのも野暮かなと思つてやめた。ふと顔を上げる泣き顔。……なんか胸にくるものがあった。説明できないけど。

と。

唇から伝わる熱。目を閉じる間もなく、ボクはそれを目の当たりにすることになった。なんか取り巻きがえらいことになつているけれどボクにはそれを鎮める余裕もなかつた。口づけた彼女は首をかしげ、にこりと笑つた。

「ありがとうございます、りつちゃんくん」

それを告げると彼女はとたとたと教室を去つていった。しおりは胸ポケットの生徒手帳の中。ボクは取り巻きがちよつとした騒動をはじめて立ちつくしたままだつた。

……何も集中できなくて、ただ黒板を書き写すだけで今日の授業は終わつた。放課後あわてて美緒先輩のいる教室へと向かつた。教室を出て突き当たりを左に折れる。といふかその方向以外に行きようがない。中央廊下を走り抜けて再び左折しようとしたとき、悲劇は起こつた。

着地と同時に、踏みつけた違和感。もう一步前へ進んで、後ろを振り返る。おお、みたことあるな君。うふ、しゃーしゃー言つてどうしたのって、うわあつー。

のんきに話していく場合じゃない。踏まれたことに腹を立てたのかボクに襲いかかってきた。ボクは再び床を蹴り上げた。

振り向きながら逃げ、蛇のスピードがゆるんでから早足をやめた。さすがに戦意を喪失したんだと思つ。正直そうであつて欲しい。

「どーしたんですかりつちゃんくん」

相当大きな叫び声を上げたんだと思つ。目をまん丸にさせているのは美緒先輩と清華さんだつた。そして、

「うひーっ

頬を蛇の舌でなでられる。真剣に死を覚悟した。

「おどろくなー、おどろくなーってマロンも言つてゐますよ

むしろたべちゃうぞー、たべちゃうぞーじゃないのかな、うわ、

冷静にツッコミを入れちゃうボクってなんなの。

「そんなー、さすがにおながが破裂しちゃうですよ」

可能だつたら食べるのー? その問いか美緒先輩は答へず。ほくそえんだ。清華さんはマロンを指先でながら疑問をボクに投げかけた。

「うひーえ、じんなとじりまできてどうしたんだ、私に何か用か?

?

はつと用事を思つ出す。ですから佩佩くすのまつ勘弁ぐだぞー……!

「いや、美緒先輩に確認したいことがあつて……

「ん? 美緒にですか?」

ボクは頷く。特にそつこつ空氣を出していたわけじゃなかつたけど、何か察してくれたのか、清華さんは部活があるからとつて先に廊下を歩いていった。

「とりあえず、さつきはめんなさい」

マロンに対する失礼を詫びる。それはマロンがちゃんとしてくださ

いと当然の答えが返ってきた。蛇に謝っているボクって何なの？それを考えるときつと辛くなると思つてやめた。

「あの、朝のキスのことなんですけど……」

何あんなことをしたのか、彼女に訊くと彼女は意外そうな顔をした。口に手を当てて、首をかしげる。

「うーん、あんまり気にしないでください。なんというかですね、嬉しかったのでやっちゃつたです。心のそこからの感謝を伝えたくて、こういう感じになっちゃいました」

そうして自分で作つたげんこつを頭に当てる。舌を出してえへ、と笑つた。

「あ、思いつきなのでそんな気にしないでくださいよ……でも」

「でも？」とボクは聞き返してしまつた。

「好きな人にしかこんなこと、しないんですからね？」

思わぬ一言にぐらつときてしまう。いや、こんなんじゃないダメだ。だって、彼女はあくまで先輩なのであって、恋人じゃないんだ。ちゃんと関係は整理しておかないと、いざとなつたとき大変だ。

「なに考え込んでるですか？」

その原因を作つたのはあなたでしきつた。つぶらな瞳がボクをのぞき込む。彼女はボクの気持ちを知つてか知らずか頭を抱え込むボクに微笑んだ。

「そうだ、たまには美緒に付き合つてください」

彼女に手を引かれ、きたところは図書室だつた。ちらほらと学習している生徒がいるぐらいで、読書をしている生徒は見受けられなかつた。ボクは彼女に誘われ、貸し出しカウンターの中に入つた。

「え、ボク図書委員じゃないんですけど」

「今日はもう一人の担当の方がお休みなのです。だから手伝つてください」

うーん、それはボクを引っ張り込む前に言つてくださいね？どうにしろ、先輩の頼みには断れないんだけど。貸し出しカウンターに

人がくることは滅多になかった。昼間は忙しかつたらしい（そのときは別の生徒に手伝つてもらつたという）。昼間の生徒は部活動があつたためかわりにボクが選ばれたということだった。本当はボクのクラスまでわざわざ迎えにきてくれるつもりだつたらしい。全くの走り損だつたということだ。

資料を借りりに一人の生徒が訪れる。ボクは貸し出しカードと貸出期限のかかっている紙に口付のはんこを押した。紙を本に挟み、生徒に渡す。慣れないセリフに声がうわずつた。生徒が図書室を出て、ボクは溜め息をついた。

「よくできましたですよ」

いやまあこれぐらいだつた何とかなるけど……。彼女は貸し出しカードをクラス別になつてある小さな棚の中に置いた。こと、と音がしたけれどみんなの集中力はそれぐらいでは途切れないので、ボクは彼らの邪魔にならないように本を選び、読書のための本を選んだ。あまりすることはないので、と彼女がそうするように勧めてくれたのだった。特に何も考えずに文庫本を選び、カウンターに戻つてそれに目を通した。そのあと何人かに対応をしてチャイムが鳴つた。ボクらは最後に本棚を軽く整理して、図書館をあとにした。

「今日は本当にありがとうございます、……んー、なんか一日中ありがとうございますって言つてた気がするです」

その通りかもしれない。ボクがそう笑うと先輩も微笑んだ。彼女となら、またきてもいいかな……そんなよこしまなことを考えたりも、した。

三人しかいない放課後の第一理科室で、ボクは選択をする。選択の結果は一人以外には分からぬ。条件の揃つたカードはもういる。そしてボクは選択させる側になる。彼女はボクの顔を窺う。ボクは彼女が何を選んでもかまわなかつたんだけどわざと難しい顔をしたり大げさに安堵したりして楽しんだ。

手持ちのカードは一枚。条件は揃つた。ボクはカードを捨て、宣言した。

「よしつ、一番乗りー」

「えー、ずるいですー」

「あとは美緒との一騎打ちか」

不服そうな少女と自信満々な女性。一人の選択と結果を眺めることにする。一人がカードを引く。あ、今一瞬顔が曇つた。彼女は黙つてカードをかき混ぜる。お互いカードが揃えば上がりという状況。二枚のカードをじっくり眺め、真剣な表情で少女がカードを引いた。そしてガツツポーズ。

「やつたー！奇跡の大逆転ですー！」

両手を挙げて喜ぶ美緒先輩とは裏腹に、清華さんは心底悔しそうだった。小声で何かをつぶやき、自分の世界に入っている。ボクはそんな彼女にカードの山を押しつけて、シャッフルするように頼んだ。

「ああ、分かってる。やればいいんだろうやれば。くそ、まさか私が負けるだなんて……」

いや、結構な敗率ですよ清華さん。

「というか、くそ、とか女の子が言つていい言葉だとは思えません」「むむ、気をつける……何で律の言葉には説得力があるんだ？」

「それはお姉様の好きな人だからでしょうー？」

さりげなくそういうことを言える美緒先輩もなかなかの説得力です。確かに、信頼におけるない人や自分と関係ない人の言葉って耳に入つてこないもんなあ。でも、こんなボクが女性に文句を付けてもいいものだろうか。そこは深く考えないことにした。照れをごまかすようにシャッフルする手つきが大きくなる清華さん。ボクは次は何のゲームをするか美緒先輩に訊いた。

「んーもう一回ババ抜きをやりたいです」

この先輩幼女はババ抜きと七並べと神経衰弱しかできないと言つていたけど、ボクにしたらそれで充分だ。カードを混ぜ終えた清華

さんがカードを机に滑らせながら振り分ける。同じカードがやたら多い気がした。

「カード混ざつてないと思いません?」

「むむ、それは美緒の氣のせいだろ?」

まあ、よくカードを切つていたし。ボクたちは一回戦を始める。楽しくて、淡い時間。こうやって清華さん達と遊べる時間も一年ないんだなと思うと少し胸が痛くなつた。おかしいね、消えてしまつわけじゃないのに。

チャイムが鳴つて、ボクたちははじき出されるように校舎を出た。美緒先輩は楽しそうにはねながら下校路を進む。ボクもそんな彼女につられて笑みをこぼした。やがて彼女ははねるのをやめ、ボクと清華さんに振り向いた。

「今日はとても楽しかつたです」

ひまわりが咲くのはまだまだ先だけど、夏のそれに負けないぐらい、満面の笑みを浮かべた。その表情を浮かべながらも、先輩は溜め息をついた。

「それに、君たちなりきっとじゅうと、仲良しでいられると思ひますです」

すっかり表情の曇つた彼女が気付けばいた。無理矢理作った笑顔、頬が引きつっている。

「実はですね、美緒は二人を監視していたですよ。本当にりつちゃんくんはお姉様にふさわしい人なのか。ちゃんと見極めたかったんです。……でも、そんなこと、杞憂でした」

ボクと清華さんの手を取り、一人手を繋ぐように促した。そうして、美緒先輩は手を離す。

「美緒はお一人とは仲良しなお友達に戻るです。恋人じゃ、ありません。だからどうか。お一人は恋人になつてください」

彼女は清華さん、と名前で呼んだ。

「怖がらないでください。りつちゃんくんは決して『あんなこと』はしません」

どうかお幸せに。分かれ道で美緒先輩は笑顔を浮かべながらそう言つた。彼女は本当に助けなければいけない人を見つけたと言つた。ボクはその言葉に頷きを返すぐらいいことしかできなかつた。

美緒先輩が去つたあと、ぽつりと清華さんが口にした。

「私は、君に謝らないといけない」

本当は、彼女に心が揺れていったことを告白した。

「この関係が、ずっと続けばいいと思ってたんだ。そんなの、いつかはおかしくなることになるつて分かつてていたのに。私は、ずるい人だ」

ボクはその弱音をキスで塞いだ。街中で人がいたにもかかわらず。近い距離で彼女を見つめると彼女は涙を流しはじめた。

「それなら、ボクも同じです。みんなが同じ気持ちでいられたらよかつた。いつかは選ばなければいけなかつたのに、そこから逃げ出したのはボクです」

謝りながら、ボクは彼女の涙を手で拭う。

「美緒先輩はすごい人です。やつぱりかなわない」

そうだな、と頷く清華さん。誰だつて、願つてしまつ。変わらないことを。いつまでも続くことを。それを見んでしまうのに、美緒先輩は違う未来を選択した。新しい使命を見つけて、その使命を果たすために。

清華さんとも別れて、ボクは我が家に戻る。今日も暖かな灯がある場所。この場所からも、ボクは巣立つていかなければならない。いつまでも、ボクたちは子供ではいられない。

次の日の朝。いつものように商店街で、いつものように美緒先輩に会う。いつものように笑顔の先輩に、笑顔で挨拶を返す。いつもと違うのは、急に抱きついたりすることがなくなつたぐらいか。いつもの先輩で、ボクは内心安堵した。

途中で清華さんとも合流する。朝から強い日差し。そろそろ雨の多い季節になる。ボクたちは横に並びながら登校した。教室に三人で入る……つて、二人は違う教室でしじょうが。

「私は純君に用事があるのです」

「私も律と世間話が……」

まあ、いいんですけど。遅刻しないでくださいねと一人に釘を差した。昨日話していた人のことってもしかして純平のことなんだろうか。ボクは気を遣つて席を立つた。

「今更のことなんだが、私たちって、昼間にその、デートしたことはないよな？」

……意外だつた。マスターの店に行つたり、市街地周辺をぶらぶらと散策することはあつたけれど、そのどれもが夜のことだつた。ボクは一つ返事で頷いた。

「じゃあ、しよう、デート」

変な誘い方だな、と思ってボクは吹き出してしまつた。怒られながらボクは予定を相談する。あんまり遊べる場所はない街だけど、二人でいるだけで充分楽しい。遊びに行く日は週末に決まつた。予鈴が鳴り、先輩達はあわてて教室へと走つていつた。遊ぶ時間が違うだけなのにボクの心は浮かれてしまつてどうしようもなく、頬のゆるみが純平に指摘されても直せなかつた。

……夢を見た。雨の中、ボクは独りで泣いている。意味もない言葉を叫び続けて、その内喉が潰れて声はかすれる。その言葉は最初には意味があつたはずなのに、最後には囁語と何も変わらなくなつていた。

雨はその叫びすらもかき消す。まるで口を塞ぐように。伝わらぬ言葉が地面に叩き付けられて砕けて壊れる。ボクは地面にむかって拳を叩き付けた。痛みが鈍く伝わり、それでもボクはそれをやめない。やがて腫れるボクの手からは赤黒く、濃い血が流れはじめる。神経が麻痺して、運動が止まる。しゃくり上げるボクは空を見上げる。頬に流れるものが涙なのか雨粒なのか、もうよくわからなかつた。

その目を閉じて、世界から遮断する。ボクといつアイデンティティは認められない。ボクはボクでしかないはずなのに、型にはまらなければいけない。それは今のボクにとつては悪夢に他ならなかつた。誰もいない世界で、ボクは崩れ去つていく。何を、どこで間違つてしまつたのだろうか。そればかりが頭の中を駆けめぐつていく。

冷たい身体が小刻みに震える。指先は何かを求めて動いている。何を求めているのか、誰を求めているのかは分からぬ。そもそも、ボクがどうしてこんな世界にいたのかも。ボクは静かにこの世界から身を沈めた。もう、何も聞こえない。これ以上は何も求められない。求めようがない。誰かの泣き声も、もう過去の話だつた。

……痛みでその日は目が覚めた。ベッドから転げ落ちるほど寝付きが悪い覚えはなかつた。鳴らない目覚まし時計を見つめる。世間一般的に昼前。あと一時間ぐらいで昼の番組が始まる。

「つて落ち着いてる場合じやない！」

階段を駆け下り、顔を洗つた。朝食なんて食べている暇なんかい。あ、でも化粧はしなくちや……。どう考へても間に合いそうに

なかつたので、清華さんに断りのメールを送つた。数分後、文面からして、立腹な内容の返信が返つてくる。携帯に謝りながら、大急ぎで着替え（服は前日に用意してあつた）、ボクはかあさまの三面鏡へと向かつた。

「あらあら、グロスが曲がつてゐるわよ」

立ち上がろうとするボクを再び座らせ、彼女がマイクの直しをしてくれた。マイクはちゃんとやらなきやダメ、とたしなめられる。「例えば、あなたの好きな人がだらしない格好できてごらんなさい？ 私なら幻滅しちゃうわ。まあ、パパのファッションセンスは最高だけどね」

さすが、かあさまの選んだ人だけある。確かに、彼女の一句も一理あるなと思えて、黙つて彼女の言うとおりにした。それからは大あわてで家を飛び出していった。かあさまが傘を持っていくように忠告していたけど、急いでいたせいでボクはそれを忘れてしまつた。悪夢と一緒に、置いてきてしまつた。

バスに映つたボクの姿を目に焼き付けて車内へと乗り込んだ。日差しに映える白のノースリーブのポロシャツ。下はスカートにしようか悩んだけど、結局クリーミーのパンツにした。居眠りしてしまわないように、外の流れしていく風景を眺めていた。今日も天気はよく、散歩する子供連れやカップルをよく見かけた。会つたらまずなんて言おう。そんなことをぼんやりと考えながら、法定速度で進むバスに揺られていた。

清華さんはバス停で待つっていた。待合い席に座つて、待ちくたびれている様子だった。バスの窓越しに目が合つ。ボクはいつの間にか混み合つたバスに辟易しながら彼女の元を目指した。レディーススーツを着た彼女は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「むむ」

「えー、と」

「むむ」

「ジュースおーります」

よろしい、とすました顔で言われる。ボクはあわててすぐ近くにあつた自販機でコーヒーを買つた。もちろんブラック。謝りを入れながら手渡す。

「なんていうか、遅刻はダメだよ、遅刻は」  
いいわけとかしたら余計に怒るだらうなと思つて黙つて彼女の話を聞いていた。話はほどほどで終わつて、立ち上がつた。立ち上がろうとしたボクの前にきて、そのまま覆い被さつてきた。額に小さな感触。

「うわ、こ、こんなところでしないでください」

「いいだらう？ 減るもんじやないし。これで許してやるんだから、かわいいものじやないか」

「でも、白昼堂々とキスするなんて……」

なんか大胆すぎる。ただでさえ人が多いのに、バス乗り場なんて昼間、人がいないことなんてないのに。実際、こんなボクらに視線が集中していた。どう考へても程度の過ぎた女同士のじやれ合いだつた。

「それなら、夜ならいいのか？」

その発言はこの場では不適切すぎます！ いやどこで言つてもダメだから！ にやけ笑いの清華さんを促してこの場を去ることにした。ほんと、彼女にはしてやられている。まだ昼食には若干の余裕があることとで、清華さんの買い物を先にすることにした。河川敷の近くに建てられた複合型のビルには、たくさんのブランドショッピングが入つていて、建物中央に設置されたエスカレーターに乗つて上の階へ行く。彼女の足は小物を多く取り扱つている店で止まつた。彼女は迷いなく先へ進んでいく。ボクはきたことのない店だった。そこで店先から見物することにした。女子高生や若いカップルが客層の中心で、商品も女性をターゲットにしているようだつた。アロマやマグカップ、キーホルダーやネックレス、どれもかわいらしかつたりどこか女性的な雰囲気を演出していた。

彼女は時計のコーナーにいた。視線をちょこまかとまよわせて、

やがて肩を落とす。

「どうしたんですか？」

「いや、どうやら私の探してた時計は売り切れてしまったようだ」「店員さんに訊いてみたものの、商品は一点もので、取り寄せも効かないらしい。ボクはよしよしと彼女の頭を撫でた。こういうときはどうしようもない。せつかくだから、とボクはペアのネックレスを買ってあげることにした。一いつ組み合わせて一つの絵になるなんていうクサイやつだ。」

意外とボクの彼女は気分屋なのかもしない、いや、今までボクが気付いていなかつただけかも。すっかり上機嫌になつた清華さんは鼻歌を歌いながらすぐ近くの楽器店へ向かつた。あれ？

「清華さん、なんか楽器でもやつてるんですか？」

「ん、話していなかつたな。趣味でピアノをやつているんだ。もう習つてはいないけどな」

鍵盤楽器の置いてある「一ナーダ」で彼女は試奏がてら、白鍵に触れた。思いのほか音が大きく、音量を調整して弾き直す。猫ふんじやつたでも弾くのかなと思つたら全く違つた。彼女の演奏に場がどよめきはじめる。両手は器用に鍵盤を移動する。演奏上の都合なのか、詳しくないボクにはよくわからなかつたけどたまに交差をさせていた。

たまたま隣にいた大人の男の人がニコライ・カプースチンの作品だと教えてくれた。と、言わてもボクにはよくわからなかつたんだけどね。弾き終わつた彼女は予想外の拍手に驚きを隠せないようだつた。

彼女はピアノ雑誌の最新刊を買って、さらに違う店に向かつ。ボクは荷物持ちを申し出たがその必要はないと断られてしまつた。もう一つ寄りたい店があるんだ、と案内をしながらボクの隣を歩く。空いた手をボクの指に絡ませて繋ぐ。彼女の手は冷たく柔らかく、赤ちゃんの肌のような纖細さを感じた。

「ここだ、と言つて清華さんは立ち止まる。ボクの行つたところの

ない場所だ。だって、いつもがあれまでそういうのは買つてもいいつ  
ているし……。

「どうした？」

いや、その、ボクあれだし、さすがに恥ずかしいっていうか、い  
いのかなここにきて。店内をざつと見る。シンプルな白から派手な  
柄のものまで、たくさんのお洋服が飾られている。そのお洋服のすべて  
が肌着 ショーツとかブラとかキャミソールとか だった。

「ほ、ボクここで待つてます」

不服だろう、唇を尖らせる清華さん。恥ずかしいから勘弁して欲しいボク。一人に割り込んできたのは笑顔の素敵なメガネの店員さんだった。

「初めてですかあ？ それだと恥ずかしいですよねー、でも」安心ください。私たちスタッフがサポートさせていただきますっ

高価そうな白のスースにタイトスカートの彼女に背中を押され、結局店内へ入ってしまった。いや、むしろこれを機に慣れておいた方がいいのかもしれない。いざ、ランジェリーショップへ。

白の照明が商品に映える。ボクの目を気にもせず、清華さんは下着を手に取つたりブラを胸のところに当ててボクに似合うかどうか訊いてきた。そんなのうまく答えられるわけがない。でもシンプルな方が彼女には似合うと思ったのでそれは忠告しておいた。

視線を違うところにむける。女性客が数人の他に、カップルのお客さんもいた。男の人はもつぱら視線をいろんなところにさまよわせていた。ちゃんと見なさいよとふくれる女人。その光景がほほえましい。

「お客様、お気に召す商品はございましたか」

驚いて後ろを振り向くとさつきの店員さんが、メジャーを持つて立っていた。今日は清華さんにっこてきただけと伝える。せめてサイズを測つておくことを勧めてくる。サイズと言われても、これはパッドだから測つてもしょうがない。けどなんか引き下がりそうもなかつたので素直に測つてもらうことにした。

……。うん、なんだろう、この虚しさは。Bカップと言われたところで何の感動も起きないんだよね。清華さんはもつぱりこころに行つてゐるし。ボクはとりあえず礼を言つて店員さんから離れた。

何着か下着を持った彼女は試着室へ行つてると告げた。それを

見送りうつすとすると清華さんの足が止まつた。

「いやいや、君もきなさいよ」

「はい。」

「はい？ 腕を引っ張られるボクは抵抗もできずに行されていく。誰かこの暴挙を止めてください。女の子同士でもそこまでしないでしょ、普通……！」

一般的な洋服店のそれより広めにとられた試着室。カーテンは全身を隠すようになつていて、向こうからこちらの様子はうかがえないうになつていた。……ちょっとした密室だ。

「少し後ろを向いていてくれ、さすがに素肌を晒すのは恥ずかしい」言われなくとも後ろを向いていた。衣擦れと小さく漏れる彼女の声。視覚がないぶん、その音は余計強調されて聞こえた。ボクは素数を数えながら（途中で偶数を数えていることに気付いた）彼女が着替え終わるまで待つた。

「よし、こっちを見てもいいぞ」

「いやいやいや。着替えたといつても下着姿じゃないか。やつぱりボクは振り向けない。そんなボクに彼女は溜め息一つ。

「ほれ、どうだ」

ボクの肩を持つて強引に振り向かせた。何ですかその握力は。結局彼女の下着姿を拝むことになつてしまつた。

淡いピンクのブラ、胸元には花の模様があしらわれている。視線を下に動かしたのは間違いだつた。下も肌着一枚で、ブラに合わせるように おそらくワンセットなんだろう 同じデザインのショーツを穿いていた。素肌はなまめかしいといつより健康的な肌色といつた感じだつた。

「意外にじろじろ見られると……恥ずかしいものだな」

少しばかり清華さんの頬が赤い。ボクはごまかすように視線をさまよわせる。その内、腕に小さな痣を見つけた。どうしたのか尋ねると、彼女はそれを片方の腕で隠し、苦笑いした。

「体育の時間にな、怪我をしてしまったんだ」

「たいした傷じやないらしい。ボクはそれ以上気にしないよつにす

ると、それよりも腕で胸が強調されていることに気がついてしまった。意外にがつかりじゃないかもしない。つてなにやましいことを考えているんだボクは。

「さて、違うのも試してみようかな、……ほれ  
後ろを振り向くように指示される。それからほさつきのくりかえしだった。正直どれが一番似合つたなんて分からない。ボクにそういうセンスはないし、あつても困る。ボクは無難なコメントを彼女が怒らない程度に付けていった。どれも着こなしてしまう彼女。派手なものは似合わなかつたけど、黒や紫のよつなきわざいものでも彼女にかかれば大人っぽさを強調してくれる。

次第に彼女の下着姿にも慣れていった。恥ずかしさと/or>のはそれなりに薄れていくものらしい。彼女は最後の下着に手をかけた。後ろを向いている途中、衣擦れの音が止まる。う、と小さいうめきが聞こえた。ボクは後ろを向いたまま尋ねる。

「いつ、痛い」

あまりにも苦しそうだったので、ボクは焦つて振り返った。彼女はショーツをはきかけのところだつた。どうやら足の指がつつてしまつたらしい。……いや、ちょっと待つて。足下より上を見ちやいけないんじやないか？

「絶対顔を上げるなよ！」

怒号が響く。その声自体に反応してしまつてボクは視線をあげてしまつた。……言葉にできません。下手に言えば殺されます。

「…………！」

その前に、ボクがまずい。今更どこに手をやれというんだ。いや、それは大事な部分からは手を伏せたよ。だけど顔は見られない。絶対に。なるべく違う想像をするんだ、何というか、富良野高原の大自然みたいな。もう、いいぞと言われて顔を上げる。つて

「うわあっ」

「おおっ、しまった」

なんでブラしてないんですか！見てしまつた。ホテルの浴室で邂

迺したときは湯煙でよく見えなかつたけど、今回はそれはもう。彼女の叫びと同時にボクの意識は吹つ飛んでいった。

耳に入る音が雨の音じゃなくて、換気扇の回る音だと気がついたのは目が覚めてからのことで、清華さんは申し訳のなさそうな顔でうつむいていた。ボクは身体を起こし、清華さんからここが従業員の休憩室だということを教えてもらつた。古い型の家電は汚れが目立つていて、テーブルの上にはカップラーメンの容器が置いてあつた。箸は容器の上。

ボクはソファに寝かされていて、窮屈な姿勢をしていたせいか、少し身体が痛かつた。ボクは背伸びを一つして、心配そうにする清華さんの頭をなでた。……少し恥ずかしいのは、彼女の素肌を見てしまつたからというより、一人でなんなところに入つたことを他の人に知られたからという理由のほうが大きいからかもしれない。

従業員のかたは仕事に戻つてしまつたらしい。帰りに礼を言つておひづれ、と思った。恥ずかしはあるけれど、黙つて帰るのはよくない。

ボクたちはもう少しだけここに残つてから行くことにした。ボクたちのような一般客がここにいてはいけないような気がしたが、ゆつくりしていつていいと言われたらしい。きっと無害に思われたんだろう、そして実際に無害だ。彼女がコーヒーを入れてくれる（それぐらいの備品だったら使ってかまわないといわれたそうだ）。スプーンで粉をすくい、それがさらさらとコーヒーカップに流れいく。ポットのお湯を入れ、小さなスプーンでかき混ぜる。

「律は、角砂糖三つだつたよな」

うん、と頷きを返す。彼女はもちろん何も入れない。カップを置くと、こと、と乾いた音が部屋に響いた。換気扇の音がうつすらと流れる有線をかき消す。ボクは冷めるのを待つてから一口ずつ飲んだ。

彼女の身体を思い出す。清華さんの腕、いや、腕だけじゃない。

身体の所々に彼女が隠した傷と同じようなものがいくつかあった。薄紫色の痣は最近つけられたようなものじゃない。だから彼女自身もそれに対しても無防備になつてたのかも知れない。ボクは迷つた。

今がその理由について訊くタイミングなのか……違うような気がした。今日はせつかくのデートなのだし、お互い気分を害したくはない。だからボクは違う話をすることにした。

「そういえば、そろそろおなか減ったね」

そう言いながら、おなかをさする。ふふ、と清華さんは皿を細めて笑つた。

「そこはぬかりないぞ。今日もお手製のお弁当を用意してきた」

今日は少し大きめで、一段積みのそれを箱だけ見せ、またしまう。きっとおかげで用意してきたんだと思う、いつもはサンドイッチだけだから。ボクの気分もだいぶ落ち着いてきたので、ここをおいとすることにした。ボクは彼女とコーヒーを洗つて、一緒に店へ戻ることにした。まだ清華さんも会計をしていなかつた。

「それにしても、女の子同士で何してたんですかあ？」

待つっていたのはニヤニヤ顔の店員さんだつた。清華さんがじどろもどろになつて下着が似合つているか確認してもらつていただけだと答えたけれどあまり信じてもらえなかつたようだつた。赤くなりながら二人は店を出た。

ビルを出ると、店内以上の喧騒が溢れていた。側の道路は混んでいて、車たちはエンジンを不服そうに鳴らしながら先へ進まないものかと待ちくたびれているようだつた。クラクションの音から逃げるよう、ボクたちは喧騒から離れていつた。

歩いて五分ぐらいで着く河川敷。昼の高く、明るい太陽を浴びて川は光の粒で溢れていた。ランニングをする短パン姿の老人、犬に散歩をさせられている女の子とそれを優しい目で見守る女性。さつきの騒音を忘れてかのように、静かな時がここには流れていつた。

ボクたちは食事ができるテーブルとベンチを見つけて、そこで昼

食をとることにした。彼女がお弁当を広げて、ボクはプラスチックのコップに一人分の飲み物を用意する。冷えた紅茶。外に出て熱さを感じていたので彼女の判断は的確だった。律儀にボクたちは食事の挨拶をして、パンを口にする。今日は少し豪華に、クラブサンドだった。

「お手軽で、しかもおいしい。片手で作業はできるし、これ以上の料理は存在しないだろう?」

彼女はまるで自分が考案者かのように胸を張る。ボクはなんだかおかしくて笑ってしまった。おかげにも手を出す。唐揚げは噛むと同時に肉汁が溢れて、チーズの入った卵焼きはほんのりと塩味がついていてとてもおいしかった。

一人で昼食に舌鼓を打つていると、一匹の猫がやってきた。首輪はなく、どうやら野良らしい。清華さんはタコさんワインナーをつまむと猫のほうへ放つてやつた。うまくキャッチする黒の野良猫。満足そうに背伸びをして、ぶらりとどこへ行つてしまつた。彼らはのんきなのか、必死なのか、ぼんやりとそんなことを思った。考えることはあるんだろう。でも多分ボクたちとあまり変わりない。ボクたちだって毎日そんなことを考えて生きているわけではないのだから。そう結論づけて、ボクは清華さんとの会話に戻つた。

最後のクラブサンドに手をつけたボクに、彼女がぼそりと言つた。

「こうやって、外で誰かと食事するのは久しぶりだな」

親は共働きで、滅多に家に戻ることはないらしい。お互にすれ違ひの暮らしが、家に帰つても夜中だつたりして、ろくに親の顔も見られていないという。

「だからって夜遊びしていい理由になんかならないんだけどな」

笑う清華さん。自嘲じみていて、どこか切なくて、ボクはそれを「まかすことしか言えなかつた。それ以外、ボクにはどうしようもなかつた。

「でも、そうじゃなかつたらボクたちは逢えなかつたんだよ?」

そうだな、確かにそうだ、噛みしめるように彼女は繰り返した。

昼食が終わって、ボクたちは河川敷を散歩することにした。ながらかな斜面を清華さんは走るように降りていく。楽しそうな表情はまるで少年のようで、心からの笑顔をボクに向けてくれた。ボクも真似して駆ける。彼女に追いつきそうになつたとき、バランスを崩してしまつた。彼女がそれを受け止めてくれる。清華さんに抱きとめられながら、ボクは彼女の肩におでこをぶつけた。彼女の髪からはふわりといい匂いがした。

川の水はあまり綺麗とは言えず、また防護柵で守られていたので遠目から眺めることしかできない。でも今日の晴天のおかげで右手、下流側に田を凝らせば河口はすぐそこで、海の向こうにはうつすらと島を見るこどもできた。よつぱんど晴れないと見ることは難しい。夏には一人で海に行こうかと提案する。彼女は喜んで頷いた。せつかくなら遠くへ行こうと清華さんが言つ。

「もつと北に行くとな、こことは比べものにならないほど澄んだ海が広がつてゐるんだ。私は一回しか行ったことがないから、今度は律と一緒に行こう」

未来の話をすることがすく楽しい。そういう話ができることがすごく嬉しい。ボクたちは何も、先の見えない現在を生きているわけじやないんだ、と信じることができたから。

散歩の途中で足を止め、一人は雑草の芝生へと腰掛けた。洋服が汚れるからと用意周到な清華さんがシートを下に敷いた。一人が腰掛けようとくうどいい狭さだつた。肩を寄せ合い、向こう岸を見つめる。無言の、密度の濃い時間が流れる。話しかけようとすると、彼女は静かに寝息を立て眠つていた。

彼女の香りを感じながら、ボクは彼女の髪をなでた。さらさらで、首元にかかるないぐらいの長さ。ボクのほうが長くて、お互に似合つていた。ボクは彼女が起きるまでずっと、ゆつくり彼女の髪を

梳いていた。

清華さんはボクに身を委ねてぐっすりと眠っていた。彼女が目を覚ますのに一時間ぐらいかかった。ボクも途中でうつらうつらしながら、彼女の寝顔とこの街の景色を眺めていた。目を覚ました彼女は背伸びをするともう一度寄りかかり、胸が高鳴るほど甘い声でつぶやいた。

「心地いいな、律の側は……もうちょっと、こうしていい」

ボクは肩を寄せて、頷いた。しばらく経つて、ボクの手を優しくだけた。立ち上がり、繰り返し背伸びをする。ボクはシーツをたたんで、彼女にならった。ここでぼんやりしていてもよかつたけど、さすがに手持ちぶさになってしまつ。

ボクは次どこに行く予定なのか質問をした。彼女から帰ってきたのは意外な言葉だった。

「律は、ゲームセンターに行つたことはあるか？」

純平に誘われて 強引に引っ張り出されて 何回か行ったことはある。そう答えると清華さんはあごに手を当てて、頷いた。

「私は行つたことがないんだ、だから案内してくれ」

ボクは承諾する。せっかくなのでアミューズメントパークへ行くことにした。アーケードゲームばかりでは飽きてしまうだろうし、第一ボクが得意じゃない。運良く歩いてすぐのところに複合型の施設があった。外観は決して新しいとは言えないけど、昔から人気のある場所だ。自動ドアをくぐると、清華さんは耳を塞いだ。ボクは苦笑いしながら店内へ入つていた。人でごった返していたので、二人は手を繋ぐ。片手で耳栓をしながらそわそわと彼女は視線をさまよわせていた。

とりあえずベタに、UFOキャッチャーから遊ぶことにした。あれが面白そうだ、と指をさしたのはお菓子の詰め合わせが置いてあるそれだった。

「清華さん、色気より食い気ですか？」

「むむむ。それは失礼だと思わないかね？」

失礼しました。ボクは外観を眺める。箱形の景品はくぼみができるいるが、それが上になるように置かれていた。一旦倒して、それから横にクレーンの爪を引っかけなければ取れない仕組みのようだ。ひとまず、ボクがお手本を見せる。お手本、といつても取れる保証はないんだけど。

お金を入れて、ゲームスタート。どうやら決定ボタンを押さなければ自由に方向を調整できるようだ。ボクは運良く横に倒される箱へ狙つてクレーンを持つていった。彼女は横に行き、そこから案内してくれる。彼女の目は真剣に箱を見つめている。口元はゆるんでいるから待ち遠しくてわくわくしているんだと思う。

一人納得したところに置けたら、決定ボタンを押す。クレーンがゆっくり下へ降りる。もう一回ボタンを押すと、そこからは動かすことができない。うまい位置に持つていけたと思った。爪が箱を掴もうと聞く。片方の爪が引っかかる。もう片方は……。爪は箱の上を滑つていった。掴んだほうも箱の重さでバランスを崩して外れる。むー、とボクは思わずうなつてしまつた。

今度が私がやつてみる、と清華さんが言つた。ボクは順番を渡してあげて、かわりに横から指示することにした。窓にかじりつくようく箱を見つめる。そのうち箱が逃げ出しそうな気がする。彼女が楽しそうならそれでいいんだけどさ。決定ボタンを押し、タイミングを計つてもう一度押した。

爪が開き、今度は両方がそれをとらえる。クレーンは揺れながらも、出口まで搬送して、爪を開いた。がたん、と景気のいい音がする。彼女は景品を手に取るとボクに見せつけてくれた。本当に子供みたいに笑う人だ。ボクはいい子いい子と頭をなでてあげる。つま先立ちをして、髪を梳くよう。心地よさそうに彼女は目を細めた。いつもの凜々しい顔よりこっちの顔のほうが似合つている。けど、それはボクにだけ見せる表情であつてほしい。そう願つた。

「 1Jアーチに半相占いがあるぞ! やつてみるか? 」

ボクは彼女の気のすむように、と笑つて返事をした。一見怪しげな機械。なぜかキヤツチコピーが『しかし地獄行く』だつた。いい結果が出そうにないですよこれ。けど占い師が監修したもので、なかなかの評判らしい。ボクたちは並んで順番を待つた。なんか懐かしい感覚だな、と清華さんは言つた。

「 一度だけ遊園地に行つたことがあつてな、半日ぐらい順番待ちで終わつたんだが、それでも、待つてはいるだけでも楽しかつたなあ 」遠い目は何を見つめているんだろう、彼女の横顔を見ながらそんなことを思った。やがてボクたちの番が来て、機械と対面した。顔の大きなおばさんが虫眼鏡を持つて睨んでいる。よくこんなディティールで流行るな、とむしろ感心してしまつた。ボクは左手、彼女は右手を指示された場所に置いた。

結果は横から出てくる紙の中に書いてあつた。おみくじみたいに細長いそれを受け取つて、機械から離れた。このままの関係を続けることはとても難しい、とまるでボクたちのことを見透かしたかの内容がそこには書いてあつた。変化していくことを互いが認められたら、その関係は一生途切ることはない、とも書いてあつた。ボクは静かにその言葉を噛みしめた。清華さんはどう思ったのだろう。彼女は何も言わず、その紙を財布の中にしまつた。

氣を取り直して、今度は一階へと向かう。一階はゲームセンターではなく、ボーリングとダーツ、それとビリヤード場が設置されている。下に負けず劣らず盛況で、ボクたちはたまたま一ローン空いていたボーリング場で遊ぶことにした。点数表に表示するための名前を書き、シユーズを借りる。清華さんはボーリングの経験があるという。一方のボクはやつたことのあるものの、あまりの下手さに

絶望してから一回しかやつていなかつた。

三回やつて清華さんの完封勝ち。すっかり鼻の高くした彼女に機嫌を悪くした（ふりをする）。

「ちょっとぐらい手加減してくれたつていいじゃないですか」

「手加減されて勝つたところで嬉しいのかね、君は」

……もつともすぎてぐうの音も出ません。ボクは彼女からボーリングの特訓を受けるため弟子入りすることにした。

彼女のおかげでだいぶ上達した。スコアが三桁に届くだなんて、今までのボクにはありえないことだつた。今までつまらないと思えなかつたものが楽しくなつていく、その感覚もなかなかいいものだつた。二人ともいい気分で施設を出た。日が傾き始め、人々も帰り路にゆつくり向かつてゐる様に見えた。ボクたちも例に漏れず、これから駅へ向かう。ボクはバスで帰るつもりだつたけれど、彼女を駅まで送るぐらいの余裕はあつた。

別れなんて下校のとき、いつも交わしてゐるはずなのに今日はなんだか言いにくい。彼女もそうなのか、手を繋いだままうつむいているし、ボクもどこか気恥ずかしいのと何を言えばいいのかわからぬいのとで黙つて駅へと歩みを進めていた。

歩くと結構な距離があるはずなのに、思いのほかすぐに着いてしまつた。何か言わないといけない。簡単な一言でいいはずなのに、それが思いつかない。口火を切つたのは清華さんのほうだつた。

「あのな、律、できたら……もつちよつとだけ、あとちよつとだけ一緒にいさせてくれないか」

ボクが迷つてゐるうちに、自宅の近くまで向かうバスが出て行つた。寂しそうに眉尻を下げる彼女を突き放すこともできずに、ボクは一緒に電車に乗ることにした。

胸を撫で下ろす彼女を見つめる。いつもの強さは感じられない。

そのことに違和感を抱きながらも、ボクは同じ車両へと乗り込んだ。混んだ車の中、ボクたちだけが取り残されているような気がした。流れる街を眺めて、時間も経たないうちにボクたちの降りる駅へ

と着いた。あつという間に空は低くなつていき、今にも機嫌を損ねそうだった。ボクが別れを口にしようとする、先に彼女が口を開いた。

「あ、あのな、今日は……今日も……ええと」  
胸の高鳴りは、きっと彼女が言いたいことに気付いてしまったからだろう。でも、あえて黙つていた。

「今日は、まだ、一緒にいたいんだ……」

頬を真つ赤にさせてうつむく彼女が愛おしい。意地悪をして、ボクは黙り続ける。ちやんと言つてくれるまで、わからないふりをする。

「だから、私の家に来ないか……？」

首をかしげる彼女。声は震えていて、今にも泣きそうだった。ボクの心臓は、きっと清華さんと同じように、強く、強く、繰り返しボクの心へノックしている。ボクは彼女の手を強く握り返して、笑つた。

「いいですよ、ごちそう期待しますからね」

彼女はあわてたように何回も首肯して、ボクを彼女の家まで案内し始めた。彼女の家は駅にほど近い住宅街にあつた。学校からは遠く、ぎりぎり歩いていけるような距離だ。きつい坂になつてある住宅街の、一番高台のところに彼女の家はある。一戸建ての家は急に変わつた天氣のせいがどこかくすんで見える。彼女が鍵を取り出し、玄関を開ける。清華さんに促されお邪魔するとどこかひんやりとした空氣に包まれた。玄関の照明をつけるとその空氣は氣のせいだということに気が付く。

ボクはダイニングへと通された。三人掛けのソファに座る。適当に観ていいから、と清華さんはテレビを点けた。ボクは何を話しているのかわからぬ一ニュースキャスターのまじめ顔をぼんやり観ながら、きっと昔はこのソファに三人で座つていたんだよな、と考えていた。ボクは彼女をそこまでよく知つていいわけじゃないから、なぜ彼らがばらばらになつてしまつたのか推測することしかできな

い。そんなことをしても意味がないと気付き、詮索する」とをやめた。

彼女は大きなネズミのような絵柄の入ったエプロンをして戻ってきた。

「ネズミ~。」

「むむ、カピバラだ。全国のカピバラファンに謝れ」

謝れと言われても、どう見てもネズミと大差ない気がする。

「あー やー まー れー」

「ごめんなさい……。それでよし、と頷く彼女。何が食べたいか尋ねられて、ボクは逆に何を作ってくれるのか尋ねた。彼女が悩んでしまう前に、冷蔵庫の余り物から作ってくれてかまわないと答え直した。わかつた、と間延びした返事が聞こえてくる。

鼻歌を歌いながら調理にはいる。最近凛々しさよりもわいらしさのほうが目立ってきた。きっとボクといふと気がゆるむのかもしない。リラックスしてもらえるならボクにとつてはそれほど嬉しいことはない。ボクは彼女が調理する様子を見つめていた。その途中、律、と声をかけられる。なに、と返すとじぶらむじぶらに彼女が返事をした。

「その、あんまりこっちを見るな、恥ずかしい」

怒られてしまった。ボクは仕方なくテレビの画面に戻る。ニュースは終わって、ゴールデンタイムの番組に変わっていた。ボクはかあさまに遅くなるとメールを送った。数分後、了承の返事が返ってきた。にしても、『今日は朝帰りかしら、きやつ（ハートマーク）』じゃないですかあさま。そこは止めるべきでしそう親として。

やがてダイニングに炒め物の香ばしい匂いが漂つてくる。もう少しでできるからな、とボクに微笑んだ。何か手伝いをしようかと申し出たが彼女は首を振った。

「今日の律はお客様なんだから、ちゃんとみなさせてくれ」

そう言われると背中がこそばゆい。ボクは再び退屈なテレビへと向き直った。テレビを消して、オーディオをつけてくれと言われた

ので言われたままに操作する。枯れた癖のある男の声はボクもよく聴いたことのあるものだった。今は一日活動を停止しているけど、彼らの音楽はいつまでも愛され続けている。

「私が好きな音楽の種類、覚えてる?」

「テーブルに配膳しながら、彼女が尋ねた。

「ただ古いだけのものとか、ただ新しいだけものにはあまり興味がない……だけ」

「うん。彼らはしつかり流れに乗り新しい音楽を作りながらも、オールドのよさを決して忘れることがない。それってすごいことだとは思わないか?」

ボクは強く頷いた。そういう音楽を作つて、いまだに有名なのは彼らぐらいなものだつたから。

どう考へても、清華さんの料理がまずいわけない。当然のよう屹食はおいしかつた。しつかりとした味付けがされていて、彩りも鮮やかだつた。残り物で間に合わせたとは思えなかつた。もちろん、冷蔵庫の中を確認したわけじゃないから定かなことは言えないんだけど、それを考へる必要もなさそつた。

ボクは彼女の言葉に甘えておかわりまでして、料理を平らげた。食器ぐらいい洗うよと強引に手伝つた。時々肩が当たるのがくすぐつた。洗つてる途中、じつと彼女に見つめられた。指の腹でボクの鼻をなぞる。泡がついていたらしい。ボクらはどちらとどもなく笑つた。なんか今のこの時間が幸せだつた。好きな人と二人で一緒にいれる」と。もつと近づきたかつた。ボクは、彼女の肩を抱いた。

「あの……」

「いいぞ、して」

理性をつなぎ止める。じつは、ボクのアイデンティティは脆いものになる。奪つてしまいたい乱暴な感情と、胸をかき乱すような痛い切ない感情が同時にボクを奪う。女の子でも、こんな気持ちに襲われるのだろうか。

彼女は目を閉じて、静かにボクの唇を待つていた。ボクは顔

を傾け、瞳を閉じた。柔らかく冷たい感触が痺れに感じじる。ゆつくり、繫がりを感じる。唇を離してから、ずいぶん長いキスができるようになつたなと思った。ボクたちの息はひどく荒い。ただ、微笑みは消せない。不意に感情が溢れ出してきて、それを抑えることができなくなつた。なんでそうしたかつたのかはわからない。同情でも、喜びでもない。ボクは彼女の胸に顔を埋めて、ただ泣いた。

「……落ち着いた？」

うん、と返事をして、自分でもわかるぐらに子供っぽい声だつたことに気がついて苦笑した。彼女から離れて、自分の腕で残りの涙を拭つた。ボクはどうして泣いたりしたんだろう、それを彼女にうまく説明できない。別に説明なんかいらない、と清華さんは苦笑いで答えてくれた。

「なんかして遊ぼうか、それとも帰る？」

こんな情けない顔のまま帰るのもどうかと思ったので、もう少しいさせてもらうことにして。今更、帰る理由も見つからなかつた。なぜか親が公認している状態だし。清華さんの「両親にもちゃんと説明できる」と思った。

清華さんはオーディオの電源を消し、ボクを一階へと案内した。  
「……正直に言えば、少し緊張している。

白いつまみを掴んで、ひねる。ポールに旗が引っかかり、かたかたと音がする。その回転はやがて緩やかになり、旗によつて止められる。それが示す数字を見て、ボクは青い車を指でつまみ、駒を進めた。

彼女が押し入れから引っ張り出してきたのはボードゲーム版の人生ゲームだつた。女の子の部屋にしてはシンプルで、無駄な装飾のない部屋。そんな彼女の部屋に遺物とも言えるものが眠つているとは思わなかつた。野球盤もあると言つていたけど……お父さんが買つてきたものを大事に持つていたと聞いて、納得した。きっと、彼女が小さいときに彼と、あるいは家族でよく遊んだんだろう。それに付き合つてあげるのは当然だ。何よりも、彼女の喜ぶ顔が見たくて。

一人で遊ぶ人生ゲームはどこか物足りないものだつたけれど、時間を見埋めるのには充分だつた。マスに書いてある指示に対してもコメントを入れたりして、会話が途切れることがなかつた。遊んでいるうちに、あぐびの数が増え始める。ボクたちはゲームを片付けて、しばらくぼんやりとしていた。

時計の針の音は規則的で、気のせいがだんだん大きくなるような気がした。間が持たなくなつて、ボクは清華さんに話しかけた。

「なんか、することなくなつちゃいましたね」  
「そうだな、と小さく答えが返つてきて、うつむいた。と、突然頭を振つて、シャワーを浴びてくるとボクに告げた。覗くんじやないと釘を差される。そんなことしないよ……ていうか、清華さん、人のこと言えないじゃないですか。

「む、それも、そうだな」

□元だけ笑みを浮かべて、彼女は部屋を出て行つた。詮索するのもよくないな、と思つてボクは律儀に何もせずに待つた。シャワー

という単語を聞くだけでよからぬ想像をしてしまう。自分の家なんだから、お風呂に入るのは当たり前じゃないか。彼女は三十分もしないうちに部屋に戻ってきた。生地の薄いホットパンツにTシャツとこう毎に比べてずいぶんとラフな格好だった。白い足が露出している、でも彼女はそれを気にしていない様子だつた。

彼女の髪からはシャンプーの香りがした。彼女はボクにシャワーを浴びていけばいいと言つた。着替えがないことに気付いた彼女が着替えを貸してくれた。行きかたを教えてもらつて、そのとおりに進む。ボクは引き戸を開けた。

決して広いとは言えないお風呂場にはまだ湯気と彼女の匂いが残つていた。鏡越しに自分の白い肌を見つめる。ボクは結局のところ男なんだ、と思い知る。どんなに肌が白くても、メイクをとつてしまえば浮かぶ本当の顔。童顔なのには変わりないけど、やつぱりごまかせないものは「まかせない」。このボクでも、清華さんはちゃんと好きになつてくれるのだろうか。いや、好きになつてほしい。ボクに新たに芽生え始めた、この自我を摘み取らないでほしい。ボクは心の中で願つた。

夏用の長袖の寝間着に着替えて、ボクは部屋に戻った。清華さんはベッドに腰掛けじつとしていた。声をかけると彼女はあわてるように返事をした。ボクは彼女の隣に落ち着いた。

「やつぱり、男の子なんだな」

素顔を彼女に晒すのは一回目だけ、最初は若干酔つていたらしい。ダメじゃないですか、未成年が飲んじゃ……。じつと見つめられて、ボクは戸惑う。やつぱり、今日は大人しく床で寝よう、と心に決めるとそのことを清華さんに伝えた。

「いや、一緒にいてほしいんだ、わ、私……準備はできているからでも、ボクたちはまだ学生だし、そういうのはまだ早いような気がする。結局、彼女を納得させて、ボクは同じ部屋の床に眠ることにした。

「……律、どうしてもダメか……？」

暗い部屋、甘える声は今にも泣きそうで、ボクはそれを無視することできなかつた。明かりを点け、ボクは横になっている彼女の頭をなでた。

「どうしたんですか？なんか今日の清華さん、甘えんぼうさんですね」

恥ずかしくなつたのか、彼女は毛布で口元を隠した。

「こんな私は、らしくないか？」

いつもの彼女からは想像つかないけど、そのギャップがかわいい。そのことを素直に伝えた。ますます毛布をかぶる彼女。

「かわいいって言うな……でも、なんか、嬉しい」

こんな清華さんをどうにかしてしまつていいのだろうか。葛藤が胸の中、強く渦巻いている。彼女は布団から顔を上げ、うまく眠れないと告げた。唇が細かく震えている。

「私たちはまだ未熟かもしれない。でも、今じゃなきやいやなんだ。好きだから、一緒になりたいといつのは悪いことなのか？私は律と、一緒になりたい」

……ボクは、彼女から毛布を優しくはいだ。彼女は仰向けのまま、何かにこらえるように必死に目をつぶついている。まだ触れてもいいのに。ボクはそんな彼女の顔に近づいて、優しくキスをした。それは、長く、熱いものに変わっていく。ボクは一旦唇を離した。

「ちょっと、一步進んでみますか？」

清華さんは頷きだけを返す。承諾と受け取つて、ボクはもう一度唇を重ねた。唇と唇の間から舌を出してみる。それを彼女へと割り込ませてみた。吐息が漏れる。ボクはかまわずに舌を動かした。なんでこんな乱暴な、それなのに優しく包み込みたい感情が同時に襲つてくるんだろうか。この感情だけは何度味わつても説明できないものだつた。

もう一度唇を離すと、彼女が荒い呼吸をした。ボクも胸を上下させる。

「「めんなさい、苦しかつたですか……？」

彼女は首を振つて、目を細めた。

「いや、大丈夫、だ」

「なるべく優しくしますから」

それは心からの言葉で、それ以上の意味はない言葉だった。それだけだった、はずだった。彼女の表情が変わった。目を見開いて、ボクを押しのける。ボクは尻餅をつき、部屋を出て行く彼女を見送つてしまつた。ワンテンポ遅れて、彼女を追いかける。

キッキンに響くのは水の音で、それに隠れるよじりもう一つの音がした。そこに清華さんはいた。肩で息をしている。胃液の匂いが強く鼻につく。ボクは彼女を樂にさせようと背中をなでる。

「……でくれ

ボクは聞き返す。彼女はボクを払いのけた。その勢いでボクは背中を強く冷蔵庫にぶつけた。

「触らないで、くれ

腕で口元を拭う彼女は誰の目から見ても明らかに怯えていた。全身が、身震いしている。

「君は違うと思ったのに、あの人と同じことを言つんだな」「え……」

「男はみんな、ウソツキだ……あんなの、苦しいに決まってる……怖い……苦い……君は……怖い……」

頭を抱え、一つの言葉を繰り返し始める。怖い怖い怖い怖い……。支離滅裂な状況で、彼女が破綻してしまったようになっていた。

清華さんは虚ろに同じ言葉を繰り返していたかと思つた矢先、突然発狂したかのように叫び出した。ボクはなすすべもなく、彼女が疲れ果ててその場で眠るまで、ただ立ちつくして待ち続けるしかなかつた。ボクはそれでも彼女に手を差し伸べなければいけなかつたんだろうか。答えは出なかつた。

眠つた彼女を抱きかかえて、ベッドへと運んだ。清華さんはじつと汗をかいていて、ボクはそれをタオルで拭つてあげた。ベッドのシーツには彼女が強く掴んでいたんだろう、皺が寄つていた。いつかボクがはがした毛布をかけ直す。眉を寄せた彼女はときおり辛そうな寝言をつぶやいていた。ボクはパジャマを脱いで、着替え直した。置き手紙を書こうかと思つたけど、なにを書けばいいのか

いけないのかわからなくて、結局ペンを置いた。そして、この家を出た。

外では、雨が地面を打ちつけていた。コンクリートに雨音が落ちる音は群れになつてボクの耳と胸を責める。綺麗な旋律に聞こえた小さなこころが懐かしい。暗闇に姿を紛らせた雨粒は、あつという間にボクを濡らす。夢の中のボクと、今のボクがシンクロする。でも……涙は出なかつた。彼女の絶叫を受け止めるだけで、ボクの心は損なわれてしまつたかのように空洞に感じていた。

……胸が痛いのに、その悲しみを表現する手段がない。暗闇がボクを奪う。雨に打たれ、ボクはひざまずいた。ボクは夢の中の自分になりたくなくて、必死にボクを取り戻そうとする。ボクにできることは何なのか、どうしたら彼女を変えることができるのだろうか。ボクは奇跡を信じない。でも、悲劇なんかいらない。すべては、二人を取り戻すために。

そういうふうに考えられてからは、ボクはだいぶ落ち着くことができた。再び立ち上がり、夢の中の自分と決別する。ここでうずくまつていても何も変えられないんだ。変えるためには動かなくてはいけない。悲しみに暮れていいのはヒロインだけだ。ボクは、誓わなければいけない。彼女を覚えるんだ。例えそれがボクの自己満足でエゴだつたとしても、ボクは彼女の笑顔を取り戻さなければいけない。

そのかわり、ボクには目をそらすことができない事実があつた。そこはボクが変わらなければいけないところだ。そりや、彼女の初めてにボクはなりたかった。でも、そうじやないからとしてどうなるつていうんだ。ボクが彼女を好きな気持ちは今もこれからも消えることはない。それによつて辛い思いをしたのなら、ボクが忘れさせてあげたいとまで思つた……ボクは経験ないし、それをうまくできるかどうかなんてわからなかつたけど。

彼女が変わるためには、きっとボク自身が変わらなければいけないんだと思う。ボクが変われば、きっと彼女も変わってくれる。そ

んな簡単に切れる絆だとは思えなかつた。いくつかの日々を越えて、ボクたちはここまできた。ここまでこられたんだ。きっと難しくない。ただ、時間がかかるだけだ。ボクは深く深呼吸した。ボクは変わつていく。

次の日、昼近くに目が覚めた。タイミングよく携帯が鳴り、それは清華さんからのメールだつた。しばらく逢うのはやめよう そんな内容のものだつた。今のうちは仕方ないだろう。彼女だつて、気持ちを整理する時間ぐらいほしいのだと思う。ボクは心穏やかに、承諾の返事をした。彼女がどういうつもりなのかはわからない。けど、二人に時間が必要だつたのはわかつていた。ぱたん、携帯を閉じて、ボクは新しい朝に挨拶をした。

ダイニングに置かれたテーブルには朝食には遅い食事が置かれていた。かあさまが最後の盛りつけを終え、椅子に座つた。ボクも向かい合わせに座る。うまく切り出せるかな、パンをくわえながら考える。食事が終わつてから、ボクは話すこととした。

「かあさま、ボク、決めた」

首をかしげる彼女の顔はとても優しく微笑みを浮かべている。ボクは一呼吸置いて、切り出した。

「やっぱり、ボク、男子として生きるよ」

微笑みを絶やさないかわりに彼女は溜め息を一つ、吐いた。ちょっとの時間があって、頷きを返す。

「理由だけ、訊いてもいいかしら?」

責めるわけではなく、興味というか、ただ知りたい様子だった。それに、ボクが隠し事をしなければいけない要素は何一つとしてない。ボクは正直に話した。ある一人の女の子のこと。彼女を助けるためにはボクが変わらなければいけないこと。そのために、ボクは自分を認めなければいけないこと。身体がこうである以上、ボクは性を『まかすことはできない。それが、この『病気』に対して自分で導き出した答えだつた。

「そつか……ごめんなさいね」

眉尻を下げる彼女はそう返事をした。謝ることなんて一つもないのに。彼女はそれなのにボクの頭をなでてくれる。

「やっぱり、りっちゃんは男の子だったのね。うん、そつか」

彼女のしてくれたことはすべて、ボクのためを思つてのことだった。いつか言つたように、ボクはそのことを否定できないし、否定したくない。このままじゃいられない、そのモラトリアムが予想より早く終わつてしまつただけ。一人、小さな涙がこぼれる。

「かあさま、心配しないで。ボクはボクだから」

「そんなの、わかってるわよう……」

途中で、彼女が悲しくて泣いているわけじゃないんだと気がつく。ボクの決意が嬉しくて泣いているんだ。そのことがわかると余計に涙がこぼれた。悲しいから涙を流すんじゃない。涙だって、喜びを表すことができるんだ。ひとしきり泣いたあと、ボクたちは涙を拭いて食器を片付けた。今日はボクを引っ張り回すつもりらしい。新しいボクになるために。

化粧はしないですむように、女物しかない洋服ダンスの中でもコ

ニセックスなものを選んで着た。ジーンズにボタンシャツ、中に柄物のTシャツ。ちょっと清華さんの趣味っぽくてくすりと笑った。なんか心地がいい。

「今日はせっかくのオフですもの、りつちゃんをかわいい男の子に変身させてあげる」

「ん？ 余計な形容詞がついていたような気がしたけど。

「かわいい、ですか」

「ん。かわいい」

「妥協する気は」

全くありませんと気持ちのいいぐらいはっきりとした返事が返ってきた。とりあえず髪を切りたかった。自慢の長い髪を切つてしまふのはもったいない気もしたけれど、それじゃあまり変わらないし、ハードロックのメンバーよろしくなるのもなんか違うと思ったので切ることにしたのだ。

「ああ、それだつたらいい美容室があるからそこへ行きましょう。心配しないで、今は男の人も美容室へ行くことが多いんだから」

それと、下着も男性用にしなきゃいけないし、洋服だつてそうだ。いきなりかあさまの出費がかさんでしまうのは困りものだったが、彼女にとつては些末な問題らしい。

「大丈夫大丈夫、いざとなつたらりつちゃんの今まで着てた服売るから」

容赦ないですかあさま。ボクはもちろん、外見が変わったところで清華さんに拒否されることはわかつていて。これは下準備。本当の辛さに耐えるための、前段階。強く生きるための、誓いのようなものだった。

買い物から帰つてくるともう夕暮れで、かあさまはすぐに夕食の準備を始めた。ボクも手伝いをする。基本的なことは変わらない。

ジャガイモの皮をむきながらボクはパパのことを尋ねた。

「パパ、いつごろ帰つてくるのかなあ？」

かあさまはにんじんを切りながら答えた。

「今月の終わりぐらいって言つてたと思つわよ」

こんなボクを見てパパはどう思つだろ。残念がるだろ。きっと最初はそうかもしれない。でもちゃんと見てくれると思つ。だってボクはボクなんだから。カレーの下準備をしながら、ボクはそ  
う納得した。

夕食のあと、ボクは早めのお風呂に入つた。首元を触つて、改めて髪を切つたことに気付く。ずいぶん身体が軽くなつた感じだ。鏡の前でボクはどうしてもにやけてしまつた。ちょっと浮かれすぎている。湯船につかつて、考えることは清华さんのことだつた。明日はちゃんと学校にきてくれるのだろうか、心配だつた。きたとして、ちゃんとボクを見てくれるかどうか、本当のところは確信がなかつた。怒り出すかもしれないときも思つた。なんとも言えなくて、明日の流れに身をまかせるしかなさそつた。きてくれなかつたら、どうしよう。ボクをもう一度迎え入れてくれるだろ。そこまでの確信はなかつた。

今日は何にも力が入らなくて、すぐに眠つてしまつた。長く睡眠をとるのは久しぶりのことだった。

……目覚ましは無情にもボクに朝を運んでくる。ボクは仕方なく時計のアラームを止め、一階へと下りていった。いつものようにかあさまが朝ご飯を作つてくれている。ボクは眠たい目をこすりながらご飯を口に入れる。相変わらず内容の伝わつてこないニュースをぼんやりと見つめながらご飯を平らげた。

自分の部屋に戻り、洋服、ダンスを開けた。そこにはブレザーとズボンがハンガーに掛けられていた。昨日の朝急いでクリーニングに出したおかげでカビ臭くなつてはいなかつた。初めて着る男子の制服。こんなときのために買つておいてよかつた、とかあさまは言つていた。制服なんて、安くない買い物なのに……自分を、少し恥じた。

女子用の制服より生地がしつかりしているんだなと着てみて思う。下半身もズボンだから暑いかもしない。鏡の前でくるくると自分を見回す癖が取れなくて、一人苦笑した。ふと時計を見て、焦る。笑つている場合じやなかつた。ボクは自分の部屋をあわてて飛び出した。

家を出る間際、かあさまが言つた。

「がんばつてね」

ボクは頷く。きつとかあさまは何でもお見通しなんだ。わからないうことなんて何もないような気がする。もう状況に甘えることはできない。ボクはこれから変わつていくことを願つたのだから。ボクは玄関を飛び出していくた。

商店街まできてボクは走る速度を緩めた。目の前に美緒先輩が見えればまず遅刻の心配はない。ボクは彼女の肩をたたいた。

「にやつ、びつくりしたですよりつちゃんくん……？」

まあ当然といえば当然の反応ですよね。改めて挨拶をすると彼女

は律儀に腰を折つた。

「もしかしてりつちゃんくんの弟さんですか？」

まさか。ボクは一人っ子だし、ましてやボクはボク以外の何者でもない。ボクは首を振り、生徒手帳を見せた。

「えーっ、どういうことですかりつちゃんくん！まさか今流行りの『いめちえん』ってやつですか？」

別にイメチェンは流行つてないと思いますよ？といつても、それに近いものがあつたので曖昧に頷いておいた。立ち止まつた彼女を促した。清華さんの話をすることは避けて、ボク自身が変わりたかつたと説明した。答えの一つには違いない。

「そうですか。でもこう考えれば解決です」

彼女はボクの鼻筋に人差し指を当てた。

「りつちゃんくんは男装しているだけなのだ、と」

だからですね美緒先輩？そういう問題じゃないです、いや、なに攻めが清華さんとかボクが受けとかていうか男でもボクが受けなんだってなんか論点がずれてる！何をボクたちで妄想しているんですか！

「ふふ……ふふふ……」

やばい、戻つてきて……！そつこうしているうちに坂の前にきた。いつもならここで清華さんと一緒になる場所だ。周りを見回す、同じ色の制服の中に、見落とすはずのない、知つた顔があつた。

清華さんは学校にはきてくれた。そのことに少し、安堵する。

けれど、声をかけるかは躊躇した。うまく声をかけられるか自信がなくて。そんなボクの気持ちを知つてか知らずか（多分知らない）、美緒先輩は一目散に清華さんのところへ駆けだしていった。ボクは一人と距離を置こうとする。結局美緒先輩がボクを指さして、清華さんと目が合うことになった。

彼女はボクを見たきり、うつむいた。口元が動いたけど、何を言つているのかは聞き取れなかつた。美緒先輩が戻つてきた。

「用事があるから、先に行くだそうです。……もしかして、清華さ

んと何があつたですか

ボクは口じりもつてしまつ。沈黙はどんな言葉よりも雄弁だった。

先輩は珍しく難しそうな顔をして言った。

「一人のことにはもう口出しはしないです。でも、もし清華さんを絶望させるようなことがあつたら美緒、許さないんですからね」

思いのほか真剣な口調で……考えれば当たり前か……彼女はボクに伝える。ボクはその言葉を噛みしめて、一人で坂を上つていった。

朝の挨拶をしながら教室に入つていいく。返事の途中で教室がざわついた。あの純平ですら、目を白黒とさせていた。転校生? それにナチュラルな入り方だつたぞ、それにしてもベビーフェイスだな、俺、こいつにだつたら惚れてもいい、馬鹿、無茶しやがつて……。ひそひそ話しているつもりみたいですが丸聞こえですからね。というかお前ら妄想に対して自制心はないのか。

「お前、なんかあつたのか?」

勘ぐられても困るので身の上だけ話すこととした。一通り話したあと、彼はこう切り出してきた。

「で、男装といふことでいいんだよな俺の希望的には」

誰が純平の希望通りにしますか! ボクは彼のこめかみを容赦なくげんこつでぐりぐりとしてやつた。純平のうめき声つて初めて聞いた。さすがに数秒でやめてあげる。

「男装違いますからね? 男としてこの格好をしてるんだからね?」

おい、もうパンチラ拌めねえのかよとか言つたやつ表出る。ついうかナーニのついてるやつのパンチラ拌んで喜ぶつてどんだけ変態なんですか。こつちはどん引きですよ。おかしなクラスメイトのおかげで口調までもが歪みそうになつた。

そうして朝のホールルーム、担任によつてまた一騒動が引き起こされるのであつた。しつかりしてくださいよ、まつたく……。

ボクのいわば『変身』は学校中でちょっとした話題になつていた。女装していたときに一度名を知られたけど、一年以上経つてだいぶ

落ち着いてきたので、自分が有名人だという自覚が薄れていた。こんなことで有名になつても全く名譽じゃないんだけどね。

「そこそ陰で言われるのは好きじゃないからいちいち首をツッコんでははつきり言つようにお願いしたんだけどこれじゃあきりがない。途中で投げて純平と美緒先輩にもそれとなく言つてもらつようにならんだ。味方がいるつていいことだな、とぼんやり思った。

それとは別に、理由がよくわからないのだけど、いつも以上に女子から話しかけられることが多くなつた。クラスメイトから初めて名前を聞く先輩や後輩、授業を受けもらつていない女教師までもが色々と素性を聞いてきた。なんで女装をやめたかというよりはやら外見をほめ殺された感じだ。なんで女装をやめたかといふやたら外見をほめ殺された感じだ。うーん、性格は変わってないし、ボクはボクなわけだけど、大きな変化に戸惑いを隠せないというか、やたら彼女たちの視線が熱っぽいというか、ボクのことを知つてどうする気なんだろうか。とりあえずボードゲーム部に部員が入りそうなので部長（そういうえば、名前が思い出せない）にでも報告しておこう。

そのことよりも、ボクは一つのことだけが気がかりだつた。それなりに授業をこなして昼休み、ボクはチャイムが鳴つたと同時に純平に断りも入れず教室を飛び出した。別に学食戦争へ飛び込んでいつたわけじゃない。清華さんの教室へと一目散に向かつていく。途中で教師に見つかつて速度を緩める。でも姿が消えたのを確認してまたスピードを上げた。

扉の前で呼吸を整え、引き戸を開けた。

……教室を見回したけど、彼女の姿はもうそこにはなかつた。ボクは先輩をつかまえて彼女がどこに行つたのか尋ねた。よくはわからぬけど、と返事の歯切れは悪かつたけど、いつもの場所にいると思う、と返事が返つてきた。小さく礼をして教室を出る。廊下の窓から下を見る。彼女の姿は確認できなかつたけど、彼女に追いつこうとまた廊下の床を蹴つた。

転げそうになりながら一階まで降り、中庭に続く扉を開ける。緑の匂いが鼻をくすぐる。湿っぽい風。ボクは肩で息をしながら彼女の姿を探した。いつかのことを思い出す。あのときは彼女が何年生で、昼間どこにいるのか、ましてやボクと同じ学校の生徒だなんて思いもしなかった。だから学校中を走り回つて、結局彼女に先に見つけられたのだった。ボクのことを子猫だなんて呼んで、胸パッドをもみしだいて……あのときの笑みが、今は涙に変わる。ボクのやつていることは間違いなのだろうか。でも、ボクが変わつて、このボクを彼女が受け入れてくれたら。きっと、そこが本当のボクたちのスタートラインなのだろう。まだボクたちはそこにすら立てない。

ボクは無人のベンチに腰掛けた。今までは隣に清華さんがいてくれた。ボクはこれからその幸せを取り戻さなければいけない。少しの時間だけそこで過ごして、立ち上がった。ここで待つっていても、きっと何も変わらない。ここにいるだけでは何も手にすることはできない。ボクはこない彼女の姿を探しに再び足を進めるにした。廊下に戻り、扉を閉める。振り返ると、そこに清華さんがいた。思わず、互いに息を飲む。そしてすぐ、彼女はボクに背を向けて逃げるように行こうとする。ボクは彼女を呼びようと声をかけた。けれど、彼女は訊く耳を持つてくれなかつた。話を聞いてほしいから、ボクは彼女に呼びかけながら彼女についていった。

「……ついてくるな

「いやです、話を聞いてください」

誰をも遠ざけそうな冷たい口調に胸が軋む。ボクも憲りずに言葉を返す。それは胸の痛みを隠すため、それとたとえ今は嫌われても、きっと取り戻してみせる確信があつたからだつた……根拠はないけれど。

彼女についていくと、屋上まできた。基本的に立ち入り禁止で、人気もなかつた。ここまで来て、彼女はやつとボクに振り向いてくれた。

そして、ボクの頬に痛みが走つた。 清華さんは、ボクに平手打ちをした。瞳は涙で潤んでいて、ボクはそれが怒りなのか、悲しみなのか、そのどちらともなのか判断がつかなかつた。歪んだ口元が、皮肉を口にする。

「君は、私を馬鹿にしてるのか？ もういい、はつきり言うよ、私はね、『女の子としての逢坂律』が好きだつたんだよ。私をただ優しく包んでくれるだけでよかつた、ただ君は笑つてはいるだけでよかつたんだよ……。それなのに、なんなんだ、それで私が変わるとでも思ったのか？ 外見でしか判断できない私を、本気で好きにさせようとしたのか？ 君に抱かれかけてよくわかつたよ、男なんて、結局女に傷をつけるだけつけて自分はいい思いしようつていうことがね、もつと早く気付いていれば、繰り返さずにすんだのに……」

まるで支離滅裂だよ、清華さん。論点はすり替わつてはいる上に、ただわがままと文句を並べてはいるだけだ。彼女に何があつたかはまだわからない。薄々感づいてはいるけど。でも、その言い分はまるで間違つてはいる。それだけはよくわかる。やつぱり、苦労するのはこれからだ。それに、ボクだつて思う。そんなことを言われたところで、ボクの気持ちに変わりはない。だから、それを見越した上で、言つてやる。ボクは内心を悟られないように目線を彼女から少しずらした。

「じゃあ、別れましょ。今度は素敵な女性を捜してくださいよ」  
息を飲む彼女。それをすぐ隠し、清華さんは溜め息混じりに言つた。

「そうだな……こんな関係、うまくいくわけがなかつたんだ」

沈黙はすぐ、予鈴でかき消される。ボクは先に屋上を去つた。外は雨の匂い……ボクの一一番嫌いな匂いだつた。

教室に戻ると、純平が珍しく困ったように眉尻を下げていた（そして、それは彼にとても似合つていなかつた）。ボクが首をかしげると神妙そうに言葉をボクにかけた。

「律、なんかあつたのか……涙でぐしゃぐしゃになつてるぞ」

ボクはあわててブレザーの袖口で指摘されたものを強引に拭う。「また誰かに文句つけられたのか？ 誰だ、また俺が懲らしめてやるぞ」

違うよ、違う。あのころのようないい弱さ、もう今のボクはないんだ。だから、純平が怒る必要はないんだよ……彼の優しさと強さに礼を言いながら、彼をなだめる。純平は納得がいかない表情ながらもボクの言つことを聞いてくれた。でも、けして何があつたかは言わなかつた。彼は、そのことを最も話してはいけない人だから、地雷を踏むわけにはいかない。

教師が何か説明している。ボクはぼんやりとしか聞いていなくて、何を言つているのかはわからなかつた。彼が黒板に何か記号やら表やらを書き記している。何を示しているのか頭に入らないまま、黒板の内容をノートに書き写していた。そして授業が進んでいく。

ボクは一つのことだけ考えていた。どうやつたら彼女は彼女自身の傷と向き合つことができるのか、ボクがどうやれば彼女にそういうふうにさせることができるのだろうか。ボクは彼女に何を示すべきなのか。誠実でいること、と言葉にすることは簡単だけど、その誠実さをどうやって示すのかそれだけを必死に考えていた。

何も考えたくなくて、ボクは理科室で一人になろうと思った。どうせ今日も人がいらないんだ。いつものように鍵を取りに行くと教師になぜかさつさとやれと怒られた。腑に落ちないまま理科室に向かう。ボクはそこに着いてやつと肝心なことに気付いた。そこは女生徒だらけでえらいことになつてた。ボクの姿を見つけて群がつくる。正直逃げたかったです。ええと、部長つてどこの誰だったつけるな……？

昼休み、中庭で一人食事をとる女生徒に声をかけた。

「隣、空いてますか？」

彼女はボクを一瞥すると溜め息混じりに食事に戻った。

「……勝手にしろ」

ボクはベンチに腰掛けると、戦利品であるカツサンドを口にした。雨は午前中には上がりついて、ベンチも乾いていたようだ。第一そうじゃなかつたら女子はここに座らないと思う。ボクは清華さんに適当にな話を振る。当然答えなんか返つてこない。それでよかつた。今はゆつくり、関係を構築し直していくほかない。今までの関係は壊れてしまったのだから、新しく作るのが今のところ近道だと思った。

最初なんか相手にされないどころか逃げられてしまった。ただ、この場所が気に入っているのだろう、ボクがここを覗くとだいたい彼女がいた。お互いい学習しないもの同士だな、と心中で苦笑した。いちいち逃げ回るのが面倒になつたんだら、そのうちベンチを離れることはなくなつた。

この日もボクは彼女と食事だけをとつて、席を立つた。明日もきっと、ここに来るだろう。明日は話を切り出してみよう。いいかげん話題もなくなつたし。……結構案配は適当だつた。そんなに悲観的な状況ではないことは確かだつたから。これからボクは彼女のことを聞かなければいけない。それを知つて、ボクが耐えられるかどうかだ。つけなければいけないじめはいくらでもあるんだ。

そして、次の日、ボクはタイミングを見定めて、話を切り出した。

「真枝純平と清華さんの間に、何があつたんですか」

いつかは訊いてくることを、彼女だつてわかつてたはずだ。ボクだつていつまでも、何もわからずじまいにしたくはないのだ。彼女

の横顔は、彼女と知り合ってから一番悲しそうな顔をしていた。遠くを見つめる瞳が、焦点を結ばない。唇を軽く噛むのは言いづらいというより言葉を選んでいるときの癖だった。ボクは彼女の返事を待つ。断られてもかまわない。時間はまだある。ただ、一步を踏み出さなければいけないだけだ。

「話せば、長くなるんだ……放課後、屋上にきてくれないか」

ボクの覚悟はとっくのとうに決まっていた。彼らにどんな関係があろうと、そのすべてを受け入れる。その意志に、搖らぎなんてものはない。ボクは有意義だけど退屈な授業を受けながら放課後までをなんとかやり過ごした。

屋上までの階段は自分の教室からはすぐのはずなのに、いやに遠く感じられた。緊張からくる胸の高鳴りは押さえようがなかつた。なんてことはないんだ、と自分に言い聞かせて階段を進んでいく。扉を開け、彼女の姿を探す。梅雨の中休みに入つたようで、空は綺麗な茜色をたたえていた。その日が逆光になる位置に彼女はいた。フェンスにもたれかかって、缶コーヒーを飲んでいる。ボクは彼女に声をかけ、彼女の元まで歩いた。

「私は、元々こんな冷たい性格じゃなかつたんだよ」

彼女は、昔話をそう切り出した。

「昔の私は男口調で、ぶっきらぼうなやつじゃなかつた。どちらかといふと女っぽくて、誰かに守られてないと安心できないやつだつた。自分主体で動くこともない、まあ、地味な女という感じだつたんだ。高校一年生になつて、君たちが入つてきた。そのときは君のことは知らなかつたし、真枝君のことも知らなかつた。しばらくすると一年生が委員会なり部活動なりを始めるだろう?私は整備委員会に入つていたんだが、そこで初めて真枝君、彼と会つたんだ。仕事が彼とダブルることがなぜが多くて、よく一緒に作業していくうちに色々と世間話するようになつていつた。結構体格もよかつたし、何かと頼りになるところがあつてな、親密になるのにあまり時間はかからなかつた。私も彼に對して浮ついてしまつた部分があつたんだろう、だから気を許した。告白は彼からだつた。私は断る理由もなかつたし、何より好きだつたから付き合つことにした。彼はとにかく頼りになつて、私の指針になる人だつた。彼に心を預けたと、彼はその心の広さで受け止めてくれた。私はとても心地がよかつたんだ。……でも、それはただの夢だつた。付き合いが深くなつて、何度かデートを重ねて、私は彼に身体を許した。お互いにこちのない恋だつたが、そこまでは問題もなく進んでいつた。そこから歯車の調子がおかしくなつて、私は気付かなかつたんだ。彼の態度が徐々に怪しいものになつていつた。素つ氣ない態度を取るようになつて、私は最初浮氣をしていてるんじやないかと疑つた。でも、それはなかつた。だけど、彼の態度はどんどん悪い方向に進んでいた。そのうち、彼は私に暴力を振るうようになつた。いきなり、理由もなくたたく。しかも、人目につかないところを狙つて肌が晒されるところはけして狙わなかつた。彼ね、急に煙草を吸うようになつてね、その火を腕に押し当ててきたりした。今はだいぶごまかせていくけど、へこんじやつたのはどんなことをしても隠し

きれない。だから君を試着室に連れて行つたのは間違いだつた。あのとき、傷のことを一瞬忘れていたんだ。隠さなければいけなかつたのに。……いざれは晒そうと思つてたけど。首を絞めるのがとてもうまいんだよ、どこでそんなの覚えてきたのつてぐらう。なんでこんな話、笑いながら、泣きながら語つてゐんだろうね。でも彼のやり方だと跡に残らないんだよ、ちゃんと封じる場所がわかつてゐるんだろうね。そんなことをしといて、そのあとで彼ははつとなつた顔で、ぼろぼろに涙を流しながら謝り続けるんだよ。俺を許してくれつて、すがりついてくるんだよ。私も馬鹿で、そんな彼を嫌いになれなかつた。頭おかしいだろ、私を失神させようとする男を好きになままでいるんだよ。私は彼と離れることなんて考えもしなかつた。だつて、暴力を振るうのは時々で、それ以外ではとても優しく力強い人だつたからな。きっと、私は彼に依存してしまつていたんだ。依存じやない、寄生に近いものがあつたと思う。もつとも、そんな関係がいつまでも続くわけがなかつた。私はついに病院送りされてしまつた。彼が謹慎していた時期があつただろう？あれは喫煙が見つかつたわけじやなく　彼は学校では決して吸わなかつたから　私に暴力を振るつたことが原因だつた。私が辛いから、大事にはしてほしくないと頭を下げる、事件に発展することはなかつた。けれど、そこで一人は終わつてしまつた。私は空っぽになつてしまつた。彼を失つたからだとがじやなくて、単純に私には何もなくなつてしまつた。家では腫れ物当然に扱われた。意外に家族つて冷たいものなんだよ、私を汚れたもの　実際汚れてしまつたわけだけど　クズ当然に扱うようになつた。なんでだろうね、痛い思いをしたのは私なのにな。文句言われたりはしない。ただ人としてみてくれないだけ。食事も餌も変わらない。ただ何かを与えてられて、私はそれを享受するだけ。そんな暮らし、逃げたくなるでしょ？結局親戚の家に一時的に預けられることになつた。ちょうど叔父さんが武道家でね、色々武術から精神の鍛錬から色々教わつた。空っぽなら、違うもので満たさなくてはいけない。枯れたままでいるのは

よくないって叔父さんから教わった。厳しい人だつたけど、決して暴力や暴言に訴えようとしたくなかった。性格が変わった私を見てやつと両親は私と向き合つてくれるようになった。ただ、男としての優しさ あの肌の感触とか、安っぽい言葉 には拒絶反応を起こすようになった。学校でふと優しくしてもらつただけで、私はトイレに駆け込んで吐いた。君は外見上女性だし、思考も女性寄りだつたから平気だつた。再会してからの真枝君は気を遣つてぶつきらぼうに接してくれたし……勘違いしないでくれ、今はもうあんな思いはごめんだ。昔の自分とは違うんだから。でも、君が男として肌に触れてから息苦しくなつて、ついに耐えられなくなつた。発狂するしかなかつた。拒絶するしかなかつた。もう、私はダメなんだ。君が男として優しく接してくる度、私はトイレに行つて食べたばかりのものを吐き出す。本当は「こんなこと言いたくはなかつた。だつて本当はまだ……。でも、身体がこいつの反応を示す以上、君は私にとって足かせにしかならないんだ。君は私のために鬼になれるか？鬼になつて、それでも私を愛せるのか？……君がどうするかはまかせる、けど忘れないで。君が優しく接する度、私は吐き続けなきやいけないんだつてことを」

眩暈をこらえる。怒りと後悔が静かにボクを襲う。ボクはそれをこらえて、言葉を返した。

「いつまでも、そやつていくつもなんですか？清華さんは辛い辛いと言つて逃げているだけだ。それじゃ、いけないんですよ」「じゃあどうしろっていうんだ！　このまま私はお前の見えないとこで吐き続けなければいけないのか？」

彼女はボクを睨み付けて、慟哭する。そうじゃない、そうじゃないよ清華さん。ボクがその苦しみから解放してあげるつて言つてるんだ。

「ボクは絶対にあなたを傷付けないし、他の人だつてあなたに危害を加えることはないんです」

「ふざけるな、誰がそんな理由もない詭弁を信じるか？」

「……純平にはボクから話をつけます。もし清華さんを傷付けるような人がいてもボクが守りますから」

子供のように頭を振り始める清華さん。嘘だ、とだだつ子のように言葉を繰り返す、泣きじやくりながら。

「口だけならいくらでも言える」

「そうですね、だからボク自身で証明してみせます」

ボクは彼女に即答してみせた。ボクの中に、迷いなんてものは存在しない。清華さんは百面相のように表情を変えていく。自嘲じみた微笑みで、口元を歪ませた。

「だったらやつてみる」

そうですね、と言いながらボクは彼女に右手を差し出した。ボクは、その手で彼女の涙を拭いた。ボクの一撃一動に彼女は身体を震わせ、足は静かに後ずさりする。それでも、慎重に彼女に近づき、静かに彼女の涙を拭つてやつた。ボクは泣きそうだった。でも、ここで泣いてはいけない。辛いのはボクじゃない。優しさを信じられ

なくなつた彼女なんだ。

はたして、彼女は怯えこそは示したものの、それ以上の拒絶を見せることはなかつた。我慢しているのかもしれない。でも、そうだとしてもそう考えてくれただけで大きな変化だと思う。

「吐きそ�ですか」

「……そこまでじや、ない」

人にとつて、一番の恐怖は『わからないこと』だ。想像の悪魔は、時に現実のそれよりも凶暴な振る舞いをする。予想は実際をはるかに超えて恐怖するものの心を蝕む。だつたら、その恐怖はまやかしなのだと、直接示してやればいい。そのやり方は色々あるだろう。でも、少なくとも言葉だけでは足りない。態度だけでも伝わらない。清華さんはボクを知つてゐる。女装していたつてやめたつて、その態度は変わらないことを教えてあげればいい。そこから徐々に、心を広げてあげればいいんだ。

「ボクは、ボクです。清華さんと出会つてから、今日の今まで、ずっと清華さんが好きなままで。たくさんあなたを知つて、なおあなたをもつと知りたくて仕方ないんです。辛かつたらボクに伝えてください。全部受け止めてあげます。そしてそれは恐怖じゃないんだ、ちゃんと理由があるんだよ、と教えてあげます。ボクは、あなた 菜月清華さん を、愛しています」

雨が、降り出した。今日は晴れだと言つていたのに。暖かい雨の匂いが、鼻につく。それでも、ボクたちは濡れ続けた。雨に涙を紛らすことはできなかつた。涙は出なかつた。清華さんはどうすればいい、と大声を上げて泣きはらした。

……風邪をひくと思って、ボクは彼女の手を取つてお台場まで戻ることにした。小さく震える手は雨に冷たく、濡れていた。彼女を壊してしまわないようになるべく優しい力で掴み、導いた。雨をよけられる場所に来た二人は腰を落ち着けた。壁に背中を預け、力を抜いた。なんで、こんなときでもボクの心は穏やかなんだろう。ボクの心は実は知らないうちに麻痺していたんじやなかろうか。力の

ない笑みが浮かんでくる。ボクは思い出したように彼女の手を離した。

「今のボクを、ちゃんと見てください。清華さんの気持ちがまだ変わらないのなら」「ううん

ボクが彼女に視線を向けると、彼女はボクに視線を合わせようとしました。何度か試みたのち、彼女は諦めてうなだれた。ボクは気にせず、また前を向いた。

「……ろくに視線も合わせられない。気持ちは変わらないのに。ちゃんと君……り、律を、みたいのに」

泣き叫ぶ声が階段を反響する。誰か来るかと心配はしなかった。ボクは黙つて彼女が泣きやむまで待ち続けた。帰ろう、と清華さんを促すと彼女は頷いて、ボクの後ろを付いてきた。きっと直視しながらすむと思つたんだろう。ちゃんと見てほしいって、そういうことじやないんだけどな、と苦笑をしながら、ボクは階段を下りていった。

彼女は一旦自分の教室へ戻つた。ジャージに着替えてくると言われ、制服がびしょ濡れだったことを思い出した。のくも彼女にならつて着替えることにした。口約束もしなかつたけど、清華さんは玄関で待つてくれていた。

「か、勘違いするな。ちゃんと律が来てくれるか心配で仕方なかつただけだ」

ボクは頷きだけを返して下駄箱へと向かつた。彼女も納得いかない顔ながらも靴を履き替えに行つた。玄関を出て、ボクは傘を持つてきていなきことを後悔した。清華さんが大きめで黒い傘をさす。

「入つても、いいですか？」

「……勝手にしろ」

彼女はいつかの、けれど投げやりではない言葉をボクにくれた。もちろん、辛いようだつたら離れるつもりだった。彼女はそっぽを向いていたけど、拒絶することはなかつた。言葉もなく、一人は歩いた。清華さんが途中で店に寄るというので、そこまでついていき、

そこで傘を買うことになった。安いビニール傘を買って、ボクたちは店で別れることにした。別れ際、彼女が言つた。

「わ、私も、律が好きなんだ、今は何もかもが怖くて、本当はずべてから逃げ出したいんだ、でも律がいるなら……」

そこで言葉を切つて、彼女は首を振つた。

「また、明日」

ビニール傘が透過して低い空を見せている。ボクは彼女が去つてからそれをぼんやりと眺めていた。

家に帰ると、ボクを一目見たかあさまがボクをいきなり抱きしめてきた。今までしてくれた抱擁の中で一番強かつた。ボクはそれに身をまかせる。自然と、涙がこぼれて止まらなくなつた。どうしてなのか、あやふやで説明がつかない。泣いている理由はなんとなくわかる。でも、本当は、ボクに泣いていい資格なんてないはずなんだ。

「つっちゃんはすいよ、すいべがんばつた顔してる。だから、辛いことがあったなら私にちゃんと言つてね。私は全部受け止めてあげるんだから」

かあさまは、ボクと同じことを言つ。やつぱりボクと清華さんは似たもの同士なのかな？ だから惹かれあつた部分もあるかもしれないな。じついうとき、ボクはどうすればいいんだろう。うまくできるかわからなかつたけど、彼女に身を委ねることにした。ほら、味方がいるってことはとても素敵なことなんだよ。だから、ゆつくりでいいから、いつか、ボクの隣をまた歩いてくれますように。

かあさまが新しい洋服を買つてくる度、ボクはそれを着るのが楽しみで仕方なかつた。フリルのついたワンピース、細身のジーンズ、七分丈のロングシャツ。それらに袖を通すことを考えただけで胸がわくわくして、またそれらを着たときの喜びは両親に愛されることの次に嬉しいことだつた。コーディネートはもちろんかあさま。鏡の前でかわいらしくなつていくお姫様。まだ幼かつたボクは自分が女の子であることを疑わなかつたし、それを望んだ。かあさまは満足したように鏡越しに微笑んだ。パパにこの姿を見せる。パパはどこから取り出したのかカメラを用意してボクにポーズをするように言った。フラッシュに目をつむつてしまつて、もう一回。今度はちゃんと撮れたみたいだ。かわいい、と呼ばれることが何より嬉しかつた。愛されていると知ることができたから。認められることが、ボクの世界の土台だつたから。

幼稚園のころのアルバムを眺める。そのころから女物の服を着ていた。ボクは最初からそのつもりで生きてきた。幸い、そのころはまだそれを咎める人もいなかつた。

ボクは汚れてもいいような服に着替えさせてもらつて、外へ遊びに出かけた。公園に行くと友達が待つていた。今日は何の遊びをするか相談して、じゃんけんをする。女の子の友達が多くて、男の子とも遊ぶようになつたのは小学校に入学してからだつた。今日はかくれんぼ。ボクはじゃんけんに勝つた。一目散に駆けだして、鬼に見つからないような場所を探す。いつ見つかってしまうかはらはらするのと同時に、このまま見つかならなつたらどうしようか不安になつたりもした。結局、最初のほうに見破られてしまうんだけど、それでなぜか安心できた。昔から心配性だつたのかもしれない。見つかつた瞬間困り顔をしながらも、心中では胸を撫で下ろしてい

た。

服を汚して家に戻る。服を脱いで、今日着飾った服を着直した。

手洗いうがいはしたの、とかあさまに言われてもちろんといわんばかりに頷いた。頭をくしゃ、となでる彼女の手は冷たくて心地よかつた。そんな満たされたをしてボクは育つていった。

やがて小学校に上がり、見知らぬ顔が増えていった。低学年のころというのはあんまり男女の意識がない。男の子も女の子も混じって同じ遊びをした。その中で知り合ったのが真枝純平だつた。クラスのガキ大将で、みんなをまとめることはうまかつたけど、同時に先生を困らせる厄介者でもあつた。けど、その背中はボクから見てみればとてもかっこよくて憧れだつた。彼のようになにごとも物怖じせずに立ち向かつていければいいのにと思つた。

そんな彼と知り合つようになつたきっかけは、実は覚えていない。何かきっかけがあつたのかもしれないし、自然にお互い仲良くなつたのかもしれない。そこはあんまり思い出せず、また気にする必要もボクはないと思っている。

ボクは彼の背中についていくよになつていた。彼は邪魔だとも、いていいとも言わなかつた。そのかわり、この町のいろんなことを教えてくれた。ボクは記憶にこの街を刻んでいく。視野が広くなつてよかつたし、それと同時にこの街が不意に見せる様々な景色を見ることができてボクは幸せだつた。

学年が上がつていくにつれて、自分は何者なんだろうという思いが膨らんでいった。女の子と男の子の身体の違を特別授業で教わつたのがきっかけだつた。ボクの身体は、男の子のそれだつた。体育も男女別になつて、自分は男子に振り分けられた。納得がいかなかつた。ボクは体力もなかつたし、何より女の子だと疑わなかつたからだ。でもこの感情をどう伝えればいいのかわからなかつた。だから黙つて先生の言つことを聞いていた。けど、そのうちに違和感はどんどん膨らんでいく。ボクはそれを抱え込んだまま学年を上がつていった。

ボクの味方がどんどん減つていくような気がした。そのかわりボ

クのことをおかしい、という人たちが増えていった。その言葉はボクの気持ちを代弁するものではなかつた。むしろボクを排除しようとする意思だつた。ひそひそ話だつた言葉が、徐々にボクへと向かれていく。ボクはその言葉に耐えられるほどの心の強さは持つていなかつた。

それでも、ボクは女の子として生きようとした。両親に悲しい顔をしてほしくなかつた。ボクがこの格好をすることをやめたい、といつたらきっと、その理由を知ろうとする。そのことを話したらどうなるだろう。きっと今以上にひどいことになるんじゃないだろうか。そう思うとそれがすごく怖くて、どちらにも縋ることができなかつた。ボクは大事な親友のことも忘れて、やがて図書館や保健室にこもるようになつていた。

特に誰もいない授業中の図書館はお気に入りの場所だった。図書の人気が黙つて解放してくれた。柔らかな笑顔の似合つ初老の女性で、彼女と話すことも多かつた。彼女は決してボクがこういうことをしている理由を訊いたりしなかつた。だからなお、安心してそこにいることができた。

本はよき友達となつてくれた。ボクにたくさんのこと教えてくれた。同学年の人たちが知らないことに対しても雄弁でわかりやすく語つてくれた。かつ勝手に結末をしゃべることもなく寡黙でいてくれる。インクの匂い、本棚の木の匂い。それに優しく包み込まれるとき、ボクはとても幸せだつた。

授業についていけなくなることはなかつた。教師はプリントを渡してくれて、それに追いついていれば特に何も言わなかつた。気付けばボクは特別クラスに編入されていて、どこにいてもいいようになつていた。……どうでもよかつたのかもしれない。そのままのクラスについて、問題が大きくなるよりはマジだと思ったのかもしれない。今思えば、腐つている体勢だつたけど、今更もう、笑い話にしかならない。

ボクは学校が始まるまで適当に（例えば、まだ寂れていなかつた商店街とかで）時間を作つて、本鈴が鳴つたのを見計らつて学校へ入つていつた。少なくともこれで生徒と鉢合わせることはない。放課後、夕暮れが終わりそうになつたら保健室のベッドから起き上がつた。保健室の先生としゃべることはなかつたけど、どちらかといふと否定的な態度を取つていたみたいだつた。ただ、ボクはもといたクラスより高い点数をとつていたから教師に文句を言われることはなかつた。要は、目の上のたんこぶだつた。

この生活がいつまでも続けばいいと思つていた。やつと歯車がか

み合つたんだ。誰も傷付かなくて、どこにも問題ないじゃないか。今更、元の授業に戻れるわけがないんだから。でも、終わりは静かに近づいていた。ある日、図書館に向かっていると図書室に案内された。ストーブで暖められた部屋は心地よくて、うとうとしてしまった。司書の先生は珍しく困った顔でボクを見つめていた。なんでだろう、とボクはその理由を尋ねる。彼女は言葉苦しそうに、ボクに告げた。

もう図書館は使わせてあげられない、先生は首を振つた。逃げ場所が一つ、なくなつた。ボクがそうしていたことを、苦情として誰かが連絡したらしかつた。ボクのことなんて忘れ去られていると思つていたのに、ひどい仕打ちだつた。

保健室に向かう。ここなら、まだ大丈夫だと思ったから。けど、保健室の先生はボクに冷たい言葉を告げた。銀縁の眼鏡がボクを拒絶する。言つたことは司書室の先生と同じだつた。ボクは特別クラスにしかいられなくなつた。いわゆる『問題のある児童』をまとめたクラスだつた。ボクには彼らのどこに問題があるのかわからなかつた。授業らしい授業もなく、ボクは遊んだり突然叫び出す彼らを横目にプリントを解き続けていた。

隅に追いやられたようなこの教室で、ボクは窮屈だつた。ボクが何者なのかわからなくなる過程で、自分というものが希薄になつていくような気がした。ボクはぼんやりと辺りを見回した。彼らは楽しそうには見えなかつた。ボクと同じ、どうすればいいのかわからずにもがいているようだつた。

一人で何かを考えることが多くなつた。知識だけは多かつたから、空想をそれが手伝ってくれた。ボクは何者なのかを考えることはやめた。とりあえず置いておくことにした。もし空を飛べたらとか大ざつぱで子供じみたことから、この世界の他にはどんな形の世界があるのか、それをボクたちが、影でも見ることができのかとか今のボクには考えられないここまで、その空想は幅広かつた。それを

考るだけで楽しかった。

その日も、ぼんやりと空想にふけっていた。その学年で学習する内容はだいたい勉強し終わっていて、その知識を忘れることがなかった。だから今日も一日中ぼんやりと過ごすつもりだった。教卓の横に椅子を置いて座る教師は本を読んでいる。騒いでいる児童をときおりたしなめる以外はずっと本を読んでいた。

誰からも傷付けられることのないこの場所はひどく心地がよかつた。心地がよすぎて、感覚が鈍磨していく。そのことにすら気付かず緩い時間の中を泳いでいく。そのうち深海魚のように田が見えなくなるんじやないかと思った。ただ生きるために生きる、そこには目的なんてない。一日をなんとかやり過ごして、それを重ねて……。それからはどうじょうか、どうすればいいかななんてことも考えていなかつた。

終業のチャイムが鳴って、教室を出る。ボクはそこからすぐの裏口から、逃げるように学校を出て行った。後ろから誰もついてこないことを確認して、やっと足を緩める。こんな生活がいつまで続くんだろう。このじゅのはあまり眠れなくなっていた。何かに監視されているような気がして、目がさえてしまっていた。目の下のくまをこすりながらボクは下校路を辿っていた。一人だと思っていた。このまま、やり過ごせると思つていた。

けれど、立ち止まつた交差点、赤色の信号機の下、人がいた。彼はボクを睨み付ける。大柄な彼はそのときのボクにとつては恐怖の象徴だと思った。だから怖くなつて逃げ出した。驚いたように目を見開いた彼の表情を横目にしたあとは脇目もふらずにただ前に走つていった。けれど、ろくに運動をしていないボクが逃げ切れるわけがなかつた。結局追いつかれて、腕を捕まれた。まるで悪夢の再現だ、と思った。怖さが現実のものになつてボクは叫ぶ。どうにかなつてしまいそうだった。ボクという片鱗がぼろぼろとはがれて、中身のない自分をさらけ出されるような気分だった。

泣き叫ぶのが辛くなつて、ボクはそれをやめた。彼はボクを強く

抱きしめていく。恐怖が徐々に安心感に変わっていく。いつやつて誰かの胸に落ち着くのは久しぶりのことだった。ボクは静かに顔を上げた。見覚えがある顔なのに、誰だか思い出せない。世界から心を閉ざすようになつて、ボクは人の名前や顔を忘れるようになつていた。

彼が自己紹介をする。マエダジュンペイ……やつぱり、思い出せない。ボクが首をかしげると、ボクを抱きしめる力が弱くなつた。マエダジュンペイ、と彼の名を言葉でなぞつてみる。自分の声がこれまでしまつていてることに初めて気付いた。両親の前では気丈に振る舞えていたのに。

ボクはしばらく学校を休むことになった。と、同時にボクの問題が明らかになつて、学校はちょっとした騒ぎになつていて。学校側の謝罪と配慮でボクの家自身に被害が及ぶことはなかつた。ボクは療養のためカウンセラーのいる施設に送られることになつた。素行の悪かつたものから両親に問題があるものまで、小学生から高校生までがそこで暮らしていた。特別クラスとは違つて、生活に若干の緊張感がある。カウンセラーはみな厳しくも優しい人たちで、ボクはそこで人間関係を一から学んでいった。

ボクがそこで暮らしている間、両親は裁判を起こしていた。それに彼らは勝利して、小学校は教師数名の処分と学校システムの改善を求められることになつた。でも、もうボクには関係のないことだつた。ボクは中学生になつた、施設で。

中学一年になつて、ボクの精神状態がだいぶ落ち着いたとして施設を出ることになつた。三年間の療養だつた。しばらくのつもりが、だいぶ長くなつてしまつた。純平のこともちゃんと思い出した。彼は一ヶ月に一度のペースでここまで足を運んでくれていた。

最初の登校日、迷うことはなかつた。それに、純平もいてくれた。初めて袖を通す制服はスカートにブレザー。似合つていて、とみんなが言つてくれた。嬉しかつた、受け入れてもらえたことが。今、一人じやないんだということが。

学校側にはだいたいの連絡がいつていた。なので対応もだいぶスマーズだつた。男女別の授業は女子のほうを受けさせてもらつた。いいのかなと、最初は不安だつたけど、意外にも女生徒たちはボクを拒否することはなかつた、それよりも友人になつてくれるうことのほうが多かつたので驚いた。

男子のほうが扱いに困っていたようだ。特に気にせず、女子とじてみてくればよかつたのに。その様子は少しこかおかしくて、樂しかつたけれど。勉強の面での心配はなかつた。元々できた身だし、コツ次第で勉強といつのはうまくいくものなのだ。そのこつに気付くまでが難しいと言わればそれまでなんだけど。

中学校生活はほんの一時といつた感じだつた。すぐに受験シーズンが訪れて、ボクは純平と同じ高校を受験することにした。たいした理由はない、といつたら嘘になる。ほんとは彼の背中で守つてほしかつたからだ。……一応言つておくけど、彼を人間として頼つてただけで恋愛感情はなかつたんだからね。

そんなこんなで受験はうまくいつて、晴れて彼と同じ学校に通うよになつた。ここでもボクは女子の扱いを受けることになつた。ここまではつきりした態度を取られると、両親があらかじめ（いろんな方法で）根回しをしているんじやないかと疑えてくる。尋ねたところでそんなことはないと笑顔の返事が戻つてくるだけだつたけど、逆におつかない。

どたばたした四月を駆け抜けて、ピンク一色だつた坂道が爽やかな縁に変わつたころ、美緒先輩と出会つた。世界地図を片付けるよう教師に頼まれ、社会科資料室に向かつたときのことだつた。なんともなしに目的地に向かつていると目の前に足の生えた段ボールが歩いてきた。明らかにおかしいと思つて目を凝らす。自分の背丈より高い荷物を持ち運ぶつてどんな腕力だと思いながらそつちに向かつた。

自分より幾分か背丈のちつちやい女生徒が息を切らしながら荷物を持つていた。ボクは彼女に声をかける。返事がなかつたので承諾だと思いこんで一番上の荷物を取り上げた。段ボールはほほ空のようで、あまり重くなかった。世界地図は黒板用で大きさもあつたけど、脇に挟めば問題なさそうだった。前が見えない彼女のほうがどうにも危ない。視界が開けた彼女はおお、と言ひながら立ち止まつ

た。

辺りをきょろきょろと見回して、ボクの姿を見つける。危なつかしく見えたので手伝う、と彼女に言つとありがとうと暖かな微笑みで首をかしげた。

目的地は彼女と一緒にだつた。何年生か訊かれ、簡単に自己紹介をした。なら私が先輩ですね、物腰の柔らかな敬語で彼女は答えた。そう言われて、改めて彼女を見る。……どう見ても小学生だつた。ボクも背丈に関してはあまり人のことは言えないんだけど、それにしては幼すぎる。思わず何回か聞き返してしまつた。そのうち彼女はふくれてしまつた。何かあつたらよろしくと言われ、ボクは頭を下げた。

いつの間にか彼女はボディタッチをするようになつてその度に教室がどよめいた。純平はなぜか顔を真つ赤にさせてそれを静観する。何も知らないボクはきっと幸せだつた。けど、ボクにはそれは許されない。傷付けた人と傷付けられた人がいたなら、ボクは二人の手を取らなければいけない。日常を取り戻すために。

……ボクが清華さんと出会い、前の話。

季節を思い出したかのよつて雨は降り始めた。あのあと、雨は降り止むことなくコンクリートを濁つた色に湿らせていた。ボクは不機嫌そうな空を眺めて、授業が終わるのを待つていた。チャイムが鳴つて、ボクは清華さんのクラスに顔を出した。彼女に声をかけると、輝いた瞳でボクを見つめた。……その一瞬前まで、ひどく怯えた表情をしていたのに。

怖くて外を歩けない、という内容のメールをもらったのは今日の朝のことだった。学校と逆方向の彼女の家まで、ボクは迎えに行くことになった。早めに家を出て、彼女の家のチャイムを鳴らす。ベル越しにボクの声を聞いて安心したのか、彼女は玄関から出てきた。身だしなみはしてきたようだつたけど、田の下のくまがひどい。おはようと声をかけると、彼女は急に抱きついてきた。

「ずっと一人だつたんだ」

怖かつた、とひたすら連呼する。ボクは、なんで彼女がこう変わつてしまつたのか理解できなかつた。壊れてしまつた、と予感した。それとも、壊してしまつたのか？ 家で何かあつたのかもしれないし、まだ予想でしか語れない状況だつた。でも、昨日の彼女とは違う。それだけははつきりとしていた。

彼女と手を繋いで、学校まで向かつた。彼女は終始おどおどとしていて、顔を上げてはまたうつむき歩く。ボクは頭をなでて、誰も危害を加えようとする人はいないんだと言い聞かせた。けど、耐えられなくなるのかすぐにまたうつむいた。ボクはそれ以上の無理強いをせず、彼女の手を引いていた。

坂の前まできて、美緒先輩に会つた。彼女はいつもの子供のような笑顔を凍りつかせた。彼女と目があつても清華さんは笑いかけもせず、ただぼんやりとした目で彼女を見つめるだけだつた。泣きそよなまなざしをボクへと向ける。

「りつちゃんくん……何かあったですか？」

ボクにも何があつたのかわからない。だからボクはただ首を振つた。

坂道、ボクたちの空気は呼吸がじづらくなるほど重く、三人とも無言のまま校舎へと入つていった。靴を履き替えるのにも彼女はついてきて、決して離れようとはしなかった。一度手間になるとはわかつていたけど、ボクは内履きを彼女の下駄箱まで持つていき、そこで履き替えた。それから外履きを自分の下駄箱へと片付けた。さすがに教室は正反対なので、別れようとした。けれど手を離そとはしなかった。ボクは美緒先輩に目配せをしたけど彼女は苦い顔をするばかりで、結局教室までついていくことになった。別れの挨拶をする。行つてもいいけど、また戻つてくれと言われた。清華さんはまるで親とはぐれた子供のように、辺りを不安そうに見回した。ボクは目を伏せ、彼女に背中を向けた。

どうしてこんなことになつていいのか、ボクは原因を探ろうとした。昨日までの彼女とはまるで違つ。まるで……昔の彼女に戻つてしまつたかのようだつた。話でしか知らない、内向的でふさぎ込むような彼女に。

昼休み、ボクは清華さんの教室で彼女のことについて考えていた。隣の人の席を貸してもらい、何かあつたら対応できるように努めた。純平と会つたのかもしないと思い訊いてみたけど、それはないと否定された。それに彼女は言つていた、ずっと一人だつた。それは比喩であり、事実でもあるようだつた。それなら一人でいたときに、何があつたのだろうか。何かを思い出したのか……でも、何を？ 彼女が不意にボクの肩をたたき、ボクに呼びかけた。

「なあ、この人たちは何を考えているんだろう

周りを見回し、首をかしげる。そんなの、誰にもわかりようがないことだ。だから、普通はそんなことを考えないでいる。考えないよう、している。

「私は、それを考えずにいられないんだ。これっておかしいか？」

ボクは、最初曖昧に答えを濁そがと考えた。でも、すぐに思い直す。ここで正直に答えなければ、きっと彼女はまた悩んでしまうと思ったからだ。

「うん、おかしいよ。そんなこと、誰もわからないよ。だつて、今清華さんが考えていることすら、ボクにはわからないのだから」

「そうか、と彼女は頷いた。しばらく考え込むような素振りを見せて、彼女は切り出した。

「あんな、律。私はいつも私なんだ、それをわかつてほしい」

「その言葉に安心する。ボクの考えていることが杞憂で終わつたからだ。

「ただ、自分でもわからないぐらい、人に対しても恐怖心を持つてしまつて、今は律の言つこと以外信じられないし信じたくない」

「だからつて、このままでいるわけにはいられない。ボクがそうであつたように。

「清華さん……ちょっとずつで今はいいから、心を開いていい。確かにいいやつばかりじゃないけど、少なくともボクの知る中では、本当に清華さんを傷付けたい人はいないんだから」

純平にだつて、彼女を傷付けなければいけない『理由』があつたはずなんだ。例えそれが許されないことであつたとしても、その理由がわからなければ解決にならない。ボクは彼女のためにすべてを明らかにする必要があつた。そして、彼女が不条理に巻き込まれたとき、彼女自身がそれに負けない強さを手にする必要も。それだけは、ボクが手に負える相手ではなかつた。理由のない暴力だつて存在する。ただ純平はそうじやないと信じていた。だからこそ、彼とは対峙しなければいけない。

努力してみると、と彼女は頷いた。まずは友達と会話してみよう、とボクは背中を押してあげる。たゞたどしい口調で、彼女は友達の輪へと入つていく。急に大人しくなつてびっくりしたんだよ、と彼女たちは清華さんのこと心配してくれているようだつた。彼女が生徒みなに好印象を持たれていたことは前々から知つていた。ボク

は彼女に田配せをして、教室を出て行った。

ボクの家にほど近い公園。大人数で遊ぶには適していないそこには少ない遊具と木のベンチが置かれていた。夕方より暗く、街灯がちらほらとつき始める。ボクは約束の時間よりも早く来て、彼の到着を待っていた。正直、どう切り出そうか悩んでいた。聞き出したところどうしようかとも思った。どちらにせよ、ボクは怒らなくてはいけない。誰のためなのかはうまく答えられる自信がなかつたけど。

約束の時間に五分遅れて彼はやつてきた。ジャージ姿といふことはさつきまで部活をしていたということだろう。案の定、部活で急に呼び出しがかかって遅れたことを伝えてきた。ボクは彼をベンチに案内した。

「それで、話つて何なんだ」

腕を組んで腰掛ける彼の表情は引き締まつていて、いつもの馬鹿話ではないことを悟つたようだつた。うん、と小さく頷き、ボクは質問を投げかけた。

「正直に答えて。……純平は、清華さんと付き合つていたんだよね」一瞬、瞳が曇つたようだつた。深い溜め息に混じりすゝみに、ゆっくり言葉を吐いた。

「ああ、そうだ」

「どういうきっかけとか、何があつたとかは清華さんから聞いた」愚痴をこぼすわけでも、表情を変えるわけでもなく、純平はぼんやりと遠くを眺めていた。ボクは言葉を続ける。

「なんで、清華さんに暴力を振るつたりしたの？」

なんで、と言葉を繰り返す彼。何度もその言葉を口の中で小さく転がして、また深い溜め息をついた。ボクは彼が説明を始めるまで待ち続けた。

「なんでなのか、俺にもわからない」

ふつと、抑えていた怒りが沸点に達した気がした。無意識に立ち上がり、彼の胸ぐらを掴んでいた。彼はボクから田をそらしてつぶやいた。

「殴りたきや、殴れよ」

ボクは腕の力を抜いて、彼を解放した。怒りにまかせて殴つたところで、状況は悪くなるだけだ。彼は首元をさすりながら苦虫を噛み潰したような顔になつた。

「俺は、菜月先輩を愛してた。誰にも、負けないぐらい。なのに、憎くなる瞬間があつたんだ。なんでそうなるのか自分でも理解できない。ただ、その衝動が抑えきれなくなつて、手が出てしまった」  
どうして、こんな身近に不条理が隠されていたんだ、よりによつて、純平がそういうことを言うなんて。ボクは納得がいかなかつた。  
「何かあつたんじやないの、人に何かをぶつけなければ耐えきれないほどの辛いことが」

ベンチに座る彼はとても小さく見えた。ただ見下ろしているだけなのに。ボクは彼の言葉を待つた。理由がないなんて許されない、だつてそこには救いがないじやないか……！

重い空気が流れている。雨は午後の始めにやんだけど、また泣き出しそうにぐずついていた。ボクは気付かないうちに拳を握つていたことに気付いて力を抜いた。

「俺は、身勝手な人間だつたんだ」

それは今でも変わらないな、と自嘲する純平は初めてボクにまなざしを向けてくれた。

「陸上部に限らねえんだが、運動部の一年は『ボウズ』と呼ばれでな、ほぼこき使われる。まあ先輩のはたいしたことじやない。なぜか俺はタメのやつにも同じような扱いをされた」

思い出すように、何があつたのか並べていく。

「部室の掃除やら片付けやらから始まって、気付けばパシリの仲間入り。なぜか俺の味方をするやつは一人もいなかつた。そのうち、俺の態度が気にくわないと言い出すやつがいた。理由がわからない

から聞き返した、そいつら、いつにやがったよ……お前に幸せは似合わないって」

幸せ、とはきっと清華さんと付き合って始めたことだらう。それを快く思わない人間がいた。それは、どう見たって私怨だ。

「そいつら、俺のことをいきなりボコり始めてさ、その日は日が暮れるまで殴られ続けた。俺は手を出さなかつた。そしたらこいつらと同じになつちまつ、最悪、俺が被疑者になるかもわからなかつたからな」

最初のうちは黙つて殴られていた。そのことを誰にも言わず、一人で抱え込んでいた。でも、限界は誰にも訪れる。

「なんで、こいつといることで苦しい思いをしなくちゃいけないんだろうなと思うようになつていつたんだ。だんだん、彼女が憎らしくなつていつた。おかしいだろ、菜月先輩は何も悪くないのに。でも、当時の俺は、彼女と別れることで痛みから解放されると思ったんだよ」

そこからは清華さんから聞いたとおりだつた。嫌われるような行為をわざとして、それでも彼女は動かなかつたから、暴力に走つた。「でも、彼女は離れるどころかより近づくようになつてきた。俺のためなら何でもやるから、私から離れないでくれつて、泣いてせがんだ。俺はだんだんいたまれなくなつて、謝るようになつていた」

そのうち、彼は煙草を吸うようになつた。苦くも心を安らげるにはちょうどよかつた。彼女を傷付ける道具にもなつた。彼女がどれだけ傷付けば、彼女は目を覚ましてくれるのか。いつの日か部員に暴行されることよりもそつちのほうが気に掛かり始めていた。

「そして、俺は暴行事件を起こした。彼女の首を絞めたんだ。あまりに彼女が安らかな顔をするから、俺のほうが怖くなつた。彼女の強い希望で、立件されることはなかつた。ただ、停学をくらつた。名田上は喫煙だつたけな。まあ、ここもあいつから聞いてるんだろ

？」

ボクは一つ、首肯した。

「もうどうでもよくなつちまって、部員を数名ずつ呼び出して今までの鬱憤を晴らしてやつたよ。今思えば、俺はぼろぼろだった。何もいらないと思った。いつそ死んでしまおうかとも思った」

でも、律がいたからな、と笑う。その微笑みはとても不格好でどこか引きつっていた。でも彼らしいな、と思った。

「それは思いどめて、でも、これからどうしようか悩んでいた。今更部活にも戻れないと思っていたし、停学中は家でぼんやりしているか外をぶらつき回っていた、そんな矢先、美緒ちゃん 和泉美緒に会つたんだ」

もう一人は彼女と知り合つていた。ただボクは清華さんと美緒先輩が友人（といつても当時は彼女の片恋慕だったつけ）だということを知らなかつた。

「彼女は出会い頭、俺に平手打ちをした。誰に殴られるより、彼女のそれが一番痛かつた。ぼろぼろに涙を流し、俺に怒りをぶつけた。俺は虚しくて、彼女の言葉を飲み込むしかなかつた。でも、虚しきつただけの胸が、どこか満たされていくような気がして、溢れて、涙になつた」

ボクは、彼に何ができるだらうと思った。もしかしたらボクにできることなんてないのかもしれない。なんとなく確信する。もう、純平が一人になる必要はないことを。美緒先輩がもつと近くで彼を見守つてあげてほしいということ。

「俺は、当分一人で生きることを決めた。これは戒めだからな」

ボクは、それは違うよ、と言つてあげた。もう、一人じゃなくていいんだよ。彼と別れたあと、ボクも家に戻つた。明日、最後にもう一つやらなければいけないことができた。ボクが唯一、できること。

昼休み、ボクは美緒先輩のいる教室へと顔を出した。もちろん彼女と話し合う約束をするためだ。扉の近くにいた生徒に声をかけて、彼女を呼ぶように頼む。けれど、生徒から返ってきたのは芳しくない返事だった。

「うちのクラスに、そんな子いないわよ」

最初は冗談で言っているのかと思った。あるいはわざと意地悪しているのかもしれないと思って、もう一度尋ねた。けれど彼女の答えは変わらなかつた。違うクラスも回つて、同じように確認した。けれど返つてくる答えは同じで、ボクは肩を落とした。でも、そんなおかしなことがあつたらたまたもんじやない。ボクは清華さんに美緒のことを尋ねた。

「いづみ……みお？」

血の気が引き、鳥肌が立つた。なんで、覚えていないんだ。ボクはふと、昨日のことを思い出す。朝、彼女を清華さんが認識しなかつたのは清華さんが心を閉ざしていたわけではなく、その時点で『忘れ去られようと』していたからじゃないのか？……そんなことがありえるのか、まさか、と思つた。

とりあえず、自分の教室に戻る。純平はいつも通り、机に突つ伏していた。もう昼食はとつたようだつた。彼の頑丈そうな肩を搖らし、無理矢理起こす。

「ねえ、起きてつ、大変なんだよつ、美緒先輩が、美緒先輩が」  
不機嫌そうな顔を彼は見せる。そして、首をかしげた。

「美緒先輩つて……誰だよ」

おかしい。いつの間にか、何かが狂い始めている。しかも、急すぎる。そんな馬鹿な話があるもんか、しかも、昨日彼女のこと純平は話したじやないか。それなのに、覚えてないだなんて。もしかして、彼女の身に何かあつたんだろうか。ボクは携帯電話を取り出

した。最初からやうすればよかつたのに、ボクは失念していた。彼女の名前を探す。

なんですよ。

彼女の名前はアドレス帳になかった。それどころか、通話記録も、彼女と交わしたはずのメールまでも消えていた。彼女を必要としているボクがそんなことをするなんて考えられない。頭がこんがらがつて、叫びたくなる。ボクはなるべく冷静になるように努めた。常識に照らし合わせれば、よほどのことがなければ急にいなくなったりできないんだ。ましてや、ボク以外の人の記憶を消すなんてこと、普通はできはしない。

彼女はどのタイミングで消えたんだ。そして、この世界で何が起こっているんだ。ボクはこのまま学校にいることができなくて、純平に早退すると告げた。

「どうしたんだ？」

「理由はあとで話す。先生には具合が悪くなつたとか言つておいて、まあいいけどよ、と間延びした返事のあと、彼が言つた。

「無理はすんなよ」

ボクは手を振つて、それに答えた。

ボクには行くあてがあつた、いや違う。ボクが行くべき場所は決まつていた。だからその足に迷いはなかつた。帰路を辿る途中の道。ボクはそこがいつもと違うことを見破つた。誰の仕業なのか、それとも彼女がそれを望んだのかはまだわからない。でも、それはまだ開かれていらない扉があるからだ。それを開かない限り、世界はやがてループする。その前に、救わなければいけない。

商店街に入り、ボクは辺りを見回した。なくなつてしまつていたはずの記憶をなんとかつなぎ合わせようとする。微かに見覚えのある裏路地を見つけて、ボクは細い道へと入ろうとした。その前に立ちはだかる一匹の黒猫。かつて、ボクにしおりの在処を教えてくれて、また平行世界へと案内してくれた。

ボクたちは対峙する。どちらも引こうとする意思はない。ボクは、

猫に頭を下げる。戻るためではなく、進むために。

「なぜ、忘れておらんのじゃ」

顔を上げると、細い瞳がボクを責める。人間は記憶を完全に消去できるわけじゃない。表に上がらないようにゴミ箱へと入れるだけ。そこから記憶を取り出したのは馬鹿力というか、半ば強引で自分でも具体的な説明ができないんだけど。

「ほう……ちょっと悔つておつたな。で、用件は何じゃ」

「美緒先輩を取り戻す」

ボクは即答した。ボクは自信があつた。彼女は『向こう側』にいる。なぜその世界を選択したのか、ボクは聞き出さなければいけなかつた。そして、強引だつたとしても元の世界に連れて行く。

「まあ、よからう。じゃが、わしにできんかったことをおまいさんができるのかね？」

できるできないじゃなくて、やるしかない。そう答えると、人間らしい屁理屈じや、どぶつきらぼうに答えてボクに背を向けた。ボクはその背中についていく。以前通つたことのある道をなぞつていく。やがて方向感覚はなくなつたけど、怖いものはなかつた。

程なくして、雑草の生え広がつた平野へと出る。風が心地よく吹く。向こうとは違い、雲一つない青空だつた。ボクは彼女の姿を探し始めた。あまり迷うこともなく、彼女は見つかった。白い麻でできたワンピースのような織物を着た美緒先輩は、雑草のベッドに身体を預けていた。彼女の髪が風にそいで、小さな身体は呼吸によつて揺れていた。ダメだよ、こんなところで寝ていちゃ……。猫は遠くで待機しているようだつた。ボクは彼女の頬をなでた。

「ねえ、起きて。ボクに、お話を聞かせて」

彼女はゆっくりと目を覚ました。ボクの姿を確認すると、跳ねるようにして起き上がつた。けどすぐにボクから目をそらす。

「なんで、ここに来たですか」

ボクは猫にしたように、即答した。でも、彼女は喜ぶどころかむくれて、ボクから目をそらす。不意にかわいい、と思つてしまつ自

分が情けない。

「なんで、戻らないといけないですか、そのための用意もちゃんとしましたのに……やっぱり、りっちゃんくんに対しても記憶を消してくださいました」

「そこまで大がかりなことをして、なんでこの世界に生きようとしたのです」

溜め息を短くつき、美緒先輩は言い放つた。

「りっちゃんくんは勘違いしているです。美緒は元々この世界の住人。美緒という名前は仮のものです、そしてこの身姿も」

ボクの行為の意味が希薄になった。元々こちら側の人をボクの口で引っ張つてきてしまつてもいいのだろうか。簡単にはいいと思えなかつた。ならせめて、と提案した。

「なんでボクたちの世界に現れたのか、それだけは聞かせてよ」

彼女はふくれ面をやめて、ボクに一瞥をくれた。

「それを聞いて、りっちゃんくんはどうするですか」

……どうするんだろう。ボクはその質問に対し適確な解答を見つけることができなかつた。でも、聞かなければいけないような気がした。そうしなければ、ここから動けないと思つた。この先は始まりなのか、それとも終わりなのかわからなかつたとしても。ボクの熱意に押されたのか、彼女は遠い目をしていつた。

「長い、話になりますです」

初めて見た空は、途方もないぐらいに高かつた。初めて目に入つた世界はただただ広く続く平野だつた。私は自分が何であるか把握していなかつた。する必要もないと思えた。空腹もなく、時間という概念もない。朝日が昇れば目を覚まし、闇が訪れれば眠りに就いた。それだけで私は満たされていたから、この場所がすべてだと思つていた。

目を覚ましている間、私はぼんやり何もせずに過ごしていた。網膜に映りこむ風景を焼き付ける。毎日同じように見えて、そんなことはありえないんだと気付き始めた。風の向きは刻々と変わつていくし、日の長さがが徐々に変わっていくことにも気付いた。そして、だんだん私の中で新しい感情が芽生え始めていることに気付いた。でもそれをしばらくの間持て余していた。どうすればいいのか、答えをしばらくは探していた。

ある日、雨が降つた。私にとつて初めての経験だつた。私がいたところには隠れる場所もない。私は冷たさに身体を震わせながらそれに耐え続けた。苦しくはない。ただ、熱っぽくなつてぼんやりとして、やがてその瞳を閉じてしまつた。まぶたを開くと再びの青空が広がつていた。私の目の前にある草葉は雨に濡れていた。私は舌でそれをなめてみる。味はしなかつた。よく考えれば私の身体もずぶ濡れになつっていた。全身をぶるぶると震わせ、水気を飛ばす。そのうち乾くだろう、と思つてそれからはそのままにした。

今度は濡れたくないな、と思つた。せめてこの身体を雨からしねる場所がほしい。私は決心した。その場所を探すために。そして、この場所以外の世界を知るために。私は雑草を払いのけながらその足を踏み出した。太陽が真ん中まで昇つたころ、雑草だらけの平野を抜けた。所々に花が咲き、奥のほうには大きな水たまり あとになつて、それが湖であることを知つた があつた。私は自然と、

湖のほうへと足を向けていた。そこに着いて、水面に顔を向けた。

自分の顔を見るのはそれが初めてだった。今まで自分の顔も知らないまま過ごしてきた。それで不自由がなかつたからだ。とんがつた三角の耳。まんまるくさせた瞳の色は金色。頬には長いひげが生えていて、顔全体が身体と同様、真っ白な毛で覆われていた。最初からそうと自覚していればよかつた。最初の言い出しで自分が猫であることを宣言すればいいのだから。でも、そのときの私は自分を表現する言葉を持ち合わせていなかつた。

名称がないということは、自分の存在を曖昧なもにさせる。名前を与えてられ、それは目的を持つ。でも、私がなぜそのときなぜ名称を与えてられていなかつたのかなんとなく納得がいつた。私には目的がなかつたから。ただ生きているだけ。ここへ来ただけでも大きな進歩なのかもしけないけど、それでも私がここにいるための理由にはならない。どうしたら私は目的を持つことができるんだろう、と思つた。

まだ私は誰にも会つていないことに気がついた。私がいるということは、私の他にも同じような状況に置かれたものがいるかもしれない。湖は大きく、その先に何があるかわからなかつた。それが正しいことかわからなかつたけど、試しに湖の周りを歩いてみた。もしかしたら反対側に着くかもしれない。はたして、私はその先がどうなつているのか知ることになった。

その先には、何もなかつた。正確には、閉ざされていた。最初見た時点で気付いた。目の前に、もう一人の私が映つていた。私はそれに向かつて爪を立てる。手に入れたのは痛みだけだつた。後ろを振り向き、もう一度前を向く。……それで私はそれが何であるのか知つた。それは世界を反射させていた。どういう物質なのかはわからない。ただ、その先へ向かうことは絶望的だということははつきりしていた。

私の視界の限界を超えて、それは高くそびえ立つていた。私は壁沿いに進んでみた。再び雑草が増え始め、やがて私の背丈を越しす。

方向感覚を見失い、やがて湖に戻った。いつまで壁沿いに進めていたかも思い出せない。気付いたらまたこの場所に来ていた。この世界には果てがある。そういう世界なのか、誰かがそういうふうに作り替えたのかはわからない。私はどうしようもなくなつて、道を引き返すことにした。元いた場所に戻ったころには日が暮れていた。私は眠った。

……田を覚まし、今日はどうじょうかと思つたけど、今度は違う方向に進むことに決めた。まだ雨宿りできる場所を見つけられない。この世界の仕組みについてはもう諦めることにした。その先がないのならば、今のこの世界の中、新しいものを見つけるしかない。私は一步を踏み出した。

しばらく彷徨つていると森を見つけた。どのくらいの規模なのかはわからない。迷う心配もあつたけど、そのときはそのとき、と腹をくくることにした。食事をとらなくても平気なところ、死ぬことはなさそうだった。そこは轍もない場所だった。私しかないのならば、それも当然だ。自分がどこに向いているのかもわからないまま、森の中を進んでいく。白い毛は土に汚れて、落ち葉はちくちくと痛い。それでもどこに続くような気がして、彷徨い続けた。

……どれくらい進んだのだろうか。足を止めたくないのに、身体が言つことを聞かなくなり始めていた。それでも、それでも、と意地になつて足を進める。でも限界だった。疲れないはずなのにな、と苦笑したけど、頬は引きつるだけだった。私はゆっくり、意識の泥に沈んでいった。

……瞳をこじ開ける。しばらくぼんやりとして、ピントを合わせることに努めた。そこは森でも、雑草の続く平野でもましてや湖でもなかつた。頭に静かな感触があつて、それは私の背中をなでていた。悪い心地ではなかつた。私は全身であくびをして、そこから降り立つた。今までいた場所のほうへ目を向ける。そこには、見たことのないものがいた。私とは身姿がまるで違つ。大きな存在だったそれを私は警戒した。なんと呼べばいいかわからなかつたし、どう対処すればいいのかもわからなかつた。

「心配しないでいいわ」

……それが私にわかるように伝えたのか、その言葉を私は元か

ら理解できたのかわからなかつた。わからない存在に対して、しばらく畏怖していたような気がする。それは自分が人間であることを伝えた。人間とは何か、と私は問うてみる。それは表情を変えずに、よくわからぬわ、といった。その言葉は本心からのような気がした。私は静かに警戒を解いていく。なんでこの世界にいるのか訊くとそれはしばらく黙り込み、そうね、と言葉を紡いだ。

「あなたに名前をつけてあげようと思ったのよ」

私は驚いて、それを見上げた。それでもそれは表情を崩さない。それを微笑みと呼ぶと知ったのは少しあとのこと。それより、名前をつけることの意味を思い出す。誰にそれを教わったのかは知らない。最初に与えられた情報の一つだつた。

「私が、色々なことを教えてあげる。この世界から、羽ばたくために」

それは自分の名を名乗り、それが女性であることを知つた。女性に対する代名詞はそれではなくて彼女。彼女は黒い長袖と同じ色のズボンをはいていた。人は洋服というものを着なければいけないらしい。絶対というわけでも、いつまでも着ているわけにもいかないけど、基本的には裸で生活することはない。彼女と私がいる場所は木で建てられた小屋。ここには最低限のものが揃つていて、ここからでないで暮らすことができた。この世界で食事が意味を持たないのは人間も変わらないようだつた。

私はしばらくこの小屋の中で、色々なことを学ぶことになつた。いろんな言葉を覚え、自分が何であるかを学んだ。私にとつては彼女から与えられるものがすべてで、受け入れられないものはなかつた。私は外の世界のことを考えるようになつていつた。そこで待つてているのは試練だということも、使命とは絶望的までに苦しいものだということもわからず、夢だけを描き続けていた。

彼女は、いつものように私に話しかけた。穏やかな微笑みと瞳をたたえて。それは、初めてのお誘いだつた。この世界を出て、違う場所へ行かないか。私は冗談だと思って聞き返した。そんなこと、

できるのかと。彼女は頷いた。

「でも一つ、条件があるのよ」

私は、向こうの世界に行くために人間にならなければならぬといふ。彼女も、向こうの世界では猫に変わるらしい。なぜ、猫と人間なのか。その問にはわからない、と彼女は答えた。そして、一度変身してしまうと一度と元の姿に戻ることができないといった。この世界に戻ることができても、猫になることはできない。今の人との関係とは真逆になるのだ。私は三日三晩悩んだ。もちろんここではない世界には強く憧れた。だからといって……。

充分に考えた上で、結論をまとめた。私は、この世界を出ることに決めた。保証がないことは心配だつたけど、なんとかなると思つた。人間になることにも憧れた。彼女に伝えると、早速身支度を整え始めた。彼女が用意しているのは私のための服だった。

小屋を出て、森を抜ける。彼女は地理を知つていたのか、迷うことなかつた。私には抜けられない壁の前で彼女は何かをつぶやく。何のきっかけもなく、彼女は頷いた。私は彼女の後ろをついていつた、そこには壁なんてなかつた。彼女の足取りに迷いはない。どこがその境目だつたのかはわからなかつた。気付いたら、違う世界に来ていた。そろそろね、と小さく言う彼女。

次の瞬間、一気に視界が高くなつた。下のほうから声がして、私はその指示に従つた。人気がないところでよかつた。私は裸身で、なだらかな胸や白い肌を晒していった。素肌のままでいることは寒いし、それ以上に恥ずかしい。私は恥ずかしいという感情を感覚的に理解した。あわてて鞄を開け、とりあえず上にあるものを引っ張り出してそれを着た。それは私の身長にちょうどよかつた。昔の洋服を持ち出してきたのだという。とつておいてよかつた、と今となつては黒猫となつた彼女が苦笑した。

再び彼女の後ろをついていく。どこの商店街に出た。けど、誰かがいる気配は全くない。彼女と私はそれが来るまで待つことにした。しばし沈黙が続く。あまり穏やかではない空気がここには流れてい

た。程なくして、暗闇より黒いスーツを着た男が現れた。夕暮れにそれは決して溶け合おうとはしなかつた。二人とも彼が話を始めるまで待つていった。柔らかな表情を浮かべているように見えて、その逆のような気がした。彼は決して自分の身元を明かさなかつた。そして私たちのことについても質問することはなかつた。無機質な口調で彼は言つた。

「これからは別行動をしていただきます」

それは、彼女との別れを意味していた。彼は一人とも別の使命があることを淡々と説明した。もう一人男が現れて、私は彼についていくことになった。一番最初に現れた男は細身で理知的な印象を与えたけれど、私の前でどんどん進んでいく彼はどこか屈強そうな印象があつた。彼は道の途中、いくつかの質問をした。

「武道の経験は」

「銃器を扱ったことは」

「運動神経はあるか」

「ない、あるいはわからない、と答えるしかなかつた。その言葉の意味は彼女から教わつたけど、それを実際に利用したことはなかつた。運動神経、といわれても人間のときと猫になつたときとでは違ひがあるだろう。彼は一旦立ち止まり、私へと振り向いた。なめ回すように私を見て、小さく溜め息を吐いた。私がその理由を説明しても彼は答えなかつた。そういうことになつてているのだろう。きっと、彼女がどうなつたのか聞いても答えないと答えるだろう。少しづつ何かを諦め始めていた。やがて、何を諦めていたのかも忘れた。

どれほど歩いていたのだろう、もうどの道を歩いたのか忘れてしまつた。やがて大きな通りに出て、そこには白いバンが停まつていた。人波を彼は進んでいく。かき分けることもしない。彼の前には自然に道ができる。不思議に思いながら、彼の後ろを進んだ。あまり、恐怖心はなかつた。彼女との別れを引きずつてはいるだけ。バンに乗り込むと、車はすぐに動き出した。運転手が待機していたらしい。私はぼんやりと外の風景を眺める。そうしていると彼が眠くないか、と聞いてきた。眠くないと答えると、小さな白い布 正確には、布に染みこまれた液体 をかがされた。抵抗もできないまま私は眠りを強制された。

目が覚める。そこはそれなりに綺麗な部屋だった。荷物は私の鞄

ぐらいで（中身は出されていて、検閲されたようだつた）、本棚や机の上は空で、気になる匂いもなかつた。フローリングの床が足に冷たい。宿を提供されたのかと思ったが、それにしてもやりかたが強引すぎると思つた。薬までかがされて、ようこそいらっしゃいませなんてことありえない。

とりあえずこの部屋を出ようと思つた。まずなんでこんなことをされなければいけなかつたのか、説明がほし。私はドアノブを回して扉を開けようとした。……案の定というべきか、それは開けられなかつた。内側に鍵はなく、外からしか鍵は扱えないようだつた。窓はあつたものの、細い格子で囲まれていて、道具でも使わなければそこから出られそうになかつた。興味が、恐怖に変わっていく。無理矢理寝かされたのも、ここがどこにあるのかわからせないようにするためだらう。私はこの組織が私に何をしようとしているのか、彼女はどうなつてしまつたのか理解できず、その恐怖に怯え始めていた。

暴れたところでどうしようと悟つた私は部屋の真ん中で三角座りをしていた。自殺するための道具もなかつたし、しようとも思わなかつた。空腹を覚え始めたころ、ノックの音がした。私は勢いよく顔を上げ、そこへとまなざしを投げる。そこには私とあまり背の変わらない女の子がいた。ただずいぶん大人びた表情をしている。私は逃げたいと暴れるには空腹過ぎた。力なく彼女の元に近づき、なぜ私がここにいるのかと理由を尋ねた。彼女はただ首を振つた。答えられないのか彼女にもわからないのかは知りようがない。彼女は私に洋服を手渡した。彼女が着ているものと同じ、濁つた緑色の軍服、だつた。

それに着替えると、私についてきて、と口数少なに指示した。途中、もう一言付け足す。

「ここから逃げようなんてこと、考えないほうがいい  
私はうまく答えられず、頷いただけだつた。

コンクリートを打ちつ放しの廊下を進み、階段を下り、広い場所

へと出る。何十個と適当に並べられた丸いテーブル、横のほうには大きな厨房、食事の匂いからここは食堂だとわかつた。そこには同じ服装の人たちがたくさんいた。男女の人数は半々ぐらいで、若い人から初老の人まで広い年齢層の人がいた。ただ年齢が上がるほどに男性の割合が増えているような気がした。彼女に促されるまま、配膳場所まで向かつた。彼女の身振りを真似しておかずを皿へ盛りつけていく。最後に厨房担当の方から白米をもらつた。彼女は空いているテーブルを見つけて、そこへ案内した。

彼女は何も語ろうとしなかつた。ただ一言、おいしい?と投げかけてくれたのが印象に残つた。私を気にかけていないわけではないと思えた。発言をここでは制限されているんだ、と聞かされた。実際、ここでしゃべっているのは年齢の高そうな男の人たちと厨房にいる人たちぐらいのものだつた。

初めての食事はとてもおいしかつた。もちろん、まずいものを食べたことがなかつたので比較しようもなかつたが。食事が終わるとまた彼女の後ろをつけてさつきいた部屋に戻つた。しばらく休んでいるといい、と彼女はつぶやくように言つて、扉を閉めた。鍵の閉まる音。また私はとらわれの身になつた。

その日は、それ以降の訪問者もなく終わつた。私は備え付けのベッドで眠つた。次の日、口が上がってからノックの音がした。朝食かな、と思って顔を上げる。案の定、昨日の女の子が顔を出してきた。昨日と同じように食事をとると、彼女は違う部屋へと案内した。私の部屋とは違う、幾分か立派な造りの扉だつた。彼女がノックをする。低い男の声がして、扉が開いた。促され、部屋に入る。

大きな机、黒く大きな椅子に座つていたのは初老の男性だつた。横にはスーツを着た女性が待機していた。彼はいいよ、と隣に並んでた女の子に声をかける。彼女は一礼して部屋を出て行つた。重そうな音がして、扉が閉まつた。私は視線を前に戻し、彼を見つめる。一見した限りでは優しそうなおじさんといった風貌で、むしろ軍服が似合わないぐらい優しい細い目をしていた。人当たりのよさそう

な彼は自分の手を組んで、私に顔を下げた。

「昨日は手荒な真似をしてしまってすまない」

……謝られても仕方がない。私はなぜここに連れて行かれたのか、その理由が知りたかった。单刀直入に、それを訊いてみた。彼は顔を上げ、首を振った。

「すまないが、それに答えることはできないのだよ。ただ、君についての情報は把握している。君はしばらくここで使命を果たしてもらう」

私はまず名前を与えられた。イズミ・ミオ。どういった字を書くかとかは教えられなかつた。そして、使命を与えられた。

「君には、特務部として任務を果たしてもらうことになる」

任務とは、何なのだろうか……？私の胸は怖いぐらい高鳴つて、唇は震えて言葉にならない。彼は柔軟な表情を崩さないまま、答えた。

「任務は、暗殺だ」

アンサツ……その言葉が焦点を結ぶには時間がかかつた。意味のある単語だと氣付いたとき、はっと息を飲んだ。この人は、私に人殺しをしろと言つている……！私は首を振つて、それはできないと否定した。彼の表情が曇つた。

「君には身寄りがない、だから私たちが生活を保障すると名乗り出たんだ、君が使命を果たすかわりに。別にここを出て行つてもかまわない、ただこの場所を知つた以上生かしてはおけん」

横で待機していた女性がいいのですか、しゃべつてしまつて、と声を出す。語気が少し荒い気がした。なに、答えにはなつてないと涼しい声を出す男。

「もちろん私たちが訓練をし、その上で任務に参加してもらう。そういう難しいことではないから安心していい」

安心？それは、訓練に？それとも、人殺しに……？彼は聞こえなかつたふりをして、話を続けた。

「ここに来たからには心を決めて望むこと。我々は、人の望みを叶

えていいだけなのだよ」

……部屋を出ると、さつきの女の子が待ってくれていた。彼女は自分の名前を告げた。ユノ。名字はない。フルネームを与えるのは限られた人たちなのだと云う。ここでは以前の名前を奪われ、この組織としての名前で生きることになる。私はこうえきれなくて、彼女に訊いてしまった。

「あなたは、人を殺したこと、あるの？」

彼女は答えなかつた。

その日から、訓練は始まった。護身術から始まり、それと同時に銃を使つた訓練も行われた。最初は銃に触るのも嫌だつたが、いつの日いか慣れてしまった。時間が経つにつれて、私は組織の中でもなかなかの狙撃率を得るようになつていて。そして、外での活動が始まつた。

心を鬼にしろ、と一緒に行動した上司に言われた。指示の上で、初めて引き金を引いた。足を踏ん張り、反動に耐える。乾いた音が心臓に響いた。次の瞬間見えたのは遠くで力なく膝を折る人の姿だつた。一気に血が冷め、身体が震える。拳銃が手から離れ、コンクリートに音を立てる。私は彼のように倒れ込んだ。人殺し、と誰かが叫ぶ声がした。甲高いその女の人の声を私は忘れられない。私は地面に向かつて吐き続けた。吐くものが何もなくなつても、胃液だけを流し続けた。嗚咽を上司が口を塞いで隠す。私を抱きかかえると、待つっていたバンに乗り込んだ。私は車の中で叫び続けた。

その日から、私の心は乾いてしまつた。何度も引き金を引いて、何度も人を殺した。急所を外すと出血性ショックで死ぬまで若干意識が残る。そのもがく数秒の時間が私が経験した中でも最大の恐怖だつた。数人殺すと罪悪感はなくなつた。やがて組織の中でも忌み嫌われる存在になつていつた。報酬のためならいくらでも人を殺す、と罵られた。そんな言葉で傷付くほどの余裕は私にはなかつた。私はただ銃弾を放つ殺人機械になつていつた。私は人間になつて何をしたかつたのだろう。でも、そんなことを考える余裕があつたら訓練をしていたほうがマシだつた。コノと会うことはもうなくなつていた。

そんな日々がいつまでも続くと思つた矢先、呆気なくこの組織は崩壊した。任務に失敗した人間が逮捕されたのだった。そこからこの組織の全貌が明らかになり、國家権力の手が入つた。上部の人間

は逮捕され、その行方は知れない。私や他の未成年の人たちは被害者として罪を問われることはなかつた。保護されたとき、私の目の前で引き金を引く人もいた。洗脳の話を聞いていた私はそういうふうに訓練されていたのかな、とその人を冷たい目で見送つた。警察官が私の目を塞ぐ。そんなことをしなくても大丈夫。私はもう数え切れないほどの死を見てきたから。

身寄りのない私は孤児院へと送られた。名前は一つしか知らなかつたから、読みしかなかつた名前に和泉美緒、と当て字をつけた。年齢上高校生になつていていた私はそこからほど近い学校に編入することにした。運良く私は組織の中で教育を受けられた身分だったので、それは難しいことではなかつた。そこで暮らしは、幸せそのものだつた。鉄の塊の重みに耐えることもない。誰も血を流さないですむ、平穏な世界。私にとつてそこは切ないぐらい幸せすぎた。私はこの最悪だと思えた世界で初めて安らぎを得ることができた……！

素敵な人たちは、みなそれぞれに痛みや悩みを抱えていたけれど、みんなそれを克服する力を持っていた。だから私はその手伝いをした。最初は大人しかつた清華、彼女に恋をした純君、そしてりつちゃんくん。素敵な二年半だつた。どんなに傷付いても人は救われることができるんだつて知つてから、もうこれ以上はないというほどの幸せに包まれた。私、おなかいっぱい。だから、私はこの世界に戻ることにした。

あのときはぐれた彼女は猫ということもあつてのんきにやつていたみたいだつた。気楽ね、と笑うと冗談半分に怒つてくれた。私は彼女を抱きかかえた。彼女はずいぶんと年老いてしまつたけれど、彼女の瞳は絶望に汚れてなんかいなかつた！ そのことがすごく嬉しかつた。私は彼女に道案内をしてもらつた。何度も説得された。でも、私は断つた。……もう、理由はわかるでしょう？ だから、私はここにとどまることにした。

「……そんなの、いやだよ」

律君は、首をだだつ子のようにぶんぶんと振り回した。

「ずっと、幸せにいよりよ。……ずっと、幸せでいてよ、ボクたちと一緒に」

私は、それでも首を振る。律君、罪人は幸せになつてはいけないんだよ？

「そんなの、間違つてゐつ、だつて、先輩はそれを強要させられたんじやないか」

それでも、罪は罪なんだよ。幸福になることを認められてはいけないんだよ。

「だとしても、せめて、純平のことを見守つてあげてよ。記憶から先輩が消えたら、純平は独りで生きよつとする、それがボクのわがままでも、見当外れでもかまわないから、純平の側にいてよ、美緒先輩だつて、好きなんですよ、彼のことが」

……まさか、ばれてるなんて思わなかつた。でも、この恋は土に埋めると決めたんだ。もう、引き返さないつて　あれ、でも、なんで、涙が止まらないんだう。一度溢れた涙が、頬を濡らしていく。どうしたんだろう、私、おかしくなつてしまつたのだろうか。どうするべきなんだろう、私は。

「ねえ、戻ろ」

まだ、幸せな時間は続いていくんだよ。ボクたちが前を向いていられる限り、ずっと、ずっと。だから、せつかく掴んだ幸福のしつまを離すようなことはしないで。それほど辛いことはないんだから。

「りつちゃんくんのくせに……あなたは、ずるいです」

何がずるいかわからぬ。けど、言わざるを得なかつた。私は、彼女に声をかけた。

「全部、元に戻せますか？」

彼女はお安いご用だと胸を張つた。その姿がかわいらしい、嬉しい。あと、ともう一つお願ひ事。

「この世界の扉に、鍵をかけてください」

この世界がある限り、私は逃げてしまつ。だから、さよならしな

くちゃ。彼女は頷いた。私は別れ際、一度だけ振り向いて、バイバイとつぶやいた。

後日。私は放課後の中庭に純君を誘つた。今日は部活もないらしく、訝しがりながらも了承してくれた。誘いながら顔が真つ赤になつてはいなかつたか、そのことがものすごく心配だつた。今日は穏やかに晴れ、今週中には梅雨明けするらしい。どうもおうか必死に考えながら彼が来るのを待つた。

「……んで、用事つて」

急に声がして私は飛び上がる。うわ、純君がきょとんとしてる！私は必死に言葉を紡いで、下手なりにも気持ちを彼へと伝えた。沈黙が数秒あつて、彼がうつむいた。

「俺は、また人を傷付けるかも知れ」

「そんなことさせません」

私は彼の言葉を遮つた。そして微笑む。

「知つてました？美緒、武術の達人なんですよ？そりや、えいやーつて！」

彼が顔を上げる。彼は泣き笑いで私を見つめた。

「じゃあ、そんときは俺のことぶつ飛ばしてくださいね、それはもう、てやー、つて」

私はその言葉に力強く頷いた。きっとその顔は、純君とそつくりだつたに違いない。

律君……ありがと。

駐車ガレージのシャッターが開くと、ファミリーカーが顔を出した。ボクの家のほうに横付けして停まり、ボクとかあさまはそれに乗り込んだ。

「二人とも、準備はいいかな？」

元気よく返事をする二人に、とあさまはそつくりさんだねえと苦笑した。手提げには水着と宿泊道具。車は目的地へ向かう前に、までは全員の集合場所へと走った。クーラーの冷気が強いとかあさまが設定をいじる。ボクは窓から空を見上げた。まぶしい太陽が、新しい季節がきたことを強烈に教えてくれる。

朝の道路は空いていなくて、程なく車は学校に続く坂の前に着いた。ボクは一旦車から降り、彼らを迎えに行く。ボクが挨拶をすると気持ちいいぐらいに爽やかな返事が返ってきた。純平がまたわけのわからないことを言い出す。

「今日は用意してきたんだよなつ、スク水」

「へつ、律、そうなのか！？」

「ま、まさかそんな日が来るとは思ってなかつたです……」

いやいやいやいや、そんなわけありませんからつーで、どうこう魂胆かな、純平は。

「いや、今のはちょっとした冗談なんだけど、な？」

「うん、わかつて。宿に着くまでに純平を処刑する方法を九十九個ぐらい考えとくから安心してね？」

頭を抱える純平に他の三人は笑つた。そんなこんなで半分冗談を交えながら雑談を短めにすませて、ボクたちは車に乗り込む。再び車は動きだし、今度こそ目的地へと向かつた。車中、隣に座つた清华さんはボクに話しかける。

「今日が楽しみで仕方なくて、一睡もできなかつた」

ボクはそんな彼女の頭をなでてあげる。短い時間だけど、おやす

み。清華さんはあぐびをして、まぶたを閉じた。それは本当に安らかな寝顔だった。ボクも自然と、眠りに就いてしまった。なんて心地いいんだろう、車の中つて……。

美緒先輩に肩を揺すられ、ボクたちは目を覚ました。時刻は昼前。食事をとつたら泳ぐことに。とりあえず宿にチェックインすることが優先だけどね。部屋で水着に着替えることになった。女性陣はシヤワールームで着替えることになった。淡々と言葉もなく三人着替え終え（とおさま、なんでブリーフタイプの水着なの……もつこりしてるよ）、三人が着替え終わるのを待つた。狭いだの何だの、きやつきやとした声が聞こえてくる。ぼそり、と純平が口にする。

「楽しそうだな、おい……」

頷き以外のどういう反応を示せばいいんだ。さらに時間がかかって彼女らは出てきた。かあさまはビキニでパレオを巻いている。清華さんはかあさまより露出は控えめながら、かなりの色っぽさだった。フリルが胸元を強調している。そして美緒先輩は……。彼女の姿を見て、反射的に純平がつぶやいた。

「お前、どこの小学生だよ」

セパレートタイプのスクール水着。よりによつてと/or/いうか案の定というか似合いすぎです。純平の一言に頬を膨らませる先輩。でも彼の言うことも一理あるよ、これじゃあ。奥のほうでとおさまが何かつぶやいていた。ちょっと、大丈夫?

「いい……すゞくいいよ……」

「さて、何がいいのかゆっくり聞かせてもらいましょうか」

かあさまがとおさまの耳を引っ張つていく。ボクたちは苦笑しながら一人についていった。

海の家のカレーを食べて、いざ海へ。すいすいと泳ぐみんながうらやましい。ボクはかなづちだから浅瀬を沈んだり浮いたりしていた。清華さんがこっちにきて、水泳の指導を名乗り出してくれた。唇が紫になるまで泳いで、疲れたところでボクと清華さんは海を

一旦上がった。他の一人はまだ楽しそうに遊んでいる。両親は大き

な日傘の下、お酒を飲みながらボクたちの様子を見守っていた。砂浜に三角座りをして、自分の町のそれとは違う、青く遠くまで広がる海眺めていた。境界線は、空に溶けてよくわからない。ボクは、彼女に訊いた。

「二人きりじゃなくてよかつたの？」

彼女は一瞬目を丸くさせ、すぐに笑う。その人なつっこい笑顔こそ、ボクの取り戻したものだつた。

「だつて、みんなといふのはうが楽しいじゃないか」

あの日、関わりを畏怖していた彼女はもう、どこにもいない。ボクはその言葉に安堵して、確かに、と頷いた。

初めてまして、蒼井碧です。

完結しましたね。

『小説家になろう』様で連載した小説で、この『たち×こねー』は始めて書ききった作品となりました。もともと、とある賞に出するために書き始めたもので、ろくに校正もしておりません。

いきなりの超展開でかなりの読者がついて行けなくなつたと思い、猛省しております。

ボクに連載は向いていないとはつきりわかりましたよ、ええ。プロット作ったのにこれだからね！

現在は校正中で、だいぶ内容も変わつております。

当然だと言えばそれまでですが、

逆に言えば、ここでしか明かされることのないハピソードもあるわけで。

なんにせよ、お楽しみいただけたら何よりの幸せです。

最後に、こくつかの方にお礼を言わせてください。

まずはブログにちりりと書いた構想を拾つてくださつた金谷さん。あなたがwktkしてくれなかつたらこれに着手することはありました。

せんでした。

そして彼女と出会いきっかけを作つてくれたCarnival N

ightsのメンバーのみなさん。

また、彼らを知るにはThe Wall Clocksにいなればありえませんでした。

深く感謝しておつます。

それから、『小説家になろう』様。  
このようなサイトがなければ、この作品が世に問われるとはなかつたと思います。

ますますの発展を期待しておつます。

最後になつて、「みんなさー」。

あとがきの最後まで呼んでくれた画面に向ひて、「あなた。よくぞ付き合つてくださいました。あることはじから読んでいるなんて、こうあまのじやへな方もいらっしゃるかもしれません。

ちよつと体裁の悪い小説ではありますが、何かしら感想をいただけるとありがたいです。

さて、これで終わりといつわけにはいきません。

しばらくは校正に追われるとは思いますが、落ち着いたら次の作品に手を出せうと予定しています。

それまで、しばらくの間お待ちください。  
また、お会いしましょう。

2009/06/06、蒼井碧

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5871g/>

---

たちこね！

2010年10月8日13時37分発行